

22
6
335

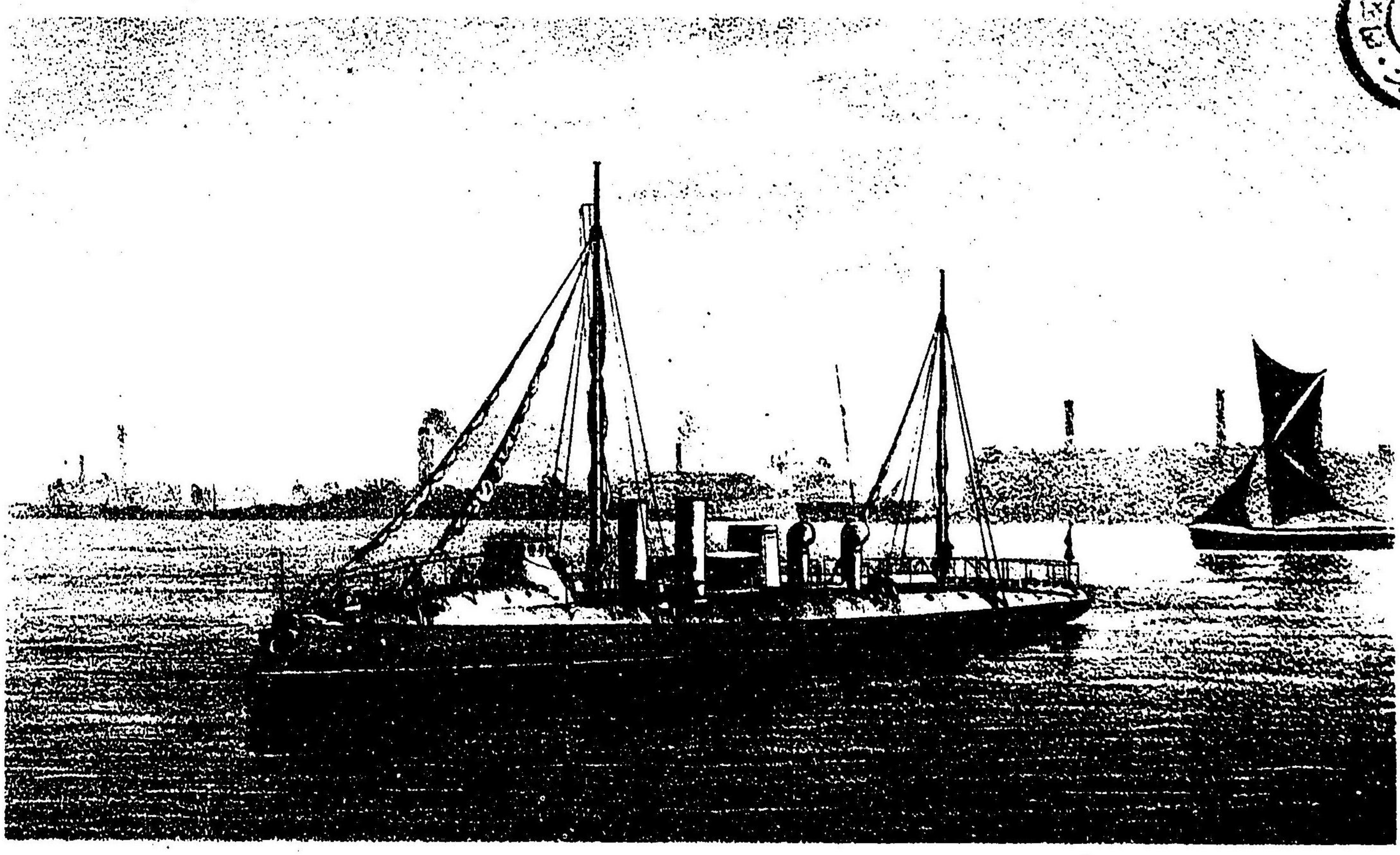
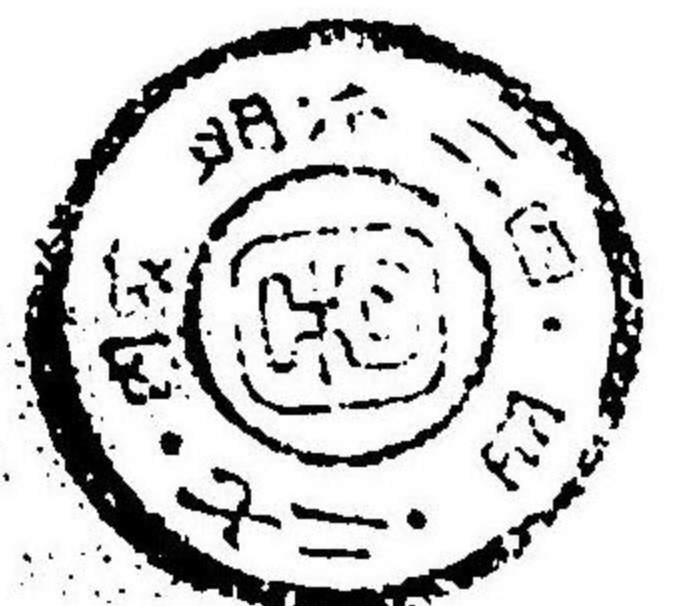
保氏水雷自叙傳

卷上

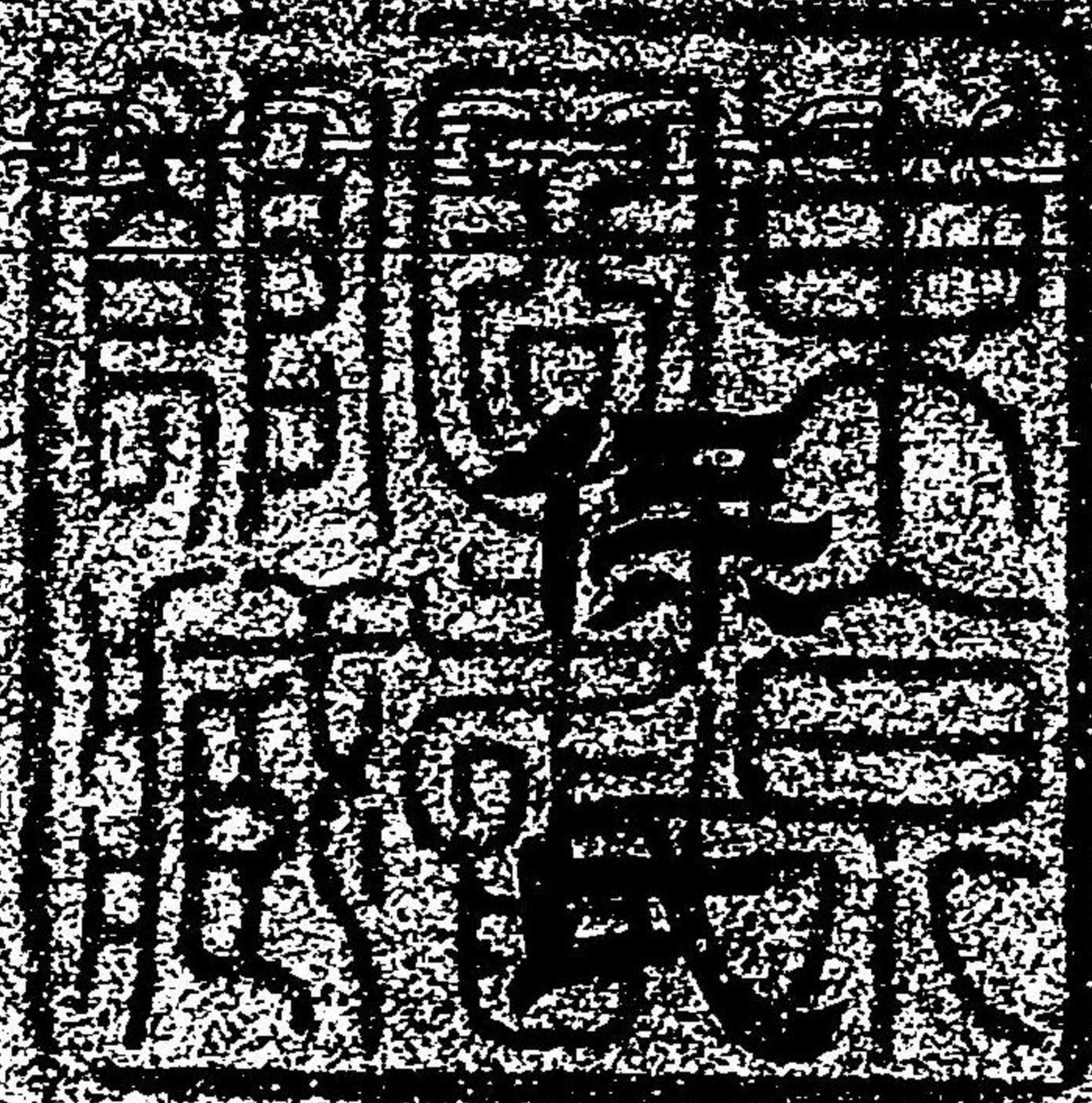


水交社

No 925/1111



巡洋水雷艇之圖



水雷自叙傳

明治二十年予水雷術を修めて軍艦迅鯨に在り年の盛夏該艦課業を休むに會ひ閑を得ると數旬頗る無聊に苦む偶々一書を得題してゼ、オートバイオグラフィ、オブ、エ、ホワイト、ヘッド、トルビードーと云ふ嘗て英國の雜誌エンゼニヤリング紙上に匿名にて掲けたるものなりしが察するに同國一海軍士官の筆に成れるものなるへし予把て之を讀むに素是れ一小戯作にして全篇の體裁唯僅かに長日の覺眠的文字たるに過ぎすと雖とも熟讀玩味するときは其之を作るの意決して偶然に出でたるものにあらざるを知るへく寓意諷誡も亦往々佳なるものあるを見るなり予即ち隨て讀み隨て譯し以て消日の具と爲せり爾來之を筐底に藏すると數年頃者出して之を見るに譯舛拙陋、章辭蕪雜識者の清鑒を瀆かすに足らすと雖も萬一之に由て著者用意の一端を讀者に知らしむるを得ば豈に啻予か盛夏消閑の資のみに止らんや

明治二十四年二月

譯 者 識

保氏水雷自叙傳

緒章

保氏水雷の眞に何者たるを知るもの少なきは獨り我英國のみならず世界到る處比々皆然らざるはなし只世に水雷火なる者のあるとは人々普く之を知ると雖も其の之を知るの度は極めて淺薄にして其の動作條

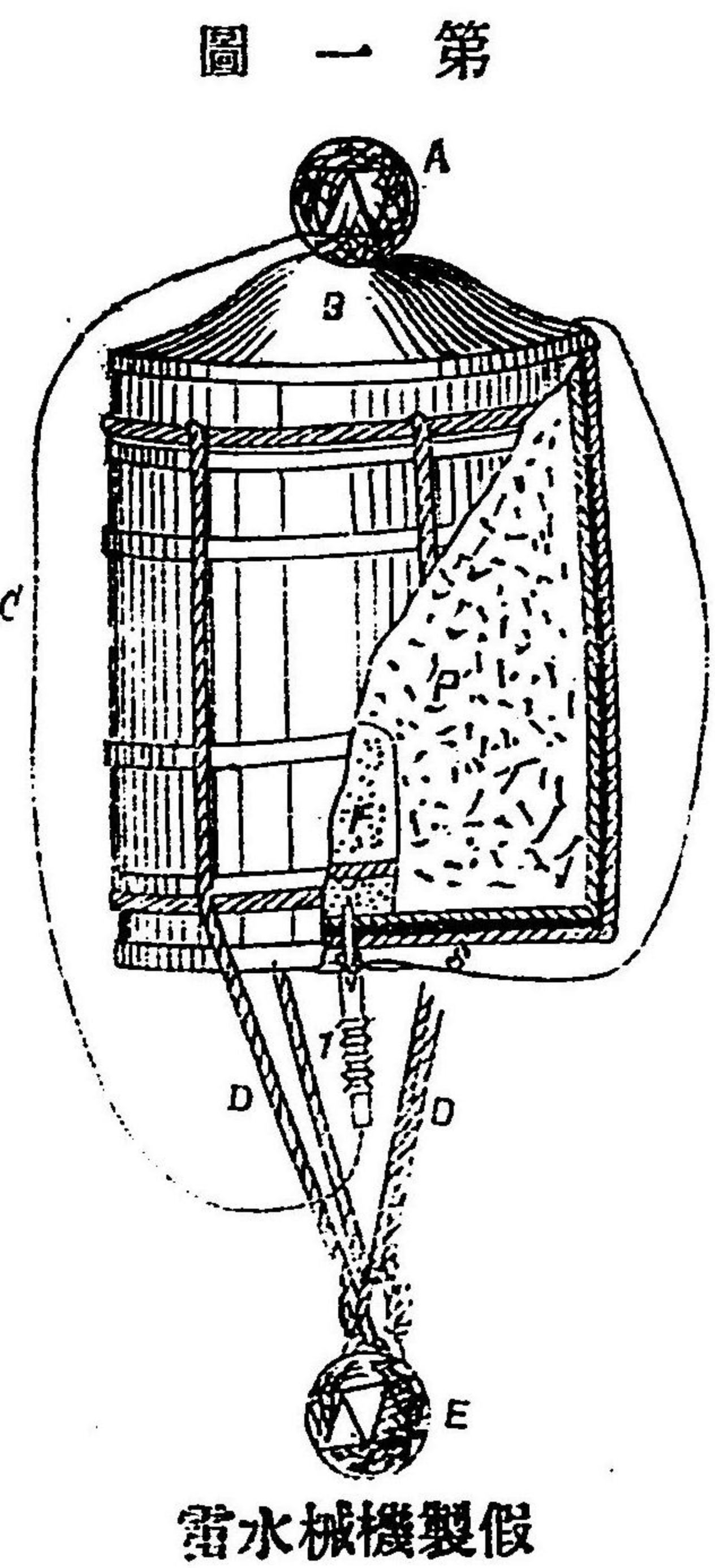


形を以て之を考へて能く堅牢なる鑊艦を粉碎し得べきも亦是れ爆裂彈に等しく偶中を僥倖すべし夫れ之を稱して「水雷」と呼び去れども（水雷とは元來千八百十二年より十四年に涉れる米國戰艦の時米人「ボルトン」氏外數人の相議りて創意製造せる一の小艇に命したる名なれども今日に在ては物種を以て水中に在て爆裂するものを云ふ）種類に因りて其用法を異にし隨て之を組成するの物質亦同じからざるなり

凡そ水雷の種族之を大別して二となす即ち靜止水雷、行動水雷是れなり

靜止水雷は其名の如く水中何れの處にか局所を限りて沈置せらるべきものなるか故に其効力を見んと欲せば必ず撃破らんと欲する船艦をして其上部に在らしむるか如く爲さるへからざるものなるも彼の行

動水雷は之に異なり人力に頼て之を敵の方位に運行せしむるか或は自ら之に向て行動するものとす
 静止水雷は之を「マイン」と稱し小別して三種となす機械水雷、海底水雷、電氣觸發水雷是れなり
 機械水雷は一旦之を布設したる後は其の危険の度を左右するを得ざるものなり然れども通例艦船の庫
 中に貯蓄する物品を以て組成することを得るか故に之を製作するも之を布設するも頗る容易なるの便利あり
 其の尋常なるもの、構造法大概左の如し

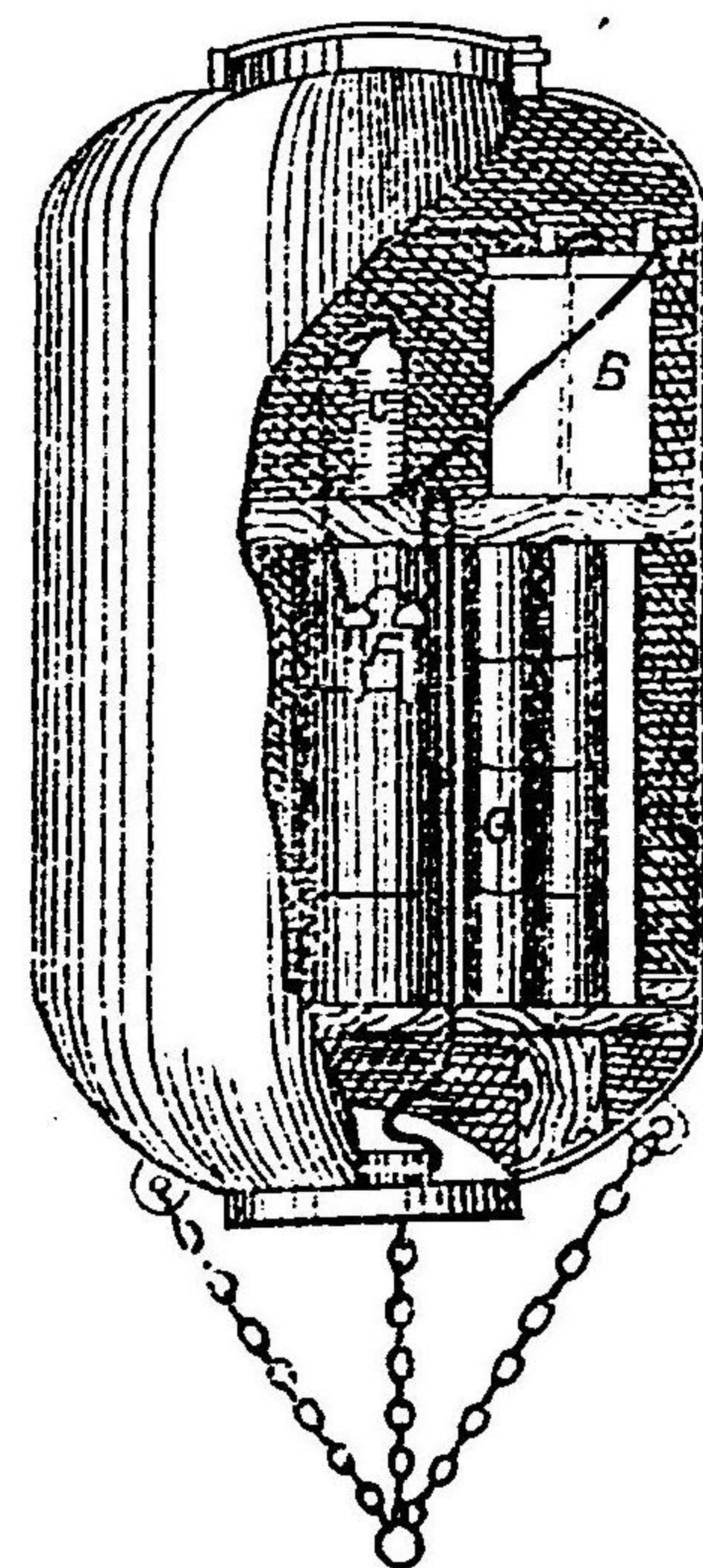


通常内外の二桶を用ひ二桶共に水の壓力に堪へ得べき様堅牢ならしむるを要し又殊に水の漏入を防ぐと
 に注意すへし爆裂物(重に火薬を用ゆれども時としては綿火薬を用ふ)は之を内桶に納め外桶は只之を
 堅牢ならしむる爲に被覆の用をなすものなり第一圖に示すが如く一木片Bの其の中心には稍窪みある

ものを桶頂に取附け其の凹處には彈子Aを按置す此彈子は糸條を以て桶内の摩擦管Cと相連絡す即ち爆
 裂薬とも亦不透水的接合の裝置にて連絡を有するものなり又た桶子を纏綿したる後ち垂下せるDDの索
 條あり之にも彈子Eを附着し以て桶子を直立せしむるの用に供す此の外之を其位置に保持するの繫留裝
 置あり又安全針なるものありて之を布設するの間之に與つかる人々に危害なからしむる爲めにす扱て此
 の水雷を何れにても布設せんと欲する箇處に沈め退潮の時恰も水面以下に在らしめ安全針を抜去るとき
 は該水雷は茲に始めて危険の性質を具備し敵味方の差別なく苟も之に觸るゝものを撃破するなり即ち其
 作用たるや物一たひ此の水雷に抵觸するときは忽ち其の頂上に在る彈子を打落し彈子は又落ち乍ら之に
 附着したる糸條に頼て摩擦管を引き以て水雷を爆發せしむるなり故に此の種の水雷は全く通路を梗塞す
 る場合にのみ適用するものにして事息んで後ち之を撤去すると極めて危険なるを免れず何となれば之を
 引揚ぐるに當て爆發するの恐れあればなり

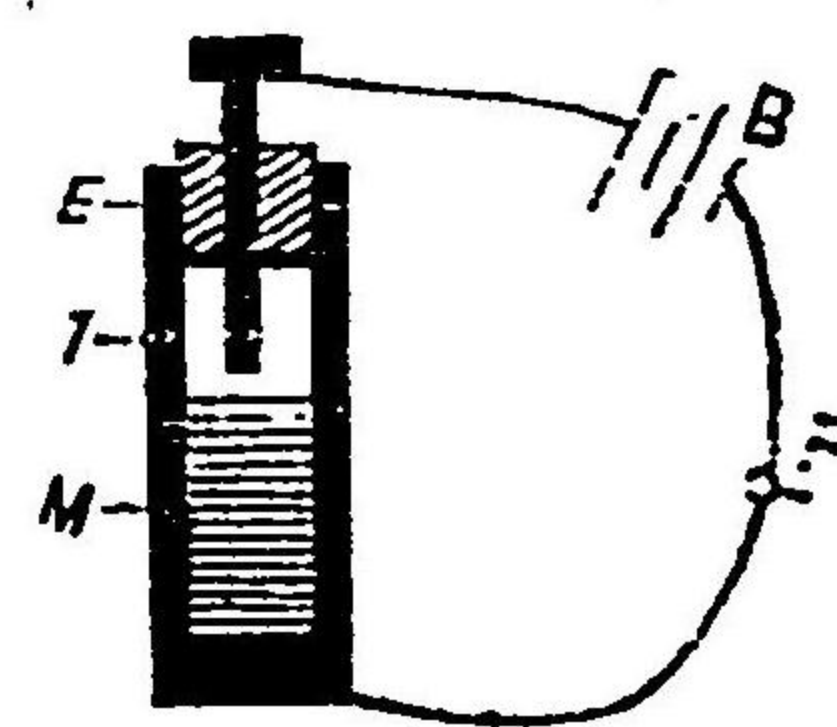
電氣機械水雷も亦其の一種にして其の構造たる之と同様なれども只其の異なる所は其製法稍鄭重なる
 の一事とす假令は前者は一時間に合せの爲め假用したる桶子を變して鐵罐となすの類是なり而して此の
 鐵罐は綿火薬七十封乃至八十封を裝填するに堪ふべきものにして其裝置は次に示す第二第三圖に就て知
 るを得へし又此の綿火薬の裝量は罐の全積を占むるものにあらすして罐内に種々の裝置ありとす先づ其
 頂上には一床板ありて床板上には二箇或は三箇のレクランシエー氏電器を置き電路を啓閉するの裝置も

第二圖



發火用電路閉置裝

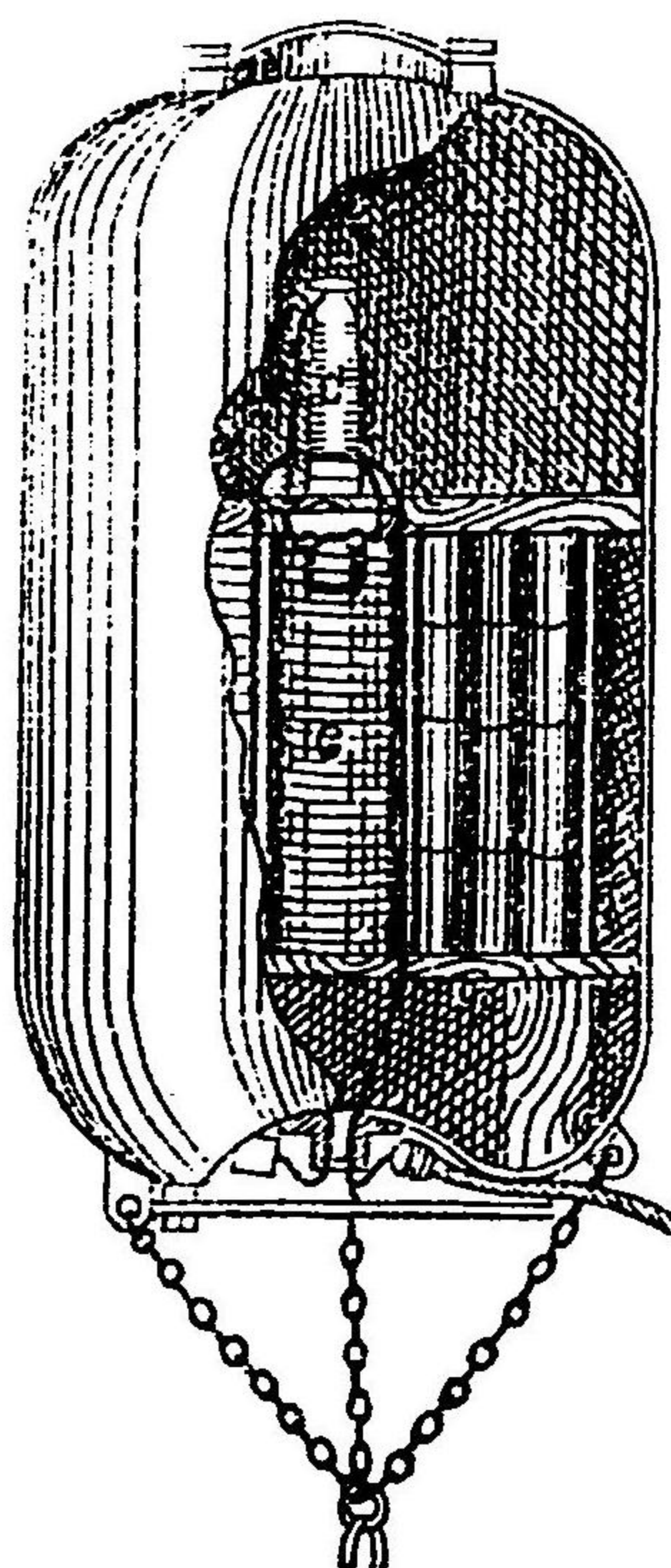
第三圖



電路閉置器切斷圖

亦備へあり是れ水雷の衝撞に逢ひたる時機械的に電路を通するの用に供するものにして之を電路閉置器と云ふ此の電路閉置器なるものは其の種類頗る多しと雖も第三圖に示すものは最も簡單にして最も有効なるものとす即ち金屬製の圓筒或は盆中に水銀若干を盛り其頂部を塞くにエボナイト製の口栓を以てし之に鐵釘の尖端を貫入せるものなり又銅線ありて釘頭と溝とを連続す而して圖に示すか如く電池と信管とは等しく此の電路内にあり今此の器を備へたる水雷撞着せらるゝときは即ち水銀は潑躍して釘尖に接し爲めに電路を完ふし水雷を爆發するなり又此の水雷を布設し若くは之を引揚ぐるに當り其取扱人を

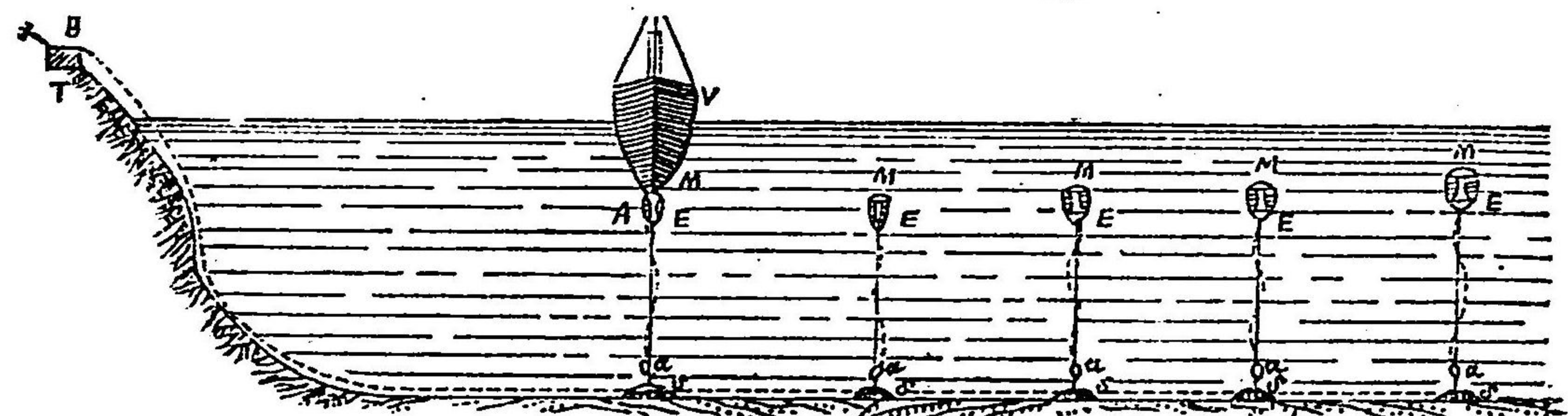
第四圖



電氣機械水雷

して危険を免かれしむべき爲め安全装置の設けあり然れども其危険を避けんとするには幾多の時間と綿密なる注意とを要するを以て實際に在ては一旦之を布設したる後には必ず危険なるものと知るべし

第五圖

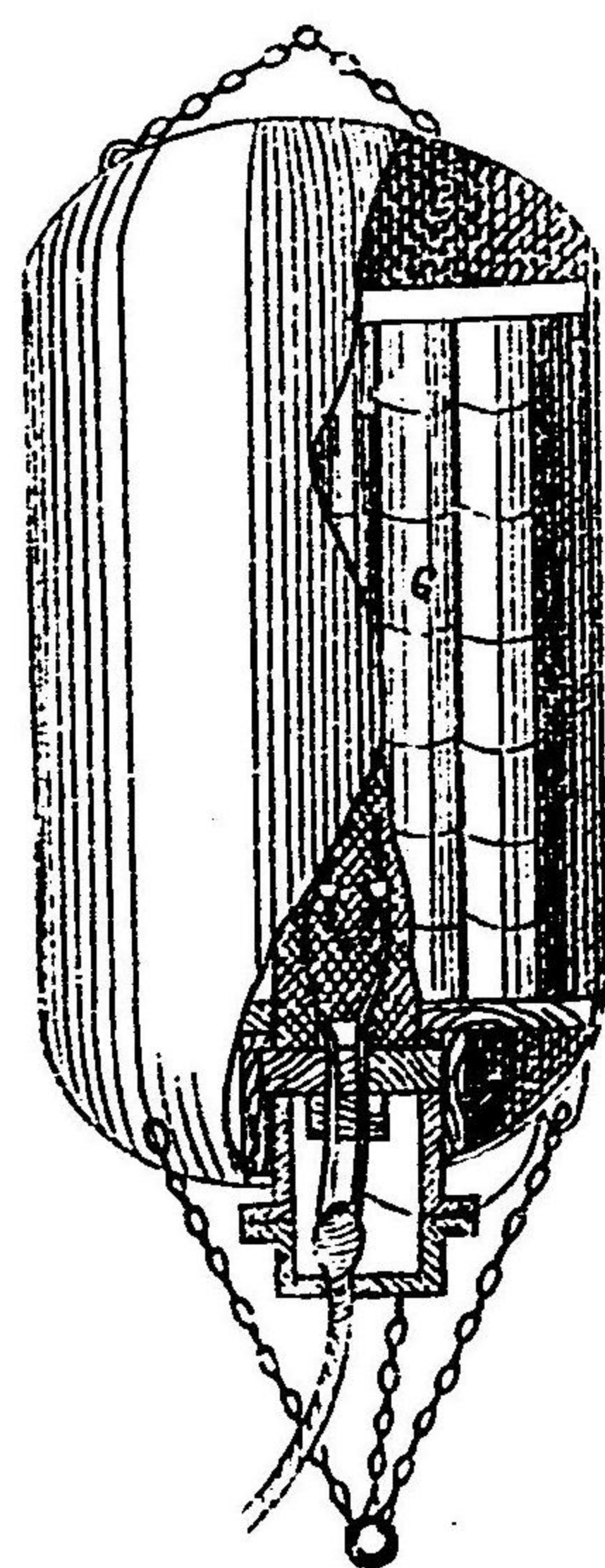


電氣觸發水雷列線

機械水雷は既に之を畧述したれば是より電氣發火水雷に説き入るべし此水雷は電氣機械水雷と構造を同ふすと雖も只其の異なる處は電池を罐内に置かすして陸上に置き隔離線を以て之を連続するの一事なり第五圖は該水雷の一例を示すものにして一電池を以て其の多數を發火し得るを見るべし各水雷より出る所の線と本幹線と相接する處に斷電路器なるものあり此の器たる尋常の白金線信管を密封函の内に納めたるものにして其功能は其名の如く水雷爆發したるの後ち之を本幹線より斷隔するの用をなすものとす假令はA上を通過する船一水雷に撞着するものとせんに電路は其の瞬間に於て本幹線斷電路器及び該水雷を通して完ふせらるゝか故に電池より來る電流は斷電路器内の信管を發火せしむると同時に水雷の信管を發火せしむ斷電路信管已に發火すれば線は直ちに此の處に於て斷絶し其の端末は不透水的の函内に在るの故を以て隔離せらるゝなり若し此の斷電路器の設け

なきものとせんに水雷を發火し敵艦を破壊するに當り其線端は露出したる儘水中に在て斷へず電池間と循環電路を爲すに因り他の水雷、撞着せらるゝも之を發火するの力なきなり機械水雷に比して此の水雷の優る所は發火電池と其線を絶つときは全く危害なきにあり然れども隔線線を要すると甚た多きを以て其の費用の莫大なるのみならず之を布設するに當りても力を勞するとの多きは免れ難き所にして加ふるに敵の搜索に遇ふて電線を切斷せらるゝの恐れあり又該線中に僅かの破綻あるときは布列せる水雷全隊の用を廢却するに至る故に此種の水雷を用ゆるには務めて近距離に電池置場を設けると肝要なりとす

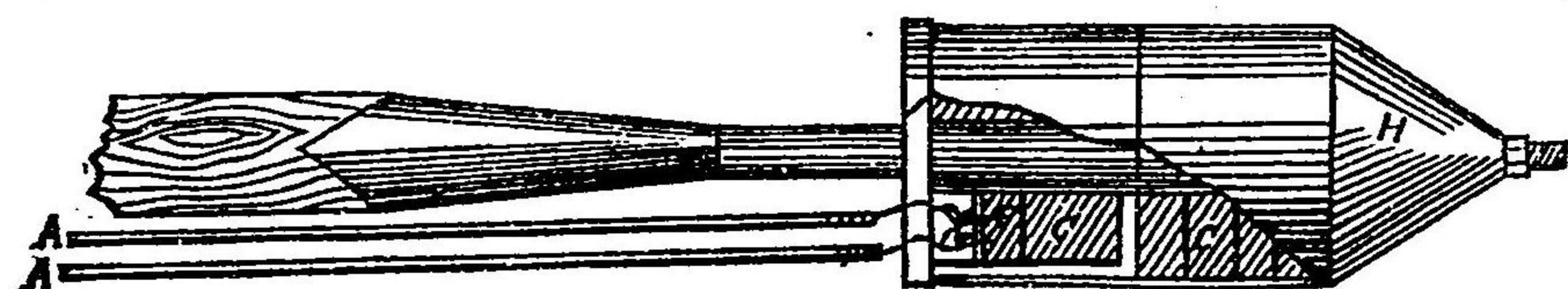
第 六 圖



海底水雷

從來使用せる（使用とは英國海軍にて使用するの意）海底水雷は綿火藥五百封を裝填するものにして通例若干量の餘剩ある浮昂力を有する鐵罐より成り水面より適宜の深さに浮駐せしむるを得へし而して之を留置するには重量の錘量を以て適宜の位置を保たしむるものなれば其の名海底水雷と稱すれども、其實海底に密着するにはあらざるなり蓋し綿火藥の裝量に應じて其の最大實効を得るの水深も自ら相異り

第 七 圖



外裝水雷

其裝量愈多ければ其の深さも愈増加せざるへからず今其一例を舉ぐれば綿火藥五百封のものに適當なる水深は三十五呎乃至四十呎とす此故に之を十尋の水深に布設せんとするに當り水面より適當なる處に置かんとするには三尋乃至四尋の長さある繫留索を要するものあり

此種の水雷の内部には只二個の信管を備へ隔線線を以て之を發火衛所と連續し且つ觀測人ありて之を發火すると猶ほ電氣觸發水雷に於けるか如し但し水雷の布設しある位置は豫め發火衛所に駐在するもの、詳細知悉せざるへからざるは論を俟たざるなり而して發火衛所は二ヶ所に設くるを要す是れ觀測人等をして敵船の方さに水雷の上に来れるを視定め易からしめんか爲めなり又時ありては二個或は三個の水雷を一線に聯接することあり此の場合には一度發火輪を壓下するときは皆な一齊に發するものと知るべし

茲に予が一族中に最も重んずべき一支流ありて省畧するを得ざるものあり即ち予か從兄なる圓材水雷スプリングボイラー是れなり此種の水雷が米國戰爭の時に於て效はしたる功績は大に水雷術の發達を獎勵し遂に予輩の大人ホワイトヘッド君を勞して之を完成せしめ今日予輩あるに至れる所以なり

外裝水雷一名圓材水雷

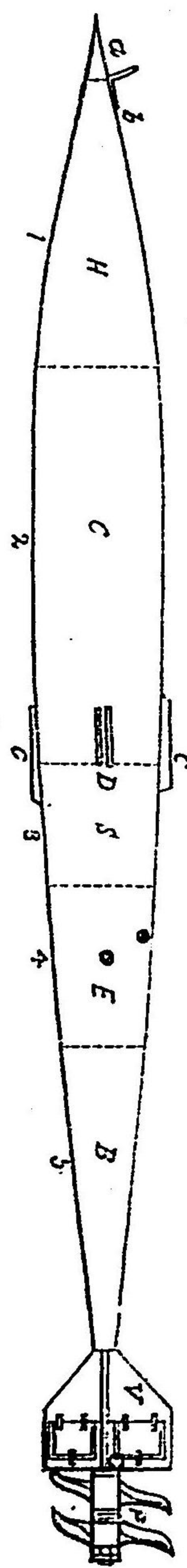
吾か海軍にて使用する外装水雷は綿火薬三十五封の装薬を有するものにして之を二罐に分有するものなり罐の中心には圓孔ありて長桿の鐵尖端を貫入するの用に供す蓋し桿の端末に圓錐形の鐵被を附するものは能く拉張力に堪へ得せしめ以て之が損壞を護せんか爲めなり此水雷を發火せしむるには其桿を突き出すへき短艇若しくは艦船より電氣に頼て之を施行するの装置あるなり然れども此には只短艇に於ける用法を解説するに止むへし但艦船の低位圓材若しくは砲艦に於て使用するときも亦同法に依るものとす抑も短艇に於ける用法は平素不用のときは桿頭に水雷を附着したる儘艇縁に收め置き之を使用するに當り前面に突き出すときは艇首より二十五呎許に達し水面下十呎に至るなり(第七圖を見よ)而して此の水雷を以て敵艦を襲撃するは概ね夜攻を利用するものとす其の方法下に説く所の如し先づ蒸氣力を以て小艇を敵の方向に進前し稍く近接するに及びて水雷僅かに水面に到るを度とし桿を押し出すなり愈々接近するに及びては猶ほ桿を繰出し前に言へる如く桿頭の水雷を水深十呎の處に置くを以て適度となす而して敵の艦側と相觸着するや之を司るの士官は直ちに發火輪を壓下し水雷を爆發すへし此時短艇は免れ得るの機會あらは直ちに引退くへきものとす

第一回

是よりは予か親しき一族の事に説入るへし世人の熟知するか如く予輩はヒュイメのホワイトヘッド氏の

爲めに世に出たされたるなり次に示す所の圖は予輩の肖像にして其の形貌酷だ魚に類し水中を推進めらるゝは尾端に在る複螺旋の運動に依る
吾か族の初代なるものは身の最大徑十六吋、其の長さ十六呎ありて其の重量は大約三百封内外なりしならん此の種族は單螺旋を有するものにして當今の後進輩に比すれば其の行くと頗る遅緩にして二百碼の距離すら僅かに十二節半許の速力にて進行せしなり故に若し之れを遠距離に行らんとするには其の速力愈々遅緩ならざるを得ず是れ職として其構造の呼吸斷れ疾き様に作られたるに因れり今予輩か如斯説き出るも未だ予輩の稟質と骨格とを了解せられざる諸君に向ては或は大早計に失するやも測られずと雖も下に説く所を見て以て悟る所あるへし

第八圖



予ノ肖像

抑も予は十四吋ウールウ井ッテ水雷なるものにて身の長十七呎あり元來吾か種族はヒュイメにて製造せられたるものなれ共英國政府嘗て之を製造するの秘傳を譲受けたるを以てウールウ井ッテに於て一の製造場を建設し自國用のものは此處にて製作するととなれり其後漸く工事の進歩するに従ひウールウ井ッテとヒュイメとは改良の方向を異にし遂に局部、状態に於て差異を生ずるに至れり是より後に説き出る

處を參觀あらは之を知られんと固より容易なりとす予か通稱は第二號十四吋ロヤル、レポノートリー、ホワイトヘッド水雷と云ひ十四吋形式水雷の内最も初めに製造せられたる第一號水雷に改良を加へたるもの即ち是れなり予は讀者諸君をして予の結構を充分に會得せしめんには予か全軀の各部を解放し一々之を説明するを厭はずと雖も熟之を考ふるに是れ亦極めて味ひなきに似たり之を人身に譬ふれば今ま其傳記を叙せんとするに誰か其軀を解剖し四肢五官の圖解までも示すものあらんや其記する所は只其の行爲の因て起る所の特性を明にし以て其平素の作動に照應せしむるに止まるなるへし故に予も亦此の如くせんと欲すれども如何せん予は人類の如く廣く世に知られ廣く世に用ひらるゝものにあらざれば多少軀中の事に説き及ばずんば能はず

予か全軀は五部に區隔せられ第一部は即ち頭にして戰場に臨むときは此内に綿火薬を裝填す頭と胴とを結合するには銃劍式接合及び螺子を用ひ斷續自在なるか故に發射演習等の際に危險なる頭部の不用なるときは之を解放し其内より綿火薬(錫函入)を取出し之に換ふるに同重量の木片を納めて故の如く取附くるなり予は世人の頭顱も此の如く取替へらるゝものならば極めて便利なるべしと思へり世間往々交情靜温なる日に於て腦裡に爆發性の思想を蓄へ談話の時々電火を洩しなから朋友の間に往來するの人物を見るに少からず斯の如き頭腦假令幾個破裂するも予輩の頭部の如く大なる損害を來たすと能はざるは言ふを俟たずと雖も若し吾輩の頭部の如く解放たるゝ様に作られ入用の時に至るまでは其の爆發性の思想を別に除き置くことを得ば豈一層の便利ならずや

予の鼻及髻は予を爆發せしむる主宰にして鼻は稍や長き一の桿に連り桿の端末に尖點ありて之を撞子と稱す又た發條の裝置ありて之に接続し稍や小銃打金の發條に似たり今鼻部を引けば俗に起鷄頭と稱して發條は短縮せらる此の時撞子の尖端は雷管を距ると二三吋にして相對し雷管の周圍には乾燥せる綿火薬ありと知るへし扱て予の鼻端と髻とは恰も曳金の如き用をなすを以て鼻端を打つか若くは髻末を引くときは發條弛み撞子は雷管を打て裝薬を發火せしめ爆發を起すものなり然れども若し綿火薬及雷管を裝せざれば予は何事をも爲すことを得ず此の時には知らず識らず身自ら其の爆發物たることを忘却するに至る

茲に予の軀中に在りて特に説明を要する一物あり即ち安全楔と呼ぶもの是なり一度予輩の頭中に爆發物を裝填するときは微く物に觸れても直に爆發するの傾きあるか故に此の安全楔を備ふるものとす若し之を鼻と髻との間に挿入するときは假令物に撞着するとあるも發火するの憂なく宛も大馬の口を箝制する口籠の如き効用をなすものなり此楔は針線にて尾部に連結し予輩か打出されたる處より若干の距離に達したるとき自然に抜け出るの裝置たり予は斯の如く最も危險なる性質を有し自ら大に之を恨むと雖も前に云へる如く此れ只爆發物の予か頭中に存在する間のみ此の間は實に如何にせば可ならんかと身を置くに處なきか如く感へるなり

第二部は空氣室なり此の内には毎平方吋に千封程の大壓力を有せしむべく搾縮せる空氣を貯藏す是れ即ち運動を起すの基本となるものにして之を填充するには別に高壓空氣を有する氣蓄器^{ヒレボアー}を備ひ置き之より不還瓣^{リシタルウエック}を過て押入るゝなり

第三部は水雷に適宜の水深を賦與するの装置なれども憾むらくは之を詳細に説去るを得ず如何となれば予輩が最初に組立られたるの時此事件は決して他に洩さしることを誓言したればなり其之を秘密にするは先きに英國政府がホワイトヘッド氏より其秘訣を買受けたる日に始まりしとにて之を與づかり知るべき人々は現に水雷を製造し若くは之を取扱ふに樞要なる輩に限るへしとの契約ありしなり故に當時に在ては各艦船に於て之を知るものは艦長、砲術長若くは水雷長、機關長、水雷主機及び水雷工師の五人に過ぎざりしも其後に至り之を知るもの、範圍稍く廣まれるなり是れ予輩に取ては大に慶すべきことにて斯くありてこそ細心注意を要すると最も多き保氏水雷も始めて過ちなかるべきなり何となれば人々皆予輩の行為に關し可否を論ずるとを得るに至らば予輩の成果に益を與ふるや實に鮮少ならざるべければなり此秘密室の背部は則ち機關にしてプロザード式^{スライシンドレインゲン}の三圓壇機關を備ふ壓搾空氣は空氣室より來りて之を回轉し其實力は六十馬力に至るを得へし而して空氣室より出て來る空氣は秘密室中にある一管を通過し來て機關に達する前に減壓瓣^{レチエーシנג、ゼンゲ}に入り此處にて機關を運轉するに適宜なる程に其壓力を減するなり若し此の装置なきときは初め機關の運動を起すとき空氣は強大なる壓力を有すべきも之を消費し去るに隨ひ

漸々に壓力を減するの恐れあり然るに之を減壓瓣にて加減し使用するときは空氣は裝填せられたるときはの壓力より低減したる壓力にて機關を動かすか故に始終同一なる壓力を以て駛走するを得るなり又空氣室と減壓瓣との中間には一の塞瓣^{ストップヴァルヴ}ありて予の後部に突出せる曳金^{トイガル}に連結し之を以て機關内へ送るべき空氣の斷續を司るなり

第五部は浮泛室^{フオヤンシ、チエンス}にして此内にあるものは只螺旋軸^{スクリューシャフト}のみ此室の必要ある所以は水雷に浮き揚らんとする力を與ふるか爲めなり

此部の背後に當る處は予の尾部にして此處に垂直、水平の二舵を置く而して此背後に螺旋あるなり垂直の舵は螺旋の爲めに生ずる針路の誤差を平均する丈けに若干の小角度に定置さるゝものにして該誤差は重に速力に關係するものなるか故に速方小なるときは其の差愈々大なるものと知るへし是に於てか減壓瓣を用ひて機關の圓壇に進入るべき空氣の壓力を平均するの必要なるを見る螺旋は鋼鐵製にして其の前にあるものは螺旋軸に附着せらるれども其背後に近接せる第二の螺旋は別に齒束の裝置ありて前者とは反對の方向に旋回するを以て力を損失すると極めて少しとす故に予が全力を奮ふに於ては一時間に二十節を駛るに堪ゆへし近頃世に出たる妙齡なる兄弟等の内には計算上にて二十五節を駛り得べきものあれども實際に於ては二十節より多く駛り得べきを信せず爰に又駛り得べき限り駛り終りたる末には浮泛室に水を充滿せしめ沈没するの裝置あり予輩は飽までも其職分を盡し爆發せられて而して後ち終るを希ふ

にはあらされども爆發は是れ予輩か世に出たる本分なれば最も喜ぶべき終焉と謂はざるを得ず故に今陳述したる沈没の件の如きは予輩水雷社會か甚だ忌避して免れんと欲する所なり讀者は後らに至りて知らるべしと雖ども予も亦嘗て不幸にして一度此の奇禍に罹りたるも幸に早く救濟せられたる爲め予の構造を痛く損傷するに至らざりしなり

予か自傳に入るに先ち尙ほ解説すべき三事あり即ち機關を發動せしめ安全楔を抜き去る事、機關を停止し再び楔を挿入する事、及び所望の場合に水雷を沈没せしむると是なり

爰に先づ距離車カレンダーの事を説置さるべからず此の距離車と云へるは甲乙の二十齒輪より成り其の軸は水雷の水平軸に垂直線をなし螺旋の少く前方に附着せらる甲齒輪は螺旋軸上の無盡螺エンドレススクリューに喰込み予か四十碼(假令は)を駛る毎に完全なる一回轉を爲し乙齒輪は又た甲齒輪にある突子スナップの爲めに動かされ其の一回轉する毎に進移すると一齒なり又た此の乙齒輪には二個の突子あり第一は初めに楔を抜き去らんか爲めに設けらる第二は駛行の終りに齒の曳金の爲めに用をなすなり即ち下に説くか如し堅牢なる一桿ありて楔より出て曳金に至る但し此の曳金は塞瓣と連絡せるものと知るべし又一針線ありて彼の桿より出て前に述べたる突子の一個に至れり塞瓣も亦一針線にて發條(尾部にあるもの)に連結す而して此發條は水雷を發射する前に短縮し置くものとす故に其の伸張するに當ては該針線を引き塞瓣を閉ぢ(即ち機關を停止す)而して同時に運動を桿に傳へて安全楔を挿入るべしなり人或は云はん水雷は已に遠距離に在り況んや水中

を駛走するの時に當て如何して斯の如くなるを得んやと今其理を語らん曳金は元と尾部にある發條と連接し乙齒輪の第二突子旋回し來て發條を壓するときは之か爲めに弛み以て水雷を停止する等の作用をなすなり以上説く所のみにては未だ悉く判明し難かるべしは尙ほ略述して以て之を明亮ならしむるを努むべし初め機關は曳金を引き開かれたるか爲めに發動せしものと假定せよ即ち螺旋は旋回をなし距離車の甲乙車輪は回轉し居ると勿論なり去れば第一の突子は彼の楔に附着せる針線を緊しく引き始め甲齒輪か二回轉をなす間に全く之を抜け去るなり是れ恰も水雷か八十碼を駛行するの時間に同じきものと知るべし斯の如くにして楔一たひ其鼻より抜け出るに於ては水雷は直ちに危険なるものに變じ又針線は自然に突子より脱するものとす

第二の突子は發射前に水雷をして駛り達せしめんと欲する距離に相當せる齒數丈け尾部曳金テイルドラッグより離し置くなり假令は之を四百碼の處に到達せしめんとするときは突子をは十齒を隔て曳金の上方にある様に乙齒輪を定め置かんとを要す左すれば乙齒輪は此の十齒丈けを回轉し終れば第二突子は曳金を壓し水雷を停止するものなり

予は前に或る必要の場合には水雷を沈没せしむるを得べきことを述べて置きしか之か爲めには塞瓣に附屬せる針線と浮泛室にある小瓣との間に格別なる連結をなすものとす若し此の連結をなし置けば彼の尾部にある發條の弛むとき此の小瓣も亦開口し海水は之より突入するを以て浮昇力は亡失して水雷は沈没す

予は已に讀者諸君か予の軀部に關する事項を了解せらるゝに必要なりと思考するものは述へ盡したりと信するか故に是れよりは予か來歴を説き出で以て諸君の一察を博せんと欲す

第二一回

前にも述たる如く予の産地は「ウールウヰッチ」なり予幼年の間は此處にて生活せしか吾か種族の常として雲時か程に成人となりたれば時日移さず諸部の工合構造の完否等を試験せられたり而して此の試験も形の如く濟みたれば同族の數輩と共にボルツマウス造船所内の倉庫に派遣せられ此の處にて艦船の需用を待つことゝはなれり予は庫内に滞在中閑暇ある儘に身の周邊にて執行はるゝことゝもを聞見せし折柄日々多くの海軍士官庫内に來り予輩の同族中誰れ彼れとなく分解し若しくは組立等をなせしか是れ當時保氏水雷取扱法を練習しつゝある者にして予は此の人々の下たせし批評を聴き大に智識を擴めしこともあり往々愉快を感せしことも鮮なからず殊に初めて予輩を目撃する人々の甚だ喫驚する状態を見るは實に愉快に堪へざりしなり當時予は僅かに製造場より出て來りたる妙齡の際にして深き慮りとてもなく只血氣に任せて歳月を消費せしかば左のみ感覺もなかりしが今日に至り當時を回顧すれば轉た感慨に堪えざること多し畢竟するに予は常に何れも能く吾か種族の利害得失を明知せる人々の配下に在りしものなり去れば他日に至り予の志望元氣は如何に賞美するに足るへきも若し予輩を取扱ふの手術サキ未だ熟せざ

る人々に交附されたる曉には其取扱上に如何なる差異を感すべきや等のとに至ては實に無心にて經過せしなり

予輩は何れの日か倉庫より出され如何なる艦船に備付けらるゝやを思ひ屢々杞憂を懷きたるとあり近時に至るまでは諸艦中に在て保氏水雷を備付くるもの實に少數なりしか曾て之を有せざるものも漸々之を搭載するとなりしを以て予輩は長く庫中に呻吟するをば免るゝに至れり

當時倉庫を管領せしはメロル氏と呼へる大機關士にして其職務には頗る曉通せる人なりき氏は己れの手術を世間に知らしめんと欲するの情甚だ深き故に常に水雷構造の質問に對し滔々と辨説し聴く者をして大に其技倆を感服せしめたる多し予は一日偶々氏と其の屬僚との談話を傍聴せしに今回英谷艦隊の旗艦フヒヤノト號に十六吋の水雷八個十四吋のもの四個を搭載すへき計畫なるが何れの水雷を送らば可ならん歟との評議にてありしなり

予フヒヤノト號は有爲の艦たるの盛名を聞くと久し然りと雖ども該艦の副長なる某氏は水雷、砲術の二者に對し少しく冷淡の傾きありて只其の巍々堂々として壯麗なる外觀と水兵等が檣上に於ける操練とを以て艦船の實力を計較するの人なりと云ふとを聞けり故に同氏の思想は敢て欽慕せされども該艦の砲術長(水雷長の乗組なし)及機關長か水雷術を練習して其の教程を終りたるは恰も此の時にして殊に砲術長か匪勉其事業を講習せしは予か最も感嘆して措かざる所なれば今まメロル氏と屬僚等か歩を予か前に

止めて此水雷をも送らんと語れるを聞きしときは心竊かに喜悦に堪えざりき
抑も此のフヒヤノート號と云へるは極めて美麗なる船にして絶群と稱するも敢て過褒にはあらざるも只
其の缺點とする所は兵装の完全ならざるに在るなり是れ製造以來既に多くの歳月を経たるものなるを以
て稍、世の進歩に後れたるものと知るへし該艦は素より保氏水雷を積載すべき計畫を以て作りたるもの
にあらざれば予輩か乗込みたる曉には不便も亦少からず故に姑息の工事を爲し僅かに支障なきまでの準
備をば整ひたり

諸予輩は函詰にてフヒヤノート艦の繋留せる棧橋まで送り出されたるか該艦は不意に何處へか出帆を命
せられたるものと見え予輩は急ぎ艦内に取入れられ未だ確實なる吟味をも經ざる車臺、附屬品に伴ふて
經驗に富まさる弱冠の士官輩に隸して職務を盡すべきことばなれるなり後にて思ひ合はすれば此時艦内
には水雷を水上より發射したるを目撃せるものとは一人もあらず諸士官の卒業せるものあるも極めて
簡短なる教程に止り此の類の實地は盡く之を省察したるものにてありしなり閑話休題予は棧橋に横れる
函中に身を潜めつゝ是れよりは何事の起るやらんと只管耳を翫て窺ひ居たるに忽ち棧橋の上にて二様の
聲にて對話せるを聞出せり
一人の聲として

ハンド殿此處に艦内場處塞けの厄介物か來り居るぞ吾等は又々艦内を整頓するに面倒を増さねばなら

ぬ

と後にて此の人はフヒヤノート艦の副長ジョンカルセム氏なりしとを知りぬ
他の一人之に答て

仰せの如く漸くのとにて積込む様になりまして悦ばしく存す直ちに艦内に取入れる方宜しきにはあら
すや

と是れ例の砲術長にして其の姓をハンドと稱する人なるか軀幹の短矮なるより人皆ショルトハンドと呼
ひ做せるなり

副長 是非共に受取らずには叶はぬとならん急ぎ積込まるへし

ハンド 畏こまりぬ何部の者共を使用すへきや

副長 何部のものとな言ふまでもなく砲術教官等とエー機關室の下士官よ

と大奮發の積りにて言添へたり

此の時砲術長の笑聲を聞きたるか平常より副長の氣組を呑込み居るものと知られたり

ハンド 副長閣下少しく尊考を煩はし度し水雷は每個凡そ五百封の目方を有し居れり(此の言頗る誇
大に失するも副長は審かに之を知らず)且つ本艦は一時半内に出帆する筈には非らずや尙ほ其上に荷
を解き之を下甲板に卸さなくては叶はず到底三名の人員にては事足り申まじしくとも四十名は入用の

と後にて此の人はフヒヤノート艦の副長ジョンカルセム氏なりしとを知りぬ
他の一人之に答て

仰せの如く漸くのとにて積込む様になりまして悦ばしく存す直ちに艦内に取入れる方宜しきにはあら
すや

と是れ例の砲術長にして其の姓をハンドと稱する人なるか軀幹の短矮なるより人皆ショルトハンドと呼
ひ做せるなり

副長 是非共に受取らずには叶はぬとならん急ぎ積込まるへし

ハンド 畏こまりぬ何部の者共を使用すへきや

副長 何部のものとな言ふまでもなく砲術教官等とエー機關室の下士官よ

と大奮發の積りにて言添へたり

此の時砲術長の笑聲を聞きたるか平常より副長の氣組を呑込み居るものと知られたり

ハンド 副長閣下少しく尊考を煩はし度し水雷は每個凡そ五百封の目方を有し居れり(此の言頗る誇
大に失するも副長は審かに之を知らず)且つ本艦は一時半内に出帆する筈には非らずや尙ほ其上に荷
を解き之を下甲板に卸さなくては叶はず到底三名の人員にては事足り申まじしくとも四十名は入用の

となるへし

副長 足下水雷の爲めに何處より四十名の人員を得らるへしと考へらるゝにや本艦の乗組は只僅かに九百人なり是より繋留鏈を解くの用意をせねばならず(此れこそ四十名の人員にて事足るへし)其れに今夕はピットヘッドにて石炭を積み入るへき筈なれば豫め上甲板の取片附もなし置ねはならぬなり足下は常に艦内の物員は足下の大砲と水雷の外には事業なきものと考へらるゝと覺へたり大砲、水雷、太平無事の日に於て何の用かある吾等は戦争には行き申さず去れば却て之を陸揚げせんところ拙者の望ましく存する處なり

と喚めきたり

ハンド 仰せにはあれ共此儘差置く譯にも參るまじ取入れの爲め砲員を使用致しても宜しきや

副長 相成り申さず

と云ひ捨て彼方へこそは歩み去りぬ

此の時ハンドは霎時か程は其の後影を眺みて立居たらんと思はるゝか俄かに艦内のものに打向ひて

鳥渡誰れにか此函を縛るストロップを持って來させよ且つ直ちに取入れの人員をも用意せよ

と命すれば

畏こまりぬ

と云ふ返辭に續きて號笛の音するよと覺えしか

兩舷直の砲員整列

暫くして號笛を鋭く短調に吹きて

水雷取入れ方

と同様の音聲にて怒鳴るを聞きたり去る程にストロップ(各位は知られもせんか是れ只函若くは物件の周圍に纏はるゝ索片にして容易に之を引揚げ用の装置に鈎せんか爲めなり)が函の周圍に掛りたりと覺ゆる間に予か身軀は漸々と空中に吊上げられ次て艦内に吊卸ろされたるか茲に於て函中より取出され今度はトングと云へる鑢製の挟み金具にて確と攫まれ尙ほ下方の水雷床と云ふ處へ卸されたり此處にて予輩の頭部は胴軀より取離され之に綿火薬を裝填せられたる上火薬庫内に納められ又胴の方は水雷室の板の間に排列されたり

此水雷床は元來水雷に屬する工事をなす處なれども先づ大抵は保氏水雷の爲めに使用さるゝなり床上には予輩に空氣を裝填するの用をなす數基の唧筒ありて各々小管を以て一の氣蓄器と連續す此の氣蓄器なるものは極めて堅固に製せられ能く毎平方呎に二千磅の高壓空氣を貯藏するに堪ゆるものにして此器より一管を出し水雷に空氣を裝填するに便宜なる位置に導くなり此れには瓣、氣壓計等の付屬品ありと知るへし此の外床上にあるは仕事机にして必要なる修理を施すか爲に設け置かれ又た予輩を水雷室より脛

口の下方に運搬するの道具をも備付けあるなり
抑も予輩が右水雷床に在る間は機關士及び機關工師等の管轄に屬し予輩に不都合なく實用に堪へしむる
點に於ては彼等其の責任を有するなり去れども戰時平時に拘らず一旦上甲板に出るに於ては直に水雷長
及び其部下に隸屬するの定めにて水雷長の設けあらざる時は砲術長の管轄を受くるなり（此の場合則
ち是れなり）

扱も本艦はスピットヘッドに廻航し石炭、火藥杯を積載せ英谷艦隊のポルトマウス分隊と共にポルトランド
に到り艦隊中の他の船々と合したりしか此處には數日間碇泊し大砲、小銃船刀より帆前上陸隊の諸操練
及び小銃射的法の教練等に至るまで有ゆる演習ありたりき

艦内にて最も初めの戰爭操練日のとにてありけるが愈々保氏水雷の試験を施行するとに決定したり茲に
艦船の狀況に不案内なる人々に向ひ聊か告げ知らすへきとあり此の戰爭操練の當日は艦内舉て戰爭に臨
むの手配をなし萬事成るべく實戰に擬して舉行すへき筈なれども其實飾りなく直言せば其真に迫ると云
ふか如きは極めて稀なるものなり大砲を取扱ふ杯一種の戰狀を摸するには違ひなければと諸士官は果し
て當さに處るへきの立場にある歟、號令は普ねく及べるか、衆卒は眞に敵前にあるの氣勢を現はす歟の如
き推問あるに至ては予は之に答ふる所を知らざるなり

乍去此日の操練は先つ好評を博せし方なりしなり爰に話頭を轉して予が事に及はんに此日の朝八時頃の

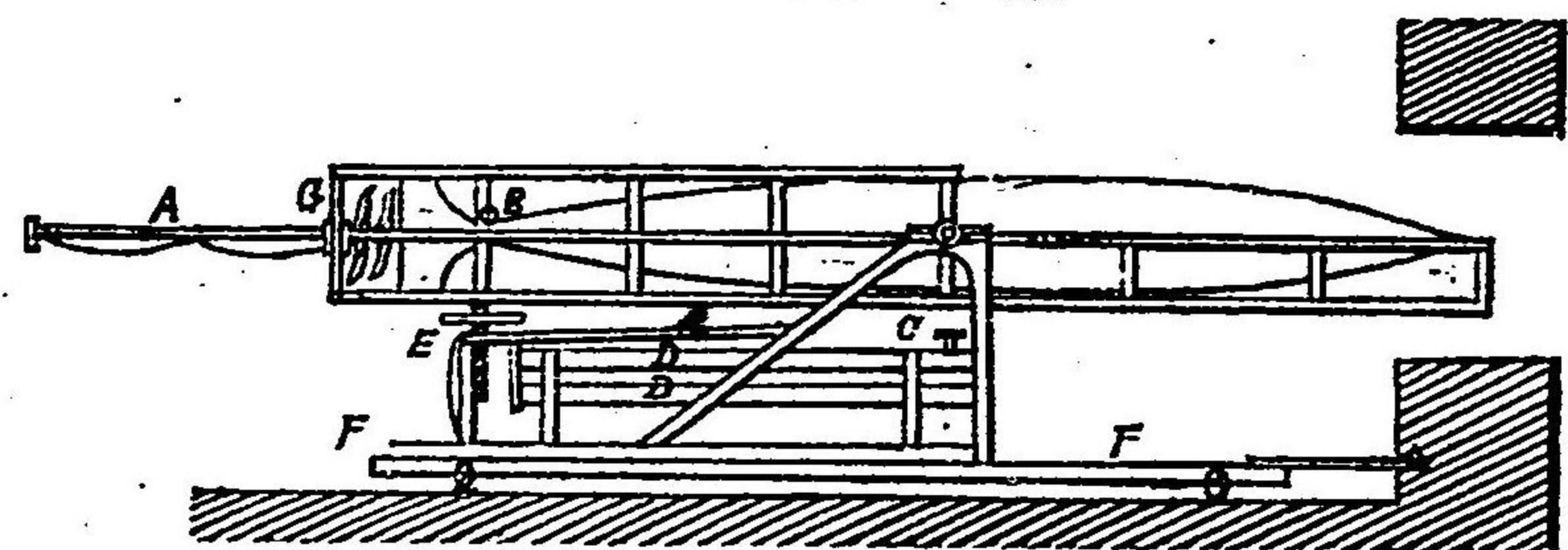
となりしか受持機關士は其の助手を隨へて入來り予と他の一個の水雷を取出さしめたり察するに予輩兩
個は兼て撰抜に預り居しと見え當日の晴役を演ずるとはなれるなり予輩は先つ水雷床に運搬されたる
か此處にて機關士は諸部を接驗し不工合の箇處なきや否やを確定するとに取掛れり殊に尾部には定規を
當て其の正しく水平にして又た垂直なるやを視定め次で頭部を連接せしか是れは豫め綿火藥に代るに木
片を以てせるものなり此等の諸準備終るに及んで予輩を空氣の管に接續し裝填するに毎平方吋に大畧八
百磅の壓搾空氣を以てせり

斯くて距離車カウチをは小距離に調整し機關には空氣を装入し螺旋をして旋廻せしめ停止裝置、安全楔等の動
作良好なるや否やを檢せしが此の試験に遇ひたるときは予が心も身も頗る安せざる氣味ありしなり何と
なれば予が身軀に於て不工合なきは確信して疑はされども彼の經驗なき人々は如何なる失錯をなして予
が作動を妨碍するやも計られされはなり乍去此等の扱ひ方も至て満足なりしか只從前に異なれるは其の
手際稍や遲鈍なるの一點に存し却て一二事を取落さんとを恐るゝ程なりしなり

去る程に諸般の用意整頓するや喇叭の聲響き渡りて戰爭操練に着手せんとを報せり此の號令にて大砲に
は只實彈を込めぬ許りにて惣て戰爭の準備をなすへき筈なりければ彼の令下ると共に多人數か駈けある
く音して紛擾すると窺まりなかりしも一人として音聲を發するものとはなく之れさへも僅かに三分許
にして肅然と鎮まり返へり砲員は各砲の周圍に黙立して尙ほ號令の出るを待居たりしが予輩は素と手荒

き取扱を甘んずべきものに非らされは急には發射管に込めらるゝと能はず爲めに冥々の裏に滿艦の靜艦を無實ならしめたり

第九圖



水雷發射機

予は茲に少く發射管車^{キャリヤ}の事を解説すへし該艦に備へありしものはアンダーリッップ^{アンダーリッップ}キャリヤと稱し上圖に示すもの即ち是れなり圖にて見らるゝ如く其の上部は幾んど全長の半分程も其の頂を開き居るものにして其の徑は稍や水雷より大なりとす又内面には予輩の上下、尾部、横側杯の諸鑄に適合するの護溝^{ガード}あるなり水雷を送入するには後部の戸Gを開くへく而して此の戸には推進管^{パルスチューブ}附屬し居り管内には滑動すへき吸鑄^{ピストン}ありて其の背部に空氣を放入するの裝置なり此の空氣は發射管車の下部にあるDDなる蓄氣管より止瓣C及び手柄Bに接続せる瓣を經過し來るものにして彼のB手柄は又水雷の滑出を防ぐ爲め管の中程に於て支子の用をなすものなりとす該發射管車の動作たる下の如し先つ水雷を管の後部より押し入れ横鑄か支子に觸達するを以て度となし戸を閉じて之を緊定す爰に於て發射管車を適當なる位置に進め管の前端舷側より突出すると三四呎ならしむへし斯の如くなれば其の方位を變轉すると自在なりとす

用意の號令あらはり瓣を開くへし此の時に當り推進管と空氣とを絶ち居るものは手柄に連接せる瓣あるのみ去れば今ま彼の手柄を動かすときは水雷を保持する支子を除くと同時に空氣を推進管に放入し爲めに滑動吸鑄を進前せしめ以て水雷を突出すなり斯くて水雷は進んで管の開口せる部に到りたるるとき尾部は上昇し鼻端は下降し幾んど十五度の角度にて水中に突進せしめらるゝものなり乍去此の發射法には後日改正を加へられたれば尙ほ後章を讀て知らるべし

第三回

此の艦隊の指揮を預る司令官はサー、ジョルハム、ピヤレンスと稱し健啖、痛飲を好み浮華なる交遊に得々として其爲人甚だ尊大なり乍去乗船の業に至りては流石に天晴の腕前にて事に當り巧みに之を處辨するに長じたり此の人も亦諸士官の例には洩れず保氏水雷のことに至ては甚だ明るからす其の僅に知る所のものには水雷艦ツァーノン號艦長より聞き得たる所に過ぎざりしなり此時該艦の艦長たりし人は頗る物事に耽り易きの聞え高く能く其の實務に精通し殊に水雷の一事に至ては其の強弱得失の何れを論せず知らざるとしてはなく同氏の右に出つへき識者は復たと世にあるへしとも覺えざる程なりき然れども同氏の口頭より水雷に弱點あるとを聞きたる人は未だ曾てあらざる所にて氏は常に曰く大抵水雷か爲し得ざるとはあらされども只談話のみは爲し能はざる所なりと氏の疑り方も亦甚だしく殆んど其の極點に達したり

と謂ふへし而して其弊たる過誤失錯あるも之を人に公示するを欲せざるか故に練習士官の如きは経験を積の益を得ると能はさりしなり抑も人をして將來の過誤を防かしめんとするには己れか過誤の起りたるとき之を目撃せしむるより好きはなし況んや練習士官たる者か水雷の取扱に熟達せる人々すらも往々錯誤を爲すとあるを免れずと云ふことを悟るに至らば自然各々大に細心注意するの念を喚起すべきに於てをや爰に司令官は予輩に歸依すると極めて厚く例の水雷は大抵爲し得るとなすとの主義に服従せるとなれば隨て予輩の價値を高むるは勢の然らしむる所にして實に幸福なると云ふへし去れば予輩首尾好く其目的を果しなば手もなく前述の主義に適合し若し又過つときは即ち予輩を取扱ふ人々の失錯となるへし如何に予輩の爲めには實に都合好き事なれども予輩を扱ふ人々には氣の毒なる次第と云ふへし左はあれ予輩には敢て缺點ありと云ふにはあらず只之を取扱はんには常に極めて細心注意を要し事に従ふ人々か諸部を點檢するの術に充分に習熟せられんとを望むなり否らされは只僅々練習の時日を以て予輩の如き繁雜なる機械に熟するの大成は到底期し難しと云ふへし却説サー、シヨルハムは彼の異妙なる兵器の動作を見んと欲して待遠しさに禁えかねけん操練始まりてより尙ほ間もなきに旗艦々長ターに打向ひ予は最早カッターにて出掛け行かん予か艇の下方十呎許を通過する様に魚形水雷を發射せしめられよと云へは艦長は

承知致せり

と答へつゝ直に第一カッターに人員を乗込ましむへき様に命し置き又人を走せて砲術長を呼はしめたるに此時砲術長は中甲板に在て操練をなし居りしか上り來りたれば艦長は之に向ひ

司令官は今カッターにて出掛けらるゝ處なるか足下に艇下十呎許を通過する様に水雷を發射せしむへ

しとのとなり

と云へはハンド氏は

畏まりぬ

と返辭して直に中甲板に降り行き發射に必要な手配を爲さしめたり此の時予輩は既に八百封の空氣を裝填せられ動機部は正當に働らきをなし其他諸事惣て工合の好きは既にハンド氏か自ら檢知せし處なり是に於て深度を十呎に調整し扱司令官は今何處に居るやらんと遙かに港外を見渡せば艦の正横面より稍と艦の方に偏して凡そ八百碼の距離に於て之を見出したればハンド氏は

首尾好く行けよ屹度其處に命中せんと思居る間敷に

と思はず獨語せり

氏の心痛も去ると乍ら予に取ても初めての晴の場に失敗を取りやすらんと考れば轉た疑懼の念に禁へさりき若し此の時に當て今日の如く予輩の正しく一直線に進行し得へき距離は殆んど三百碼を以て精一杯となすことを知りしならば其の恐懼も愈々加はるへかりしなり曾て製造所にて受けたる發射試験の結果よ

り推し測るも事の成就せんと容易ならざるは覺悟の前のとまれども少壯血氣の盛なるに任せ首尾好く之を爲して退けんぞ只一途に思込みたり去る程に距離車は二十齒に定められ安全針は脱却せられ「用意」の號令下りしかば此の聲を聞くや否や予は全軀戰慄し刺さへ瓣の漏所より空氣の吹き出して鳴る音杯物凄さは彌増して中々に平氣に復すると能はず最早彼の漾々たる海水の中を辿るに間もあらずと思ひ果る歟果てぬ間に「打て」の號令を聞へける

予は止金の脱却せられたりと覺る拍子に背部より推撞を感じ管内にて動き出す間もなく引金は鈎子の爲めに鈎せられたれば交通瓣は開け予か螺旋は烈しく空轉をなし始めたり予は續て管を離れ頭を先きにして海中に飛入り十五呎程も沈み行きたるにはこそ如何に眞直には行かすして進路は斜に變したり之を如何にと尋ぬるに完く自分の過ちにはあらず元來管の頂と底とには予か鰭を護するの護溝あり予は此の護溝中を撞進めらるゝものなるを以て護溝と鰭との間に若干の間隙を存するを必要とす去れば予は吸鏢に撞れて管内を推進められ將に出んとするに及び鈎合ひ好くは出てすして微く左方に外れたるを覺へたり是れとても多きにはあらずと水中に入るとき當さに指すべきの方位を指さすして少く左方に傾きたるのみならず頭を先きにして飛入りし時波浪の爲めに横面に一撃を加へられ益々左方に外れ水中の若干程を進みしときには其の屈曲は實に十五度許りに至りしなり初め予は波浪の一撃を感じてより水中にて確と方向を辨するを得ざるにもせよ兎に角針路の差ひたりと云ふと丈けは察したれども詮方もなければ

只此上は八百碼を駛走する間何事もなかれかど祈りたるか此望も空憑めに屬したり

既に六百碼許の處に達したる頃予は尙ほ一時間十七節の割合にて行進しつゝありしに忽然前面に當て暗黒なる物影の現出したるよと思ふ間もなく予は之に衝突せり

此の爲めにピストルは碎け頭部は軀より裂け離れ氣室に一の漏口を生したり是れより後のとは何事も覺えざりしか長久ふして吾に復へりて見れば予は方さにポルトランド港の深底に横臥して近隣なる魚輩の訪問を受くる最中なりし初め予か恙なき姿にて駛走せる間は魚輩も予を其の同類のものと思誤りけん別段意を留る様にも見えざりしか今や大に彼等の怪訝を惹起せしものと覺ほしく物見高くも予の身邊に簇集し頻りに嗅ぎ廻るもあり又大魚は小魚を探偵に使ひ之をして氣室の裂目より内に入らしめ或は機關室を視察せしめ杯せしか幸にして彼の秘密室は無難なりければ彼奴等に窺ひ知らるゝを免れたり

時に滿艦の人々は手に汗を握りて眼を水雷に注かざるはなし元來空氣は機關に於て一旦其の役目をなしたる後は空洞なる螺旋軸より逸出し水面に浮上するものなれば水雷の行路は歴々と其の跡に残れる泡球に依て認得らるゝものなり去れば本艦にては予か果して何處にて遭難すへしと云ふとは早くも之を察したれば直に短艇に人員を乗組ましめ予を救ひ上げんか爲めに差遣せり又司令官は「誰れか予を見るものぞ吾は此の盛大なる艦艇の司令官なり、暫く待て予か旗艦より打出したる水雷は物の美事に此艇下を通るべきに」と云はぬ許りの顔色にて兩手を叉狀に拱きつゝカッター中に突立れたるが折しも天氣も和さ

てありければ予か打出されたるより水上に浮出る泡沫をたどりて斯くと察するや否直に艦首を進てホワイトキング艦に向ひたり是れ即ち予か衝突したる艦なりしなり漸く之に達したるに予か胴躰は前にも述べし如く水底深く沈み失せ只其處には浮きもせず沈みも果てぬ予か頭部を見出されたり

第二の壯觀とも云ふべきは此豪勇なる司令官と短艇付きの少尉補が運拙き予か頭顱を捕獲するの狀態にてありしなり抑も予か頭顱は極めて些少の浮昇力を有し水面より浮み居るものは只鼻部のみにして少く之に手を觸るれば直に沈去るか故に之を取揚るは中々に容易ならざりしかども辛ふして之を捕獲するを得豪勇ある司令官は分捕物を護送しつゝ喘ぎ々々汗を流して歸艦せられたれば予か頭顱は凱歌の中に引揚げられたり又予か胴躰は沈没せる場處に豫て浮標を附け置かれたれば直に潜水手來りて時を移さず拾揚げ終れり茲に絶笑に堪へざりしは予か内部に在て視廻り居りし小魚等にて予か拾ひ揚げらるゝ時狼狽の餘り逃げ道を失ひ予と共に取上げられしかば暗に觀物の料を拂ひたる次第とはなれり

予か失敗の出來事に就ては事中々に落着せず先づ第一に調へを受けたるは砲術長なりしが氏を初めとし誰一人其理由を分明に解説すると能はず只人々の竊かに思ふ處は彼れ似而非砲術長何事をか知らんと云ふにあり殊に不思議なるは此の内密なる人々の批評が早くも世間に流布したるの一事にて此の報告が海軍省に達するや直に之をヴァーノン號に傳達したるに其批判の意も矢張り人々の内評と異なる所なかりしなり去ればにや本艦か此次ポルトマウス港に差廻されたる時發射法を示さんとて保氏水雷術に従事

せる人々は陸續と來艦せり

(此の時予は修理の爲めにウールウ井ツチに送らるゝ際なりしか是れより外に在ると二ヶ月許りにして再び勤務に堪ゆへき身となりて歸艦せり)

去る程に來艦せし人々は事の準備をなし乍らも「此れ程の事か出來ぬとは哀れ千萬の男かな」と云はぬ許りにハンド氏を打見遣りつゝ水雷發射にこそは取掛れり

予か今爰に述ふるさへも笑止と云ふの外なかりしは今しもハンド氏を侮り果てし是れ見よと自慢顔にて第一に打出したる水雷は其目的の針路より二十度許も外れければ渠等は一言半句もあらはこそ混雜するに大方ならず況して第二第三回も大同小異の結果なりければ愈々益々其拙を暴露し來り其理由を發見せんと狼狽に時を移すのみなりし去れどもハンド氏の沈着なる其感情を顔色にだも現すとなく只管其の理由を考究するに汲々たりしが此の一場の確執に於ては全勝疑ひなかりしなり氏は追々考究を積むに隨ひ彼の偏斜は水雷を管内に推進するに當り予か前にも略述へたる如く遊隙あるか爲めなりと云ふとを案出し之を眞個の源因なりと主張せり然るに渠等は此論に服せず類例を擧げ之を駁撃して云へる様ケイタイ艦にても先頃保氏水雷を積込みたるか發射管車より水雷に至るまで毫も此れと異なることなく其の管より出て水中に入るの工合も別に異なる點はあらざるも絶へて此等の出來事のなきを見れば兎に角此れは取扱者の過ちに歸せざるを得ず其の何故たるの即答は爲し難しと雖も彼れは眞直に行き此れは曲れるに

由て察するに其過ちは事に與かりたる人に歸するの外あらずと云ふに過ぎず然るに尙ほ深くケイディツ號に於ける發射の模様を穿鑿せしに例も運轉中にのみ施行したると判然したればハンド氏は之を聞くや否や直に艦長の前に進み出て己か意見を陳述せりカピタンも亦百方之を救濟せんと欲するの念を斷たされども素と其の爲人學術を以て世に立つの人にはあらず大砲、水雷等の事よりは寧ろ橋上に於ける活潑なる事業を好むの性質なりしなり然れども常に艦内にあるの事物は其の何物たるを問はず其源理を究めんと欲するの情なきにあらず氏は又何事に依らず一の失錯ある毎に探求綿密到らざる所なく遂に其犯人を得て而して後ち已む去りて之を摘發するは強ち之を罰責する爲にはあらずして只事の顛末を精く明むるを得は直に満足するなり氏か此の如き注意を以て人を御するの功能は果して如何と尋るに人々若し失錯あるときは必定發見さるゝと覺悟し職務上の過失は大概不注意より起るものなれば常に細心警誠の念を加ふるに至る此れ其功能なりとす彼の故意に出たる過失の如きは勿論寛假するの限にあらざれども此の如きは先づ極めて稀有のものを見て可なるなり斯くて今度の出來事の如きは水雷に仕損しありしとなれば熟之を吟味するに間接にハンド氏が其責を受けざるへからざるはカピタン、マターの能く知る所なり去れば自然ハンド氏に向ひ聊か不興氣なる風脈ありつれども豫て兩人の間柄は頗る親密なるものなりければ如何にも心苦く思ひ居たるに相違なきなり去るにても今ハンド氏がケイディツ號と其の水雷とに就き考究し來れる意見を陳述せしときはハンド氏か自ら信する程には之を信せざりし

艦長 艦体の動靜に關し斯程の差異ありや予は之を知るに苦しむなり成る程艦の行進速力と水雷の發生速力と同一様にして水雷の頭部は尾部より先きに水中に入るか爲めに後方へ偏斜すると云へは格別なれども苟も然らざる以上は運動中と雖ども碇泊中と其の道理は同じかるべきなり

ハンド 某の見る處は少く之と異なり水雷か初め發射管を出るときは左右何れに外れるも其偏斜は極めて少かるべきに其水に入るや碇泊中に在ては水雷、水を打つか故に偏斜は愈々増加して遂に目的と大に違ふべきも運轉中の艦に在ては然らず水雷の水に入るや水却て其頭部の左側を打ち凡そ每一節に一度半位の割合にて之を偏斜せしむるか故に艦の速力十節なるときは則ち水雷は其の針路より偏斜せしめらるゝと十五度内外なるへし今ま水雷、發射管を出るとき多少の傾きを有して水中に入るに當り水の爲めに打たれ十五度の偏斜を受くるときは其の眞個の誤差たる畢竟管を出るとき些少なる偏斜に止まるへし

艦長 然り成る程其處に理屈ある様に見ゆ乍去實際之を目撃するにあらざれば信を置き難し右兩様の場合に於て其差異の斯くまでに大なるべきは予か了解し能はざる處なり

ハンド 論より證據とこそ申すなれば明日本艦か大砲射的に行くの序で運轉中に之を試めし見るとは造作もなきとなり

艦長 極めて好し豫め一對を準備し置くへし明日大砲打方の跡にて之を發射すへし首尾好く行くか行

ぬかは期し難けれども何とあしてヴァーノン號の奴等を閉口させて遣り度ものなり
 ハンド 承知致せり現場を見らるゝまでは閣下の強て之を信じたまふことを望み申さす乍去明日は愈
 其正確なる處を貴覽に供したし
 と數回の問答を終り之れか準備の爲めとて退き去れり

第四回

此の紛紜か艦内に起りしは予か恰もウールウッチに在て修覆を加へらるゝ留守の間となりしか歸艦
 の後同僚の水雷の談話に依て知りたるものにて是れ實に予か遭難と關係を有するものなるに由り之を傳
 紀中に加ふるとはなりぬ

諸其翌日に至り豫定の如く彼の試験を執行せしに其の成績たる寸分もハンド大尉の意見と違ふとなかり
 となり即ち發射三回の結果を左の表に掲ぐ

艦の速力	八節	十節	十二節
標的の種類	端艇	同	同
標的の距離	艦の正横面を去ると 二百五十碼	艦の正横面より十度艦尾 の方に倚りて二百碼	艦の正横面より五度艦尾の方 に倚りて二百二十碼
井に方位	艦の正横面より艦首 の方に十二度	同上五度	同上十三度
水雷の据方	端艇の右方五碼の 處を過ぐ	端艇の直下を過ぐ	端艇の左方十碼の處を過ぐ
結果			

此の如きは實に命中の精密なるものと云ふへし此の標的として用ひられたるカツマーは其の長さ三十呎
 に過ぎざれども艦船の長さは極めて少く見積るも二百呎に下らされは今艇と艦と其の處を異にするに於
 ては命中を免かるゝと頗る難かるへし若し又艦船の端面向て發射するものとせんか射面の廣さは只四
 十呎より六十呎に至るのみなれども此は之れ甚だ接近するの場合にあらざるよりは猥りに行ふへきにも
 あらず何となれば若し船首を撃たんか是れ船体中の最も破壊し難き處を襲ふものなり又之を船尾に向て
 撃んか水雷果して艦尾材若しくは螺旋に中れば奏功を得へきも否らされは其局部の形狀の爲めに制せら
 れ爆發するに至らずして他方に外れるの恐れありとす

爰にカピタン、ターは水雷發射の好結果を得たるを喜悅して措かず去れば彼のハンド氏の理論も何時ど
 はなしに其の持論と變形し又該發射試験の後該艦長かヴァーノン號の艦長と出會せしとき該談話は頗る
 面白かりしなり

彼の艦長はカピタン、コンマンウイッスラーと稱する人なりカピタン、ターが氏に出會せしは造船所構
 内にして兩人共に司令官の公署に赴く途上にてありし

オウウ井ッスラー殿彼の水雷の事なるが
 と先づカピタン、ターの方より口を開きたり

ウ井ッスラー 何に水雷の事と貴艦の砲術長か又候仕損せしにや

ター 否々過日足下より打方の名法を傳習して以來素より間違の起るべき様もなし乍去彼の法も餘り賞美すべき程の名法にもあらずと存するなり彼の時水雷か何の故に眞直に行かさりしやの理由は吾等之を發見せり

ウ井ッスラー 去ればさ其れは日外やも御話申せし通り全く取扱方の宜しからざるか故なり

ター 申すも餘り氣の毒なるに似たれども先頃足下か來艦して取扱はれたる時露許も間違のなき筈なる方法にて水雷か眞直に行さりしなり是れは又た何とせし譯てありしや

ウ井ッスラー 其の事は先つ差措くことなし扱て今度足下か發見されたりと云ふ一條を聞かまほし」其の儀なり昨日弊艦の運轉中吾等數箇の水雷を發射せしに悉皆眞直に行きて………

ウ井ッスラー 其れは誠に稀代千萬なり

と嘲弄半分に話の腰を折りたり

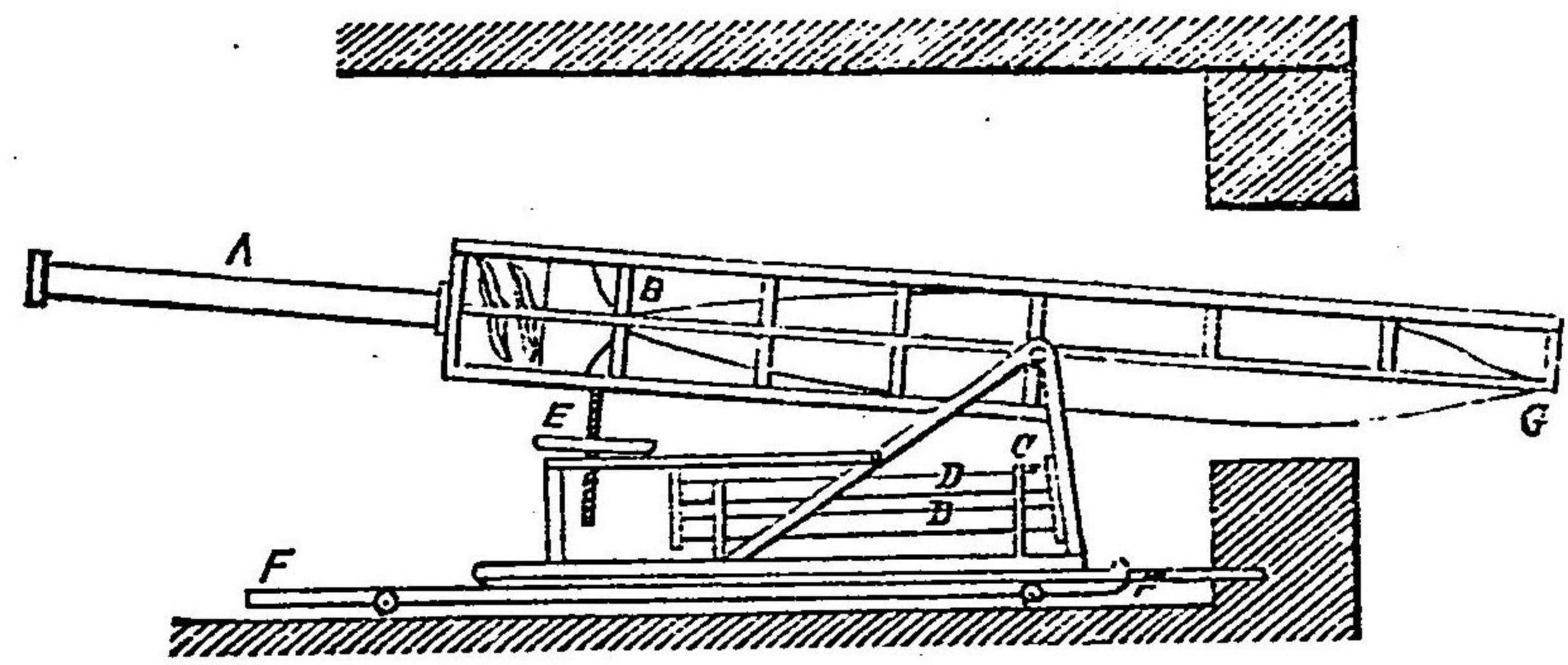
ターは微笑し乍ら

無駄などを云はずに謹んで拜聴されよ不殘話し申すへければ

と是よりターは已か理論を根據とし前日發射の模様より其結果杯を引證しつゝ始終の顛末を事落もなく物語れり

カピタン、ウ井ッスラーは之を聞て即坐に正確の論なりとは領承しにくき場合はありしなれども争はれぬ

第十圖



事實には其後該發射管車に改良を加へて前に較ぶれば水雷は大に平滑に水中に落入る様になれりとそ即ちオバルリップ、キヤリエーヂなるものにして左圖に示すか如く側鏟を受容するの護溝は延長してGに至れり而して該側鏟は水雷の中心にあるものなるか故に管を水中に置くときは水雷も亦た水中に落るものなり去れども通例は之に微く傾斜を與ふるものどす是れ水雷をして深く水中に沈入らしむる爲めにして若し左もなく之を眞水平に落すときは其の水中に入る前に水面に在て駛走する恐れあるなり

抑も大砲、水雷の二術に必要な他の諸般の事項に同く水雷發射法に至ても亦他國の長處を採るを可とするとは猶宛も諸外國か吾國に倣ふとあるか如し故に爰に少く新發明に係る水雷發射の便法を述ふるも敢て無益にあらざるべきを信するなり是れ即ち佛人の發明する所にして専ら廣く佛國海軍に行はるゝ法なりとす假に砲身とも稱すべき一の長き管ありて其の内徑は後部より水雷を押し入れ得るに堪ゆべきものにして後部には蝶番を有せる尾栓ありて之を閉塞するものなり砲身の前部は管耳トラコオンにて留め管耳を受くるの架臺は即ち發射管車下方の半軌をなすものにして其の末端は軸となり甲板

に釘附せる凹處ソケットの裏に在て旋回するなり又凹處に附着せられたる腕軸レバースタブありて砲身後端の下部の處に於て二輪車を備ふ而して砲身の後端は昇降螺旋エレベーターを以て上下せしむるを得へし此の裝置にて水雷を裝填したる儘に發射管車をは最上の工合にて駿速に轉變せしむるを得るなり今少量の火薬を取り尾栓内の藥室に置き之に點火するときは瓦斯は該室の四方に穿てる夥多の小孔より逃出す是と同時に管の内面に直入する瓦斯あれども決して水雷の精細なる機部には損害を與ふる程には至らざるなり前にも云へる如く該發射管車は佛人の爲めに極めて愛用せらるゝ所のものにして殆んど之を世に公示するを欲せざる程のものなれば予は只爰に其大略を陳説するに止め置くへし

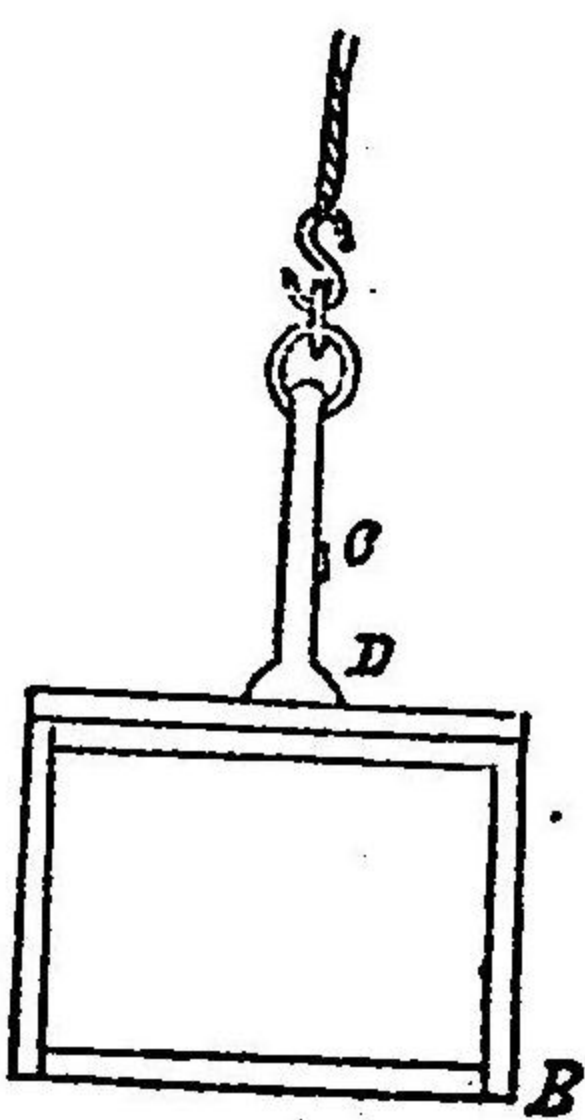
予はウールウヰッチに於て修理を受け歸艦せしか其歸來の途中に於ける予か喜悅の心情は實に名狀すべからず心中には只管先きの會稽の耻辱を雪ぐべき機會の早く來れかしと企望に堪えざりしか愈々此の機會の來りし曉には予の望も遂に空しくなり終れり如何と云ふは予は間もなく重ねて遭難の不幸を醸し再ひ砲術長の面上に泥土を塗抹することとなりたればなり

一日戰爭操練ありたるの後ち用具の取片付も終りければ予輩(他の演習用の水雷一個并に予)を下甲板に御すことなれり

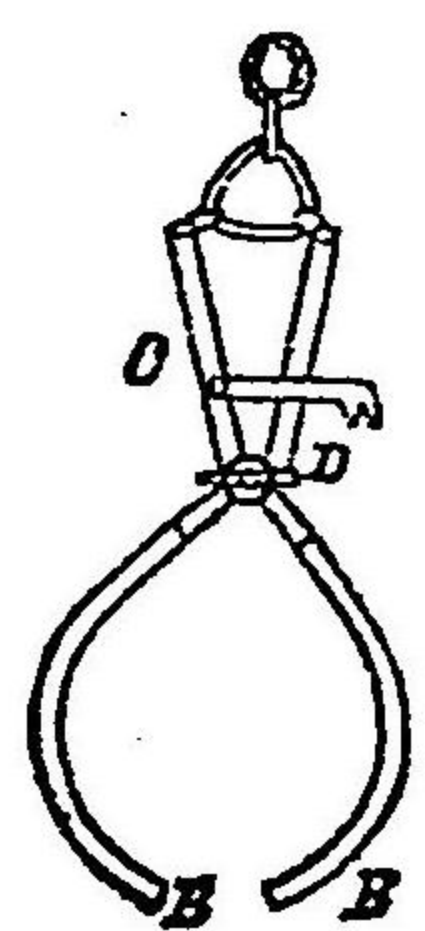
此の時起りたる事件を説明せんには豫め一種の機械を解説し置くを必要とす即ち予輩を引揚ぐるるとき身軀の周圍を抱攬するに供するものにして其の名をトングと稱し現今用ひらるゝもの三種あり

(第一) 水中用のトングなるものは其形十一、十二圖に示すか如しCの處に一のケッチあり是れ脚を開く爲めにして其適位にあるときは脚Bに於て満開し水雷の上に之を下すを得るなり然る後ちケッチを外し引揚げ滑車の綱を締むるときは脚は閉合し以て水雷を抱攬す

圖一十第



圖二十第

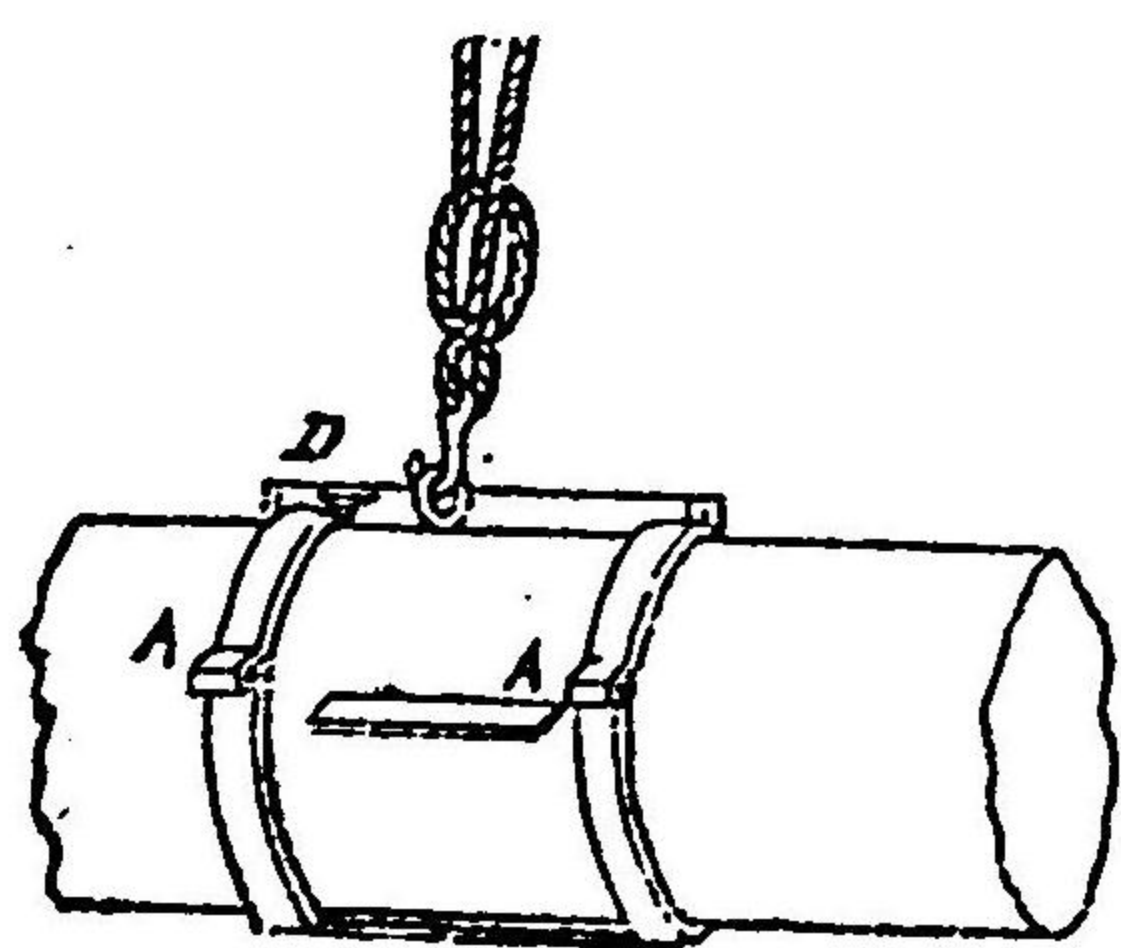


其の脱落するを拒くには兩脚の間に水雷の側齧を挟み又た一條の索片を鼻端に結着し之をクリートLに連繫するなり此種のトングは重に水雷を水中より取納れるときに用ふるものとす

(第二) 引揚げ用のトングなるものは其の形十三圖に示すか如くにして側齧を通過せしむるの溝渠あり艦内にて水雷を揚げ御しするには此の種のものを用ふるとにて其の溝渠を設くる所以のものは

水雷を發射管に押入るときに當り此の内面を滑動して進ましむる爲めなり此種のトングを用ふるには先づ側齧を滑らせて其位置に滑り込ませたる後は少く之を回轉し置くを要す斯くすれば假令へ何れの方に傾動するも齧はトングの溝渠なき處に至り止まると圖に示すか如し又た水雷は通常尾部を先きにして降下するものなるか故に尙ほ此上に一條の索片を尾部よりDに於けるクリートに結着し以て愈々之を堅固になすものなり

圖三十第



(第三) 第三種は右二種と同物にして只其の異なる處は彼の切缺きを有せざるに在り故に之を用ひんに
 は先づ充分に其の脚を開き水雷を抱かしめ而して後ち螺旋を以て締付けるものとす
 却説此の時用ひられたるは第二種のものなりしか不幸にも微く之を回轉し置き以て側縁か切缺より滑り
 出るを避くるの方法を知らざりき去れば予か取御るさるゝに當り予をして恐怖の念を起さしめたるは彼
 の切缺きか鱗と同一線にありしこと尾索の殆んど朽壞してありし事共なりし

予輩を揚げ御ろしするには一種特別なる起重装置を用るとにて上部のプロックには二個の滑車ありて其
 の大さ互に等しからず共に確と結合せられ其凹處には鏈鎖ありて之を走過するなり又下部のプロックに
 は只一の輻軸を有し鏈鎖此上を走過すると上部のものに同じ蓋し此種の起重装置の利益たる些少の力を
 以て大重量のものを揚げ得るとと止めを掛けずして重量のものを何れの所にも懸吊し置き得るとに在
 り此故に最も水雷の事業に適合せるものにして決して水雷を取落すの憂ひなく只僅かに一兩人にて之を
 取扱ふを得るなり

扱前にも述べたる如く予か艀にトングを嵌込み之を起重装置に鈎し人々之を引き始めたり予か稍や水平
 の位置に在りし間は何の故障の起るともなかりしか艀口の廣さは此の儘にて予を下らしむるに足らざる
 を以て予か鼻端を引起したれば尾部は低降して艀口に臨めり

此の時予か心も消ゆる許りに恐ろしかりしは予か身軀の漸々にトングより滑り出るを感じたればなり他
 の人々も亦之を認め得て力を盡して予を救はんとせしかども事既に後れければ瞬く暇に予か尾索は朽
 ちたる糸の如く弗と斷絶し下段に居たるもの共を警誡する爲めに「下を退けよ」と疾呼せる聲の終るか終
 らぬに予はドツと云ふ響と共に墮落せり

讀者の内には人の高所より足を失し墜落し來るを見られたる人もあらんかなれども實に心地好からぬも
 のなり「下を退けよ」との語は何か事の間違へる非常の場合にのみ發するものにして之を聞くもの坐るに
 心頭に恐怖の念を懐かざるはなし此の時に當ては(今予は之を追憶するも尙ほ悚然たらざるを得ず)人々
 アチャと思ふ閑もなく四肢は亂顛して天上より降り一聲甲板を打つの響きと共に萬事已みぬ噫幾何の精
 靈か斯くの如く不時の禍に遇ふて其の性命を失へる歟知るへからず只其の斯く墜落するの瞬間に當りて
 は其の心には果して何事を思ひ居るやと尋ぬるに不思議にも人々皆殆んど一轍に出るか如く各人の腦裏
 に懷藏せる天賦の宗教的の念慮あるを證するに足れるものあり則ち人若し不意に免かるへからざる危難
 に遭遇するときは必ず其の唇頭に「神明吾を救へ」の語を發せざるはなきか如きは是れなり又如何に罪惡を
 疊ねたる惡漢と雖ども一旦其の絞臺に登るに當ては先づ其の造物主を思ひ起すもの比々皆悉然るなり讀
 者或は云はん「渠れ水雷自ら斯の如く墜落に逢ふて人間の思ふべき所と稍と髣髴たるの懷想を経験せる
 も亦た異むに足らず」と實に然り然りと雖ども予は素より動物の思想に就て論せしものにして夫の水雷
 の思想の如きは事に益なければ陳述せしにはあらず人間社會に在ては身軀の毀傷を以て重大の事と考ふ

るなるへけれども予輩に在りては只僅かに不便を感じるに止まるのみ若し彼の時に當り予か心中何をか考居りしと強て問はるゝならば予は何事をも思ひ居らざりしと答ふるの外なし又思ふべき暇もなかりしなり予は只予か身軀の滑り出せしを感じ知り而して予は尾部を打碎き艀口の下に横臥せるに當ては手を取扱ふもの共は如何なる愚物にやあらんと想ひ起せしのみなりし

讀者は既に察せらるへけれども此の時水雷に關係せる人々の騒動は云はん方なく初め修理を加へてより未だ幾程も經さるに渠等は復たも三百五十磅の價值あるものを打壞りたるとにて此度こそは全く其の無學不注意より起りしとなれば彼等は當さに報然として慚愧せしなるへし只氣の毒に堪へざるはハンド氏にして再び面目を失ふべきとはなれり氏は此の事の起りし時現場に在らざりしと雖ども常に予輩を保管するの任に當る人なれば日頃より此等の不都合なき様に其部下を訓練し置かさりしは即ち氏の過失と謂つべきものにして其實を免るゝと能はざるは又是非もなきとなりかし

此の事を聞くヤカピテン、ターは直に其處に降り來り霎時か程は予を見詰てありたるかハンド氏の方を振り向きて

ハンド殿今度は之を辨護するに如何なる理屈を貯へ居らるゝにや聞かまほし

と予に指しつゝ云ひ出したるに

申譯は其處に居る大馬鹿者の掌砲長屬にて某とても之を信任する程の之れにも劣らぬ馬鹿者なるに因

れり

と發射管車を預り居る一人の男に指し殆んど手足の措置を失ふまでに怒りに禁へぬ有様にて答へたれば

噫實に左様にてありしならん予は其の趣を報告致すへし

と云ひ捨て與の彼方へ歩行し去りぬ

此の報告に關して起りたる顛末は事繁冗に渉るを以て爰に省きて述へざれども只一つ告げ置くべきは今回の失錯に因り螺旋軸は屈曲し浮泛室の一部は破壊し其外些細なる損處は少なからざりしと雖ども幸にポルツマウスの水雷庫にて修覆を了すへき箇處のみなるを以て予は陸上に送られ一周間許にして宛も新製のものかと疑ふ許になりてフイヤノート號に歸り來れり此の後程なく水雷長の來任ありしか予は今水雷長と砲術長との區別如何を知らざる人々の爲めに之を畧述すへし

抑も砲術長并に水雷長は海軍大尉の名簿に記名ある士官の内に就き其志願者中より撰擇せらるゝものにして既に撰擇を受けたるものは綠威グレイウィッチの海軍兵學校に到り算術(微分積分學に至るまで)、理學、築堡學、化學等の坐學(九ヶ月間)を修むるなり但し砲術長とならんと欲するものは専ら算術を精修し又た水雷長とならんと欲するものは深く應用化學を講習するものとす

此の學期は六月の末に終るものにして是れより二ヶ月間は惣てヴァーノン號にて水雷の學術を修むるものなり此に至て練習士官は二部に分れ砲術長となるべきものはエリセント號に乘組み尙八ヶ月の間大

砲の練習に従事し水雷長となるべきものは尙ほ六ヶ月の間ヴァーノン號に留りて飽までも水雷術を講習するものなり

各々其の課程を終るに於ては砲術長又は水雷長に補任せられ各艦に乗組を命ぜらるゝなり而して砲術長は水雷を除くの外艦内の諸兵器并に大砲操練(艦長に隸屬して)を管領し又は水雷長は獨り水雷の事のみを管領するものなり但し水雷長を置かれたるは僅かに數年前よりのことにして其以前に在ては砲術長か萬般の諸兵器を統轄せしと知るべし

然るに益々水雷事業の擴張するに従ひ大艦に在ては(旗艦の如きは外に艦隊の事務あれば殊に然りとす)其執務繁多にして到底一人の能く處辨し得る所にあらざれば特別に練習を終りたる水雷士官を乗組せしむることはなれるなり扱此の時は恰も各艦艦に練習士官(水雷長)の卒業するに隨ひ乗組せしむる最中なりければ即ち大尉シェームス、イープス氏かフイヤノート艦に任命せられしものなり

人皆シェームス、イープス氏を呼ぶに通常シミ、イーツスの名を以てす其の性行頗る奇異にして稀れに見るべきの人物なり身幹長大にして強健なれども其温和なる顔上には自然に氣質の善良なるを現はし居れり只其舌は巧みに動きて絶へず息まず爲めに水夫等は之に綽名して「スラング、アミッチナス」と稱したり

噫氏は空言妄語せざるにあらす乍去是とても決して惡意を含めるものにはあらすして中には取るに足る

べきとも亦た多きなり然れども是れ氏か彼是論評せらるゝ所以にして苟も人をして其長處を撰擇せしむるに至るは已に其價值の大分を損したるものと云ふべし今予は氏の多辯なる一例を擧て之を示さんと欲すれども餘白なければ之を贅せず只予は讀者諸君に向ひ予か新主公の紹介を爲し置きて是よりは予か物語りに取掛るべし

保氏水雷自叙傳上卷終

明治二十四年四月十七日印刷
明治二十四年四月十八日出版

東京市京橋區築地四丁目一番地

發行所

水交社

兼發行
印刷編輯
人輯

鈴木光長

東京市京橋區築地
四丁目一番地寄留

印刷所

秀英舍

京橋區西紺屋町貳拾六七番地

22
6
335

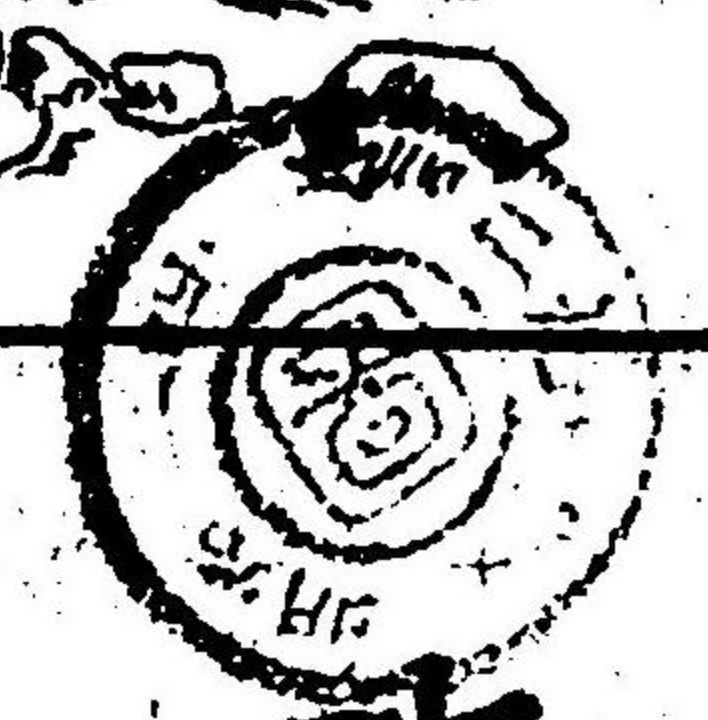
22
6
335

保氏水雷自叙傳

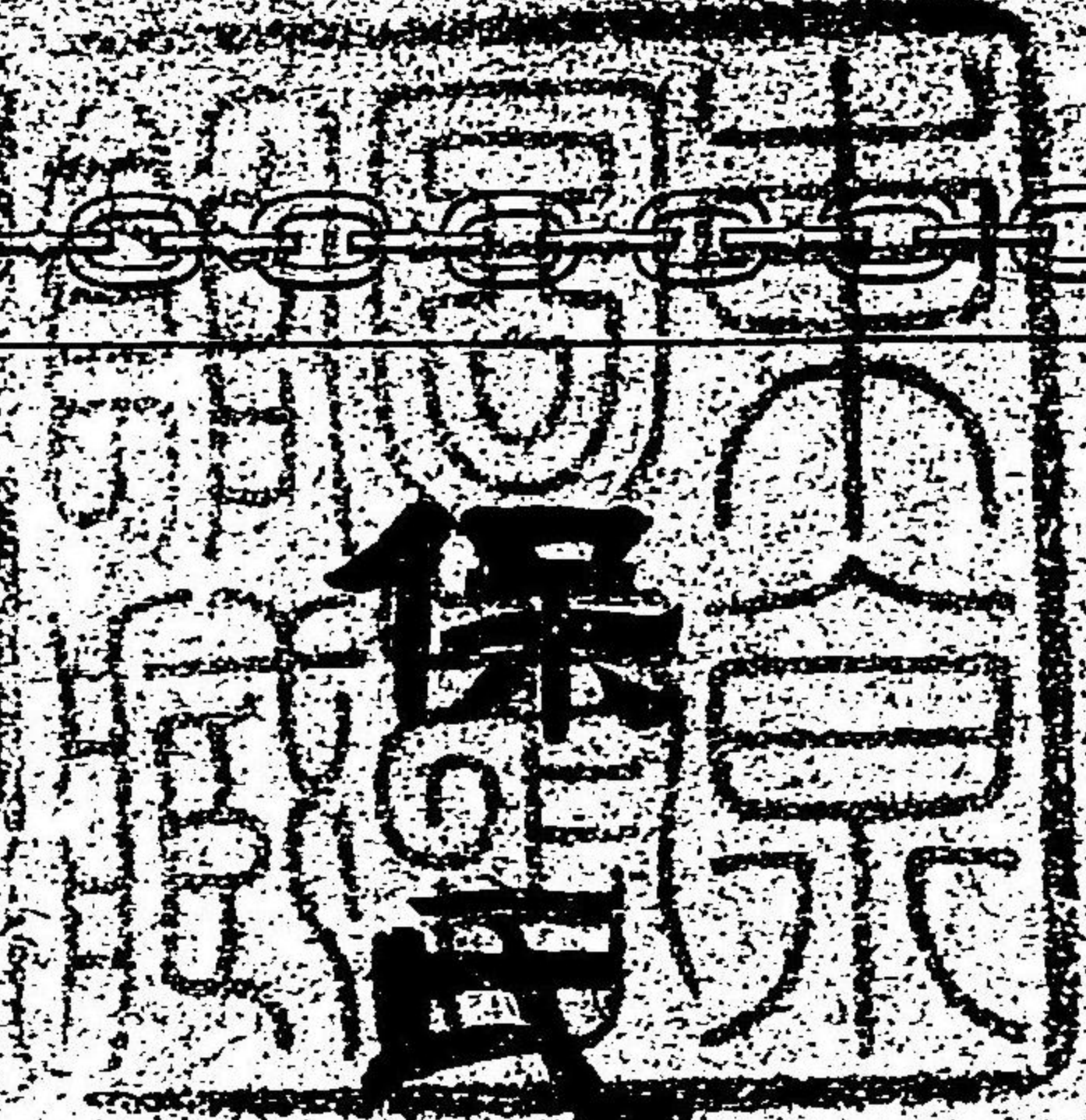
中 卷



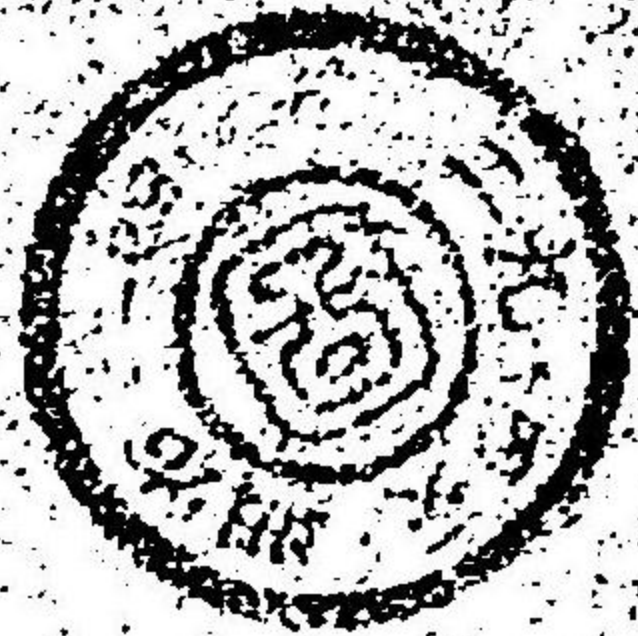
水 交 社



W. 124/131V.



水雷自叙傳



保氏水雷自叙傳 中卷

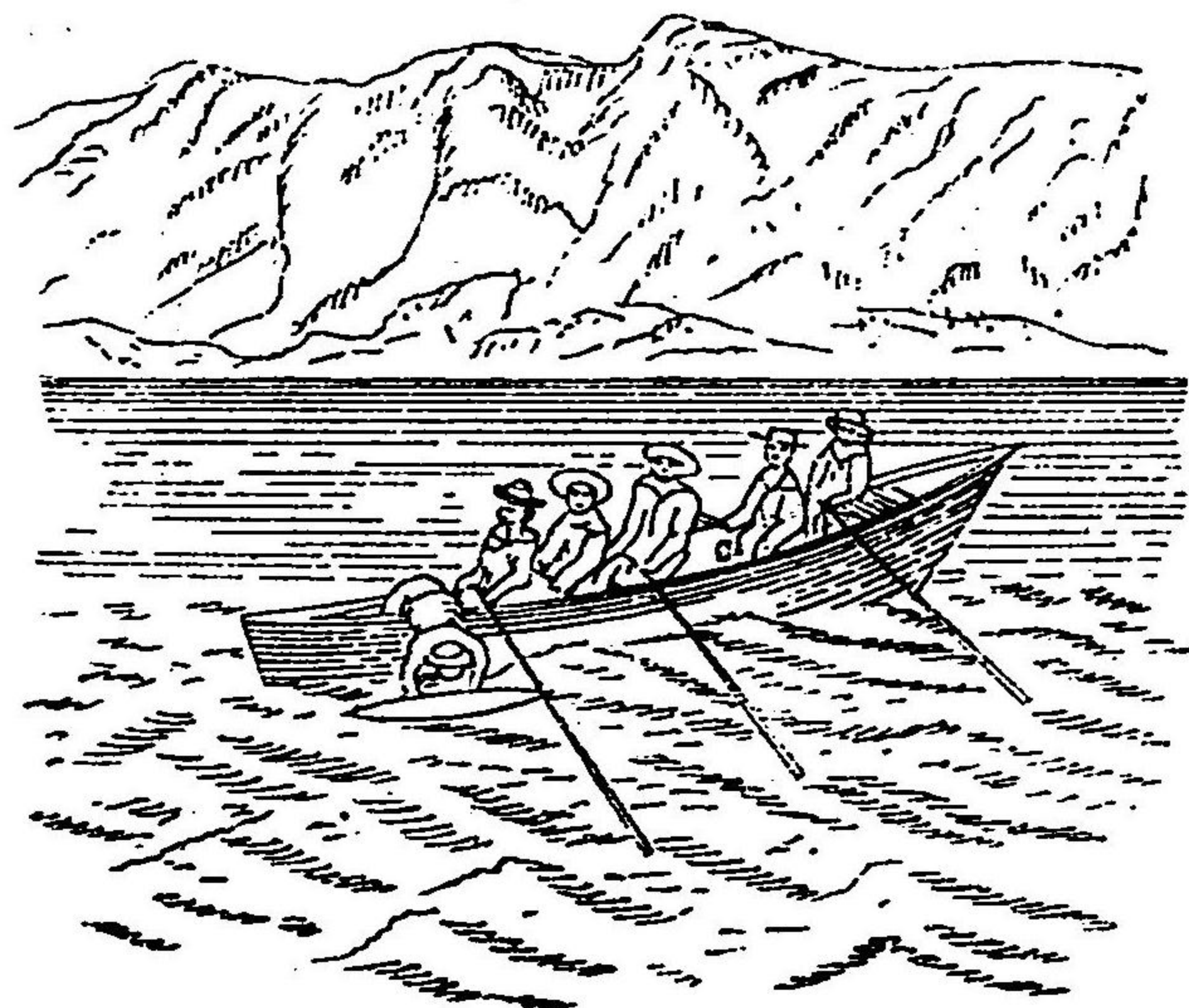
第五回

此の時に當り地中海に於て示威運動の事起りたれば吾か英公艦隊は例の如く地中海艦隊の應援として派遣せられたり吾か艦隊がマルタ島に到着せしときは地中海艦隊は泊してベシカ灣に在りて事急なるに及ばず直に進んでダーダニウスの海峡を扼奪し恰もマルタ島のグランド、ハアホルに於ける如く吾か有に歸せしめんとする所なりしなり却説吾か艦隊のマルタ島碇泊中に予は兩三回愉快なる水底旅行をなせしか何れも甚だ短距離にてありし是れ主として港内の廣狹及び碇泊艦船の位置模様等に制せられ適當なる道程を得ると能はざりしに因れるなり此の處にては水雷を短艇の傍側より發射せしと數回あり是れ水雷の備付なき短艇若くは之を備付るに堪へざる短艇より水雷を發射するの法なり故に此の法を行んには先づ通常の如く艦内にて水雷に空氣を裝填したる後敵を距ると適宜の位置に之を牽き行き之を敵艦に差向け置き而して後引金を引き機關を發動せしめ以て駛行せしむるものなり

諸て上に説來れる如く彼の壓搾空氣なるものは一旦其の職分を盡し終れば空洞なる螺旋軸より逃れ出るものなれども最前の製造に係る舊式のものに在ては之に異なり水雷の頂部に於ける引金に近き處にある一の瓣より免れ出るの裝置なり而して初め此空氣が機關に入るの前には油瓣を通過して來るものなるを

以て此の油は兩様の効能を顯はすものなり則ち一は瓣の嵌合を氣密ならしむると一は機關の廻轉部に油を廻らすと是れなり(幾分の油は空氣と共に前往するものなるが故に)去れば此空氣は甚だ濁油と混和するものにして荷も之に觸るゝものは盡く汚染せられざるはなきなり右の發射演習をなす初日のとにてありしが此の時使用されたる一個の水雷は予か只今陳述せし如く空氣を其頂より洩すものなりき扱も彼の水雷は艦内に於て空氣の裝填を終り標的用の短艇を去る適宜の處まで引き出され之を牽き來りたる短艇の傍に在て標的に向はしめられたり此の時シミ、イープス氏は諸事を指揮しつゝありて愈よ狙ひの定まるに於ては直に引金を引き瓣を開かんものと舷側に倚り掛り半身を舷外に出たして身構へ居たるが頓がて狙ひも付きて引金も引きたるに水雷は一躍して駛り出てたれども其逃れ出る空氣は(濁油と混したる)十五氣壓の力にて逃出瓣より噴出し憐むへしシミの面は突然一聲を蒙り其の拍子に帽子は四十呎も高く舞ひ揚り渠は後へに堂と倒れ坐せり是れ強ち空氣の爲めに吹き倒されたるにはあらざるも全く不意の襲撃に逢ひ驚き周章てたるか爲めなるへし氏は間もなく我に復へりたるか其の狀態實に奇觀とも云へきか其の面上より襯衣シャツの胸に掛け一面に黒濁の臭油に塗みれ髪をは蓬々に振亂し今や笑はんか將た啼かんかと思ひ惑へる有様は笑止に禁へぬ顔色なりき去りてまさかに啼かれもせぬは苦笑ひしつゝ短艇の傍に落散りたる帽子を漁獲したりしか此に至て初めて氣付き水雷は今何處に在るかを見遣りたり他の人々も此の騒動に取紛れ誰一人として水雷の行路に注意せしものあるとなければ今更に驚き騒きて殘

第 十 四 圖



る隈なく見渡したれども其の行衛は絶へて分らず其距離は僅かに二百碼の目的を以て調整したれば左程に遠く行くへき筈はあらしと穿鑿に懈怠なく殊にシミ、イープス氏は態まをも振をも打忘れ水雷の來りもやしつらんと思ふ邊を右往左往と漕ぎ廻り尋ねたれども水雷の影たも見へされは時々憤激の聲を發し其の煩悶を洩らしたり斯くて愈よ其處等には見當らされは一時間程も搜索せる後進まぬ乍らも本艦に立歸り艦長に之を報告するとはなれり
イープス氏か艦に上り來りしとき折節カピタン、マーは例の砲術長ハンド氏と共に後部甲板アフトデッキを行きつ戻りの散歩しつゝ今度フヒリアン操練場にて執行せらるへき陸上大操練の準備のと杯打語らひて居たりイープスは艦長を認るや直に進み近寄りて其の帽に手を添へて申出せるは

信に申譯なきとなれども何處にも見へ申さず確かに二百碼より遠くは行く間敷筈なるに如何にも不思議なるとなり併し其邊りに見へざる故或は何にか故障にても起りは致さるや兎に角其邊を潜水者にと探らする方得策と思考す何となれば………と止め度もなく饒舌り立て何時果つへくも見へされは艦長は

イース殿足下は何事を語り居るにや其は何の事なるや足下は何者と喧嘩せられしぞ其態は後部甲板ノートデッキを何と心得らるゝにや
と之を遮り止めたり

ハンド氏は此有様を見て早くも何事か起りしと云ふを推察して幾んど失笑せんとせしか儘に之を禁らへ止たり素と氏はイース氏とは至て睦しき間柄なるか去りとて肚の裏には斯く立派なる水雷士官すらも己れと同じく事を仕損したるを見るに於て心憎くは思はざりしならん其の汚染せる外貌なるのみか其の奮然とせる状貌を一見して誰れか眞面目たるを得へき然るに之には反しカピタン、ターは士官たるものか斯様なる風軀にて後部甲板ノートデッキに出来るはよも唯事にてはあらし何にか重大なる仔細のあるなるへしと痛く心配せしものなり

イース氏は熱血上方に逆流し彼の濁油の爲めに汚れ塗れたる事杯は美事に打忘れ居たりければ霎時か程は茫然と啞の如く黙り居りしか漸くにして吾に復へり事の顛末を喋々と辨し始めたり此の時當直士官來りて艦長に向ひ

獨國軍艦の艦長本艦近く來られたり

と報したればカピタン、ターはイース氏に少しく待つへしと云ひ置きて獨國艦長を出迎ん爲め舷門の方へ進み行きたるに間もなく獨乙艦長上り來りて水兵長は禮笛を吹き當番の海兵は捧銃をなし後部甲板

に居りたる諸士官は懇懇に其帽を脱したり扱て形の如くに挨拶も濟みたれば先づ獨乙艦長より口を開き
儘かに貴艦のものと存せらるゝもの弊艦の傍に在り

と云ひたればカピタン、ターは其の果して何者なるやを疑ひ乍も

左様なるか

と答へたり

ハンド氏は傍に在りて之を聞き居り早くも其意を察し知れり元來氏は算術家にして物事を了察するに極めて敏捷なればなり去ればイース氏に耳語きて

足下の失へる大切なるものゝ在家は判然りたるぞ

と云はれてイース氏は頻りに耳を欬て獨乙艦長かありし事共を語り出すを打聞くに左の如し

該艦にて總員を上甲板に聚め火災操練の配置を讀み聞せ居たる折しも短艇かなどを以て強く衝突せしと思はるゝ許りに突然何者か來りて該艦に衝き當りたる如く感したれば一人の士官は取り敢えず舷側に立出て之を見るにクオートルに當れる水中より二三秒間も水泡の浮み出しか其後は何等の異状もあらざりし元來此の艦は木製のブリッグに於て魚形水雷の備付けなければ其れとは固より思ひも付かず唯人々は如何なる事の起りやすらんと安き心もなく時を移さず艦の内外を吟味せしに何の兆候をも認めず斯くて潜水者を用ひ水中の模様を窺はしめしに茲に始めて艦側に深く突入りたる予か朋友を發見せしか急

には之を取除くへき術もなかりしなりとぞ

凡て演習の爲め水雷を發射するにはピストルの代りに矢鏃形の頭を用ゆるとなるが是れピストルを損せざらんが爲めなりとす去れば彼の水雷は十七節許の速力を以て駛せ來り此の矢頭をは根も餘さず突き入りたるなり

カピタン、マーは該艦長に向ひ水雷の過失など深く謝し入りて扱て云ひらく

拙者は彼の水雷を發射したる人物を賞下に御紹介致すべし

と成るべく見出さぬ様に人々の背後に踞踏して居たるイープス氏を呼出し其の油に塗みれたる状をも併せて之を該艦長に引合せたれば艦長は最と興味あると思へけるが殊に其の發射の折の實況を聞けるときは尙ほ一層の面白さを覺えたり

去るにても水雷か彼の如き方向を取るさへあるに斯くまで遠く行きしは誠に不可思議なる事共なりと思ひしは無理ならぬとにて後ちに之を引揚げ見れば其距離の調整は二百碼にはあらずして八百碼なりしかば全くイープス氏の過誤に出でたるとぞ知られたり又た其當さに行くへき方向より外れたる(稍や十度許)譯はイープス氏か瓣を開くに當り餘りに強く水雷を衝きしか爲め之を沈下せしむるの用をなすへき横舵は却て幾分か縦舵の作動を爲し遂に之をして目的の行路より外れしめたるものと察せられたり當時氏は此の出來事の爲めに深く遺憾を感じ居たりしか爾來之に關しては久しく聞く所なかりしなり



第十 五 圖

予は今水底旅行の事を語り出でたる序を以て水雷には關係なきとなれども本艦がマルマ島碇泊中に起りたる一椿事を述へずして止み難きなり

英國海軍に於ける艦船の規則として艦内の便宜を計り毎月一回乗組水兵にゼテラル、リートを許し一舷直の總員則ち乗組總員の半數を二十四時間又は四十八時間つゝ上陸せしむるとなるか歸艦すへき時刻は言ふまでもなく定り居り若しも遅刻するものあるときは其遅刻せし時間の多少に照して之を罰し若し又た遅刻の時間延びて十二時に超ゆるときは陸上の巡査に賞を懸けて之を捕拿せしむるを例とせり而して其の時間の増すに隨ひ賞金の額も亦た増すものなりとそ是れ其賞金なるものは遅刻人の給料中より引去らるゝものなればなり元來マルマ島の酒舖に於て鬻く所の酒類の惡質なるは世に隠れもなき所なるにかゝりて加へて此の地の巡査等は水兵共の歸艦時刻に先たち之に酒を勸めて痛飲せしめ其の酔ふて泥の如くなるを待ち之を一兩日間何處にか留め置き後ち之を其艦に送致して以て褒賞を貪るの惡弊あり而して其之を行ふには巡査等は共謀して集等を瞞着し後ちに至て賞金を分配するなりと云へり

一日一人の老火夫上陸中此の手段に罹り二人の巡査附添へて本艦に送致せんとロープ、ウオークの埠頭近くまで來りたるか件の火夫は始終巡査の隙を狙ひ居り彼等の將さに艇舟に乘移らんとするとき忽ち一人を蹴倒し又他の一人をも撲倒し直に他の艇舟に飛乗り舟夫と力を協はせ一目算に本艦差して漕出せり今此の火夫か巡査に先たち歸艦するも遅刻の罰は固より免るゝを得されども彼の捕拿料を貪らるゝことを

は幸にして免かるゝとを得へきなり。巡查等は痛く打ち惱まされて霎時か程は起きも上らざりしが漸くに吾に復へりて解舟に飛乗り彼れ逃かすなど追駆けたり。

此の事早くも傳播せしものと見へ兩解舟か道程の稍や中央に達せる頃は（八百碼許）既に諸艦の綱楫には水兵共黒山の如くに登り聚り勝負如何んと見渡せり然れども彼等は皆平常巡查を惡み嫌へると蛇蝎も音ならざるを以て火夫をして勝ちを制せしめんと欲せしは勿論なりと知るへし。

追々と進み來るに隨ひ兩舟の距離極めて相接近せしかば巡查は追ひ付かんと必定ならんと思ふ間もなく早や既に本艦を距ると二十五碼許の處に到り遂に追ひ付きければ隙かさず彼の解舟に飛ひ移り將さに犯罪人を捕へんとせり。

去る程に中々思ふ如くには捕はれず今しも渠等か之を捕へんとする彼の時遅く此の時早く渠は舟外に身を躍らすよと見る間に忽ち跡を隠くして水底深く沈み失せたり。

讀者も推量せらるゝならんか此の時巡查兩人は憤然として怒りに堪へかね彼の男浮み來らば直に之を捕へ呉んと出る間遲しと待ち設けたり今や二秒三秒四秒五秒と段々に過ぎ去り手に汗を握れる見物人には一秒も三秒の思ひあり斯くて六秒八秒十秒より一分にも至りしか更に何の手掛りもなし。

斯くて各艦よりは怒鳴れる聲盛んに聞へ涉り數多の短艇は追々と現場に漕き付け來り其處よ此處よと搜索に手を盡せる上にて彼の男は愈よ溺死しつらんと云ふと明白になりたれば彼の巡查等は只茫然として

呆るゝ許りにて見物人の騒ぎに紛れ陸上に逃げ歸らんとせり。

斯る處に一艘のカタター本艦より漕出し之に近づくと見えたるか今度は反對に巡查共を擒になし本艦差して漕き戻れり頓かて之を本艦まで引致せしものゝ去りて別に施す術もなく其の辨解する所を聞けは彼の男のところに就ては兼て警察署に照會狀も來り居たれば吾等は職掌に依り之を搜索し遂に之を捕へたり又貴艦に之を送致するに當り渠は逃亡したるに依り是れ又職務の爲めに之を追駆けたりと陳述斯の如くなれば遂に之を如何んともする能はず去れば彼等は只苛酷に取扱はれたるか身の損にて匍匐の跡にて歸り去れり。

諸此の事の果たる後ち衆士官は尙ほ後部甲板に打集ひてかにかくと件の事を熱心に語らふ折柄、濤瀾たるる姿にてプープの下より出來るものあり當直士官の前に進み其の額に手を翳ざし。

只今歸艦仕りぬ

と云ふを見れば今も噂さの彼の男なりければ人々は幽靈にても出逢ひし如く一度は喫驚せしものゝ實に渠は無事息災にてありつるを喜び己れも亦喜びに堪へざりけん其の歸艦の旨を訴へしときは喜色面上に溢れ居たり。

彼の男か今突然とプープの下より出來れるは爾も如何なる譯にやと尋ぬるに此等舊製の軍艦に在ては蒸氣力を以て航海するよりは却て帆走すると多きか故に螺旋を引揚ぐるの装置を要し（當時と雖ども此の

如くせしもの少からず) 上甲板より下方螺旋に達するまで井戸の如き孔を設けあるなり却説マルタ島は海水浴には最も適好の地なれば此の處にて水兵等の游泳をなすや水中を潜り抜けて此の螺旋孔の内部に這入り杯して戯るゝとあり去れば彼の男も此の戯れ事を知るものにて先きに巡査等に追究されたるとき此の經驗を利用して逃れて見んどの考案胸中に浮み出てたれば前にも述べる如く水中に沈み入り跡を暗ましたりしものなりとそ此の事たる吾か魚形水雷に多少の因縁を有するものと云ふに足るべきを以て茲に記載するとはなれり

吾か艦隊はマルタ島に二三週間も碇泊せしか此度は又ポルト、セッドまで出張を命せられたり是れ今度印度の陸兵か召喚に應じ溝河を経て地中海に繰出し來る其の通路を護衛せんか爲めなり概するに彼の溝河入口近傍の海水は淺くして吾か艦隊の碇泊せる處はポルト、セッドより二哩餘り隔たり居たるも其の水深は僅かに六尋には過ぎず斯く海底の淺かりしか爲め予は又重ねて遭難の不幸を見るに至れり

一日發射演習ありて予は恰も發射さるべき順番に當りたり扱も發射管には七度の仰角を與へ「用意」の令に次で「打て」の令ある杯惣て平常に異なりたる處もなかりしに如何なしけん何れにか工合の良からぬ處ありたりと見へ發射機の内には只僅か許の空氣入り居りたるのみなれば此れか爲めに予は管を出ると緩慢ならざるを得ず頓がて予の尾鰭か上部の護溝を外るゝや予か躰は轉覆し幾んど眞直になりて水中に落入りたり

此の際予は横の方へ行くと叶はず益々下方へ降行きて予か鼻は遂に海底なる軟泥の中に數呎も埋り込み背後よりは螺旋働きて予を壓し付くれは予は鼻端を軸となし無暗に旋回して圈を畫し居れり斯く廻り居る内に予は漸々に離れ出て水面に浮み上りたるか不幸にも予は恰も本艦の方に向ひ居たれば若し螺旋か何時までも予を進め居りしなば予は必ず打ち碎かるへかりしも幸ひにして既に調整せられたる丈けの回轉數を轉し終り又距離車も本艦を去ると十碼許りの處にて自動して運動を止め且つ幸に速力と稱すべき程のものを得る間合もあらさりければ予は僅かに矢頭を打碎きしに止まりたり此の時に當り予は若し出戰準備をなし眞のヒストルを備へ居たりとせんに予は安全楔の拔出せる時に海底に於て爆發せしならば痛く該艦を震蕩せしに相違なかるへく若し又然らずして該艦に衝き中りたるるときに於て爆發せしものとすれば必ず一大孔を穿ちしなるへし

凡そ驅逐機は例も水雷を發射する前に必ず能く點檢せらるべき筈なるに此の時に限り其の事なかりしは是れ彼の過ちを惹き起すの主因なりとす予か前に陳述せる佛式發射管を用ひ居たらんには壓搾空氣に代るに少量の火薬を以てするものなれば斯の如き過ちは決して起り得間敷ものなり

此頃より演習用の水雷は其都度一々下甲板に卸すとを廢せられ車臺の儘にて中甲板に置かるゝこととなりしが此事を聞き先づ喜悅に禁へざりしは予輩にてありし蓋し予は一度失敗に逢ひたる以來兎角に忍氣付きて艙口を昇降する度毎に神心を惱ますこと尠からず又一方には予は是れより身の周邊に起る事共を聞

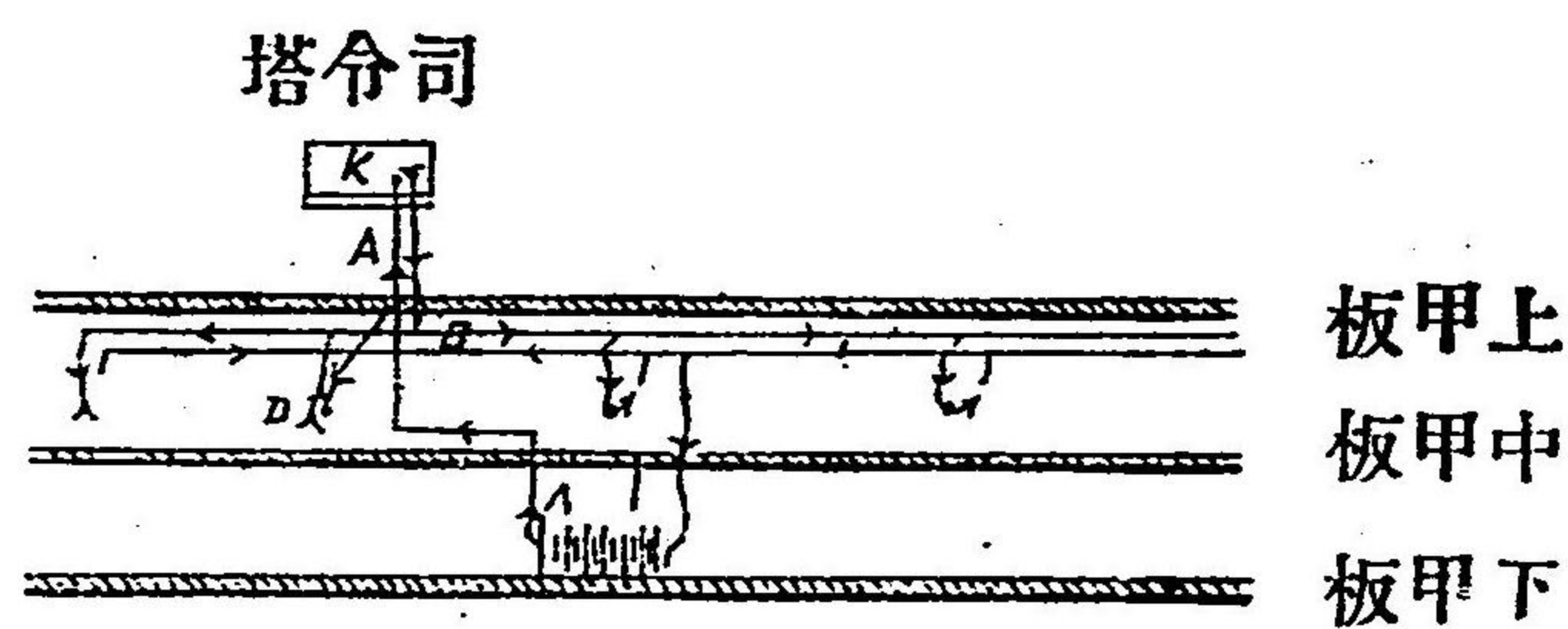
見するに便宜の地位を得たるを悦べるなり然れども予か昇降のときに當り再び過失あらんとを憂ふるは少しく過慮に似たり何となれば人々は一度斯の如き大過失をなせし後には復た忘却すへしとも思はれされはなり予か嘗て過ちなからしめんとを欲せは一度過ちに逢はしむるに若かすと云ひたりしも此の譯なりとす乍去予と雖ども過ちに逢はしめんか爲めに故らに教練中に諸般の物件を一回宛打壞すへしと云ふにはあらず唯其道に當れる人々が過誤を爲せしを耻ち之を蔽ひ匿くすの惡弊なからんとを企望して止まざるものなり畢竟するに過誤は成るべく公けにせらるゝを要し尙ほ其の個處は斯々の手落ちありしに源因せり杯云ふか如き明白なる解説を附せられんとを望むものなり此頃は恐るへき一椿事起れり以て予か言の妄ならざるを證するに足らん

既に告げたる如く予等兩個の演習用水雷は車臺の儘にて中甲板に留置かるゝことなりたるか故に該件に就て予は現に見張り人の位置に立つものぞ知らるべし

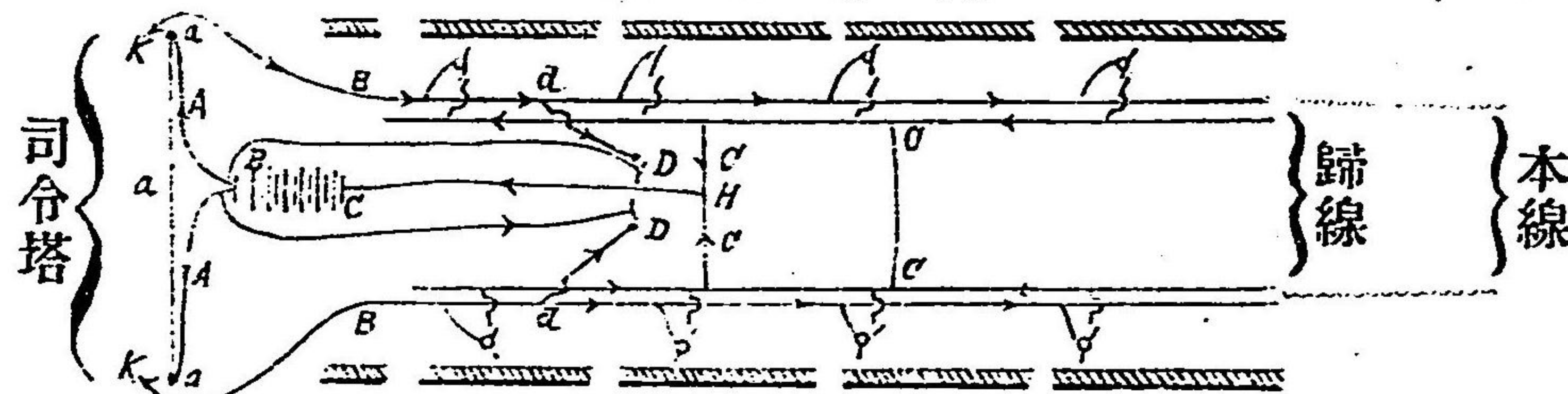
第六回

吾か艦の大砲は當今のスループ形以上の諸艦のものと同く電氣を用ひて發火し得へき装置となり居れり今左に説出す事柄は何んか故に起りしやと云ふとをば讀者をして明亮に了解せしめんか爲めに予は茲に大砲電路に用ひられたる電纜の筋路を説話すへし即ち十六、十七の兩圖は此の筋路を示したるものなり

第 拾 六 圖



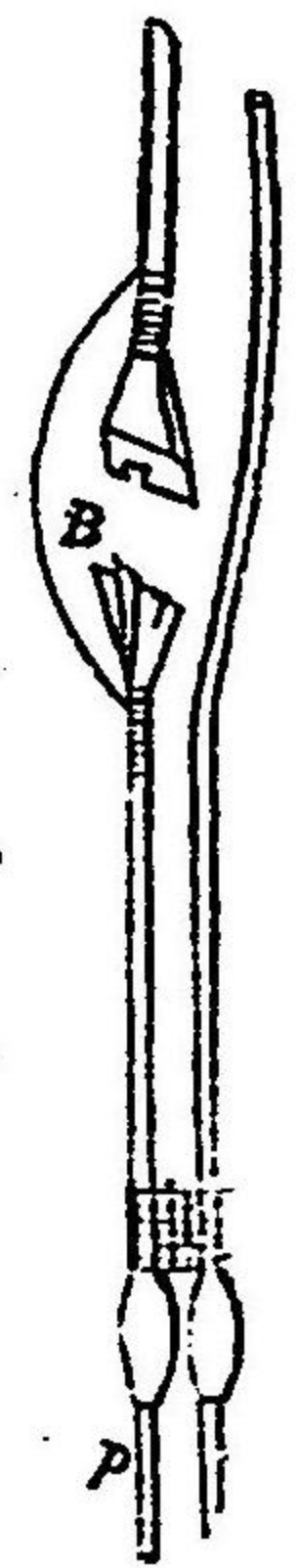
第 拾 七 圖



電池（レクランシエー氏の大形電器六個）は之を下甲板水線以下の處に藏置す是れ敵彈の爲めに損害せられんとを避防くが爲めなり該電池の一端より二條の電線 A A 出で（隔離線なり）二線共に中甲板に昇行き此の處にて相分離し十七圖に示せる如く互に各自の艦側に向ひ行き司令塔の直下に來れば各々中甲板を出て上昇し各自の發火鑰に連續す又此の兩鑰は號令臺 a a を横過せる一條の電線を以て相連接せらるゝなり去れば一條の電線は電池の一端より出で兩箇の發火鑰を經過し遂に復た同極に歸來するものに異なるとなく宛も是れ一個の安全電路なり兩發火鑰の他の緒線螺より二線出で各自の艦側を下降し共に砲臺に到り此處にて各々其の前部及後部本線と B に於て連續するなり此前部及び後部本線なる者は大砲の並列する場處の全長を傳へ過ぐる電線二條ある内の一線にして各砲に押入れ得へき枝線を有するものなり而して此の枝線には毎線にスポット并にポルトなるものを備居り（其砲不用と云へば

之に屬する枝線を以て本線より連絡を斷つものなり) 又た枝線の端末には信管の螺旋に嵌合すへき頭部
あるなり(十八より二十圖を見よ) CCの線は前部シタルクフキール、エン、フダ及後部歸線を電池の他の極と連結するものにして尙
ほCCの線ありて相互に之を接続するものなり今此の電路に依て見るに司令塔の發火鑰を壓下せざる以

第二十圖



上は電路完からず故に電流を通せしむる

第十九圖



となし乍去何れの鑰にても壓下せらるゝ

第十八圖



に當り信管を一砲若くは數砲に押入れ之
に屬する枝線のスロットとポルトを結

合しあるときは電路爰に完全し鑰の壓下せられたる側に於ける電路内の大砲は發火せらるゝなり a a 及
ひCCの處に於て反對側の二線を連結する所以のものは假令へ一側に在るの線(L a 若くはH Cの間の
線の如し) 彈丸の爲めに射斷せらるゝとあるも尙ほ他側に殘れる線を利用して電流を斷絶せしめさらん
とを欲してなり大砲電路の大脈は右に述べたる如くなれども後日に至り便利の爲め申板に於ても猶
ほ司令塔に於けるか如く電氣打方を執行するととなりたれば新に發火鑰D Dに於て兩側に備付くこと
とはなれり

見るへし今D D若くはK Kの何れかに於て發火鑰を壓下するときは之に屬する一舷の大砲若くは數砲
を發放するとを得るなり此の發火鑰の二様の裝置こそ予か是れより語出んとする椿事を惹起せしものな

りき

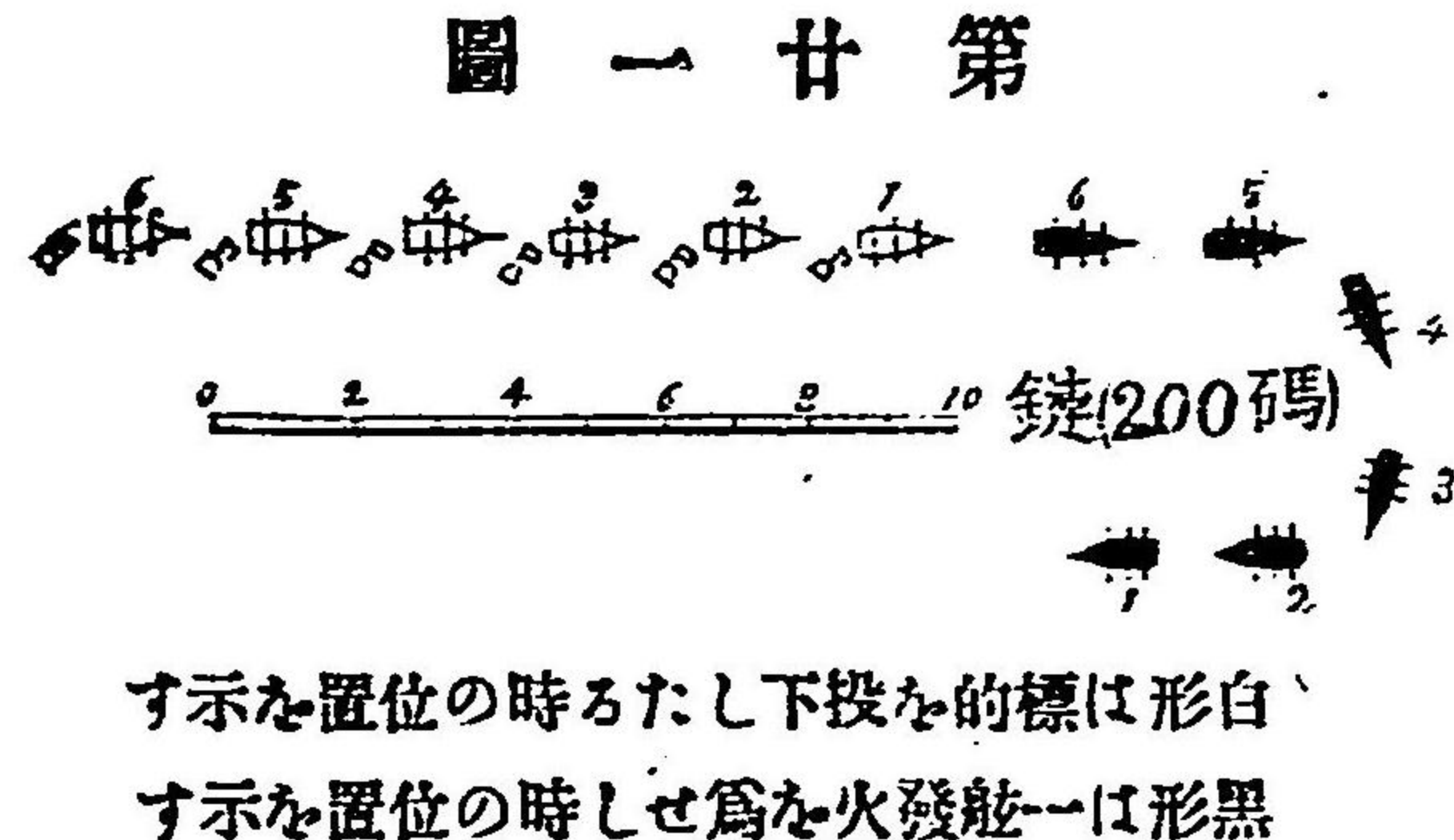
毎月一回宛此の大砲電路を試験するの慣例にて又之を大砲打方のある前に執行するとは一の規則となり
居れり皆て其の方法たる實に造作もなきとにて實地の試験と云ふは只操練用の信管をガンポイントに押
入れスロット并にポルトを接合し然る後ち發火鑰を壓下し信管が果して能く爆發するや否を驗するに
あるのみ

扱も此の試験の折ハノド氏は萬端の指揮を司りて信管の押入れ方より諸接合等も濟みたれば去らば發火
鑰を壓下し試むへしとて司令塔へぞ昇行きぬ氏は今發火に取掛らんとして先づ支子の裝置を外せしに如
何したりけん此鑰に屬せる操練用の信管は殘らず爆發し終りければ氏は必定誰人か申板の鑰を壓下し
て此の一舷打方を爲せしとと思ひ込み急ぎ馳下りて到り見たるに其の近傍には人の影形だになく加ふる
に此の事に關係ある人々は決して之に手を觸れざりし旨を宣誓して陳じたれば此上は只己れが支子の裝
置を外せしとき如何なる機みにてか電路を全ふせるものと判斷するの外詮方なかりし斯くて氏は彼の發
火鑰を取崩さしめ檢し見るに裏面に些少の塵埃あるとを見出したるが之れ許りにては電路を全ふするの
媒介になるへしとも思はれざれども之れを掃除したる後ち電路試験も満足にてありたれば矢張り其原
因は之れか爲めにありしものと斷定せざるを得ざりしなり
予は初めより現場に在て事の始末を目撃せしものなれば仔細に之を語り出つへし

初めハンド氏が司令塔に昇りきたる折件の試験の助手を勤め居りし一人の砲術教官は其の傍に中甲板の發火鑰（試験あるが爲めに露出になり居たり）あるを見て之を翫弄しつゝ何心もなく其紐子を壓着したるに信管は其れと同時に爆發しければ渠は此の時已れか行爲に初めて氣付き其の不注意の隙に依て証實

を蒙らんとを恐れ近傍に人の居合せぬを幸に（予の事には氣附かず）悄然として退去れり去ればハンド氏か降り來りしとき誰も其近邊にあらざりしも道理なり若し此の人をして潔白に其の事を云はしめたらんには予か是より陳せんとする變事も決して起る間敷きならん

其の次の日には標的射撃演習あり艦隊は各々二鏈の間隔を保ちたる單縱陣に編制せられ吾か艦（旗艦）よりの信號に依りて各々標的を投下せり是れより六鏈を進行したる後ち「順次に右舷八點に針路を變せよ」との信號あり此の方向にて吾か艦三鏈（六百碼）を進みたる後ち復た信號にて左の二令を發したり「右舷八點に針路を變せよ」標的と並列せは之を打て」右の諸令に従へば諸艦再び縱陣に復せしときは右舷の方に八百碼許を隔て標的の列と並行して航進する計畫なりし圖に依りて見らるゝ如く標的に並列せる新針路に出るときは第一の標的を正横面に見るまでには殆んど九百碼を駛走すへき筈なり然るに吾か艦の速力は十二節なるか故に之に達するまでには只二分十五秒あるの



第 廿 一 圖

白形は標的の下投する時位置を示す
黒形は艦發火の時位置を示す

みなれば「打方用意」の號令砲台下りたり是に於て信管を大砲に押入れスロットとホルルトを接合し「宜し」との返辭を司令塔に通し送れり即ち是れ大砲の用意整頓せるを報せしものなり此の時一人の少尉補予の近傍に在て頻りに彼方此方を彷徨しつゝありしか其の手に例の中甲板發火鑰あるを見て前日彼の掌砲長屬か爲せし如く之を翫弄し始めたり此孺子素より己れか何事を爲しつゝあるやを知らざるも理りなるは其のフリュニヤ號より初めて世間に出來りたるは僅に數日前のとなにて電氣と云ひる語には果して如何なる意味のあるやも未だ解せざる位にてありしなり去程に一艦打方のあるを待受けつゝ斯る遊戯をなせる間もあらせす件の鑰は壓下せられて一艦の大砲は打放されしかも狙ひさへ違はず轟き渡れる響と諸共に艦隊の殿艦なるオーロラ號のメイン、マストより附屬具に至るまで物の美事に打倒されたり予は斯く長々しく陳述すれども實に是れ一分間許の出來事にて圖に依て見らるゝ如く僅にオーロラ號を吾か正横面に見るまでの時なりしなり只僥倖なりしは此時吾か艦少く左舷の方に傾動せし爲め彈丸は皆な高く行き過ぎて僅かに其内の一弾かメイン、マストを打倒せしに止まりしなり

一艦發砲の音に驚かされ此の惡戯の發頭人は其の翫具を投げ捨て己れか受持なる大砲の方に馳せ去れり此時に至りても渠は尙ほ未だ己れか間違を起せしとは心附かず况んや己れか鳥渡彼の鈕子を壓下せし位にて一艦の發砲をなせし杯とは夢に思ひ到らざりしならん去れども彼は直に事の仔細を會得したれば最早や二度と斯る打方をはなさゝるへし爰に司令長官は斯る最も危険なる事ありしかば悚然として安き

心なく一舷發砲に此様な間違を來たせしは畢竟艦長たるもの、不注意なりとて矢庭に艦長に向ひ其の憤悶を洩しければカピタン、ターは又是れ全くハンドか發火鑰を過誤なき様に保管せざりし不注意に歸するどて罪を彼に移したり斯くてハンド氏は又之を稚き少尉補に移し宛も慈父の愛兒に於ける如く懇々と之に訓誡を與へぬ然るに孺子は之を移すに處なければ已むとを得ず片隅に引退き其の小さき心膽も裂ける許りに咽びかへりて涕泣せるは無理もなし自分は容易ならざる罪科を犯せしと思ひ迫り他日第二のチルソンともならんと誓ひし兼ての期望も一朝此の過ちの爲めに書餅に屬するかと思ひ詰めたればなり試みに彼か意衷を寫出せば嗚呼己れは過失をなせり己れか職務に注意せねばならぬ大切なる時に當り要なき物を弄び遊戯し居る杯士官たるもの、あるまじき振舞をしてけりど口惜さ限りなく（此一點は實に孺子か滿腔の遺憾なり）人々の目先きも「彼の制服を着けたる少尉補を見よ信に小供なりと見ゆ其の務をなすへき間にも遊び居れり」と云へる意を含みて己れ一人に注ぎ集まる心地せしなり是れ一般少年の心頭に先つ起り來るの感情にして却て其の氣力あるを示すに足るものなり然れども追々時日を経るに従ひ此の挫折の念も恢復せしものと見え予は此程新聞紙を閲したるに此の男か砲術長となるへき試験に於て第一等の卒業證書を得たる由を記載しありたり

予は此事件に關しカピタン、ターが爲せし詮議の次第を詳説せずと雖も毎度ながら根堀り葉堀りて遂に先の日電路試験の折彼の砲術教官か爲せし事柄までも發き出せり去ればハンド氏は滅多には忘れ能はさ

る程の叱責を蒙むり彼の教官は即時に俊秀水兵に降等せられたるか予も亦た此の處置をは正當のものと思ひたり若し彼の男にして其の過ちをなせし初めに於て一言之を白狀せしものならば中甲板の發火鑰に注意せざるへからざるの必要も判然り隨て之を保管する方法も整ひ何事も起らざりしなるへし此の出來事のありし後は人々も之を取扱ふに一入注意せしは勢の然らしむる處にて遂に吾か艦にては一時は鍵と銃とにて之を封鎖し其の鍵は砲術長自身に之を預り居りし程なりしか此法も亦た大に不便なるを免れず砲術長は「基礎を以て電氣打方」のある度に所在を捜し廻はされたれば終に復た改正せらるゝことなり彼の鍵をは平常夫々の函中に格納し置き「基礎を以て電氣打方」の號令下るときは基礎の一番は之を取り出し打方終れば復た之を函中に還し納むべきことなれり扱て予は右事件を述ふる爲めに話頭又岐路に入りたるか如此不慮の出來事は大に人をして警誡せしむるの効能あるものなれば若し此の爲めに多少の裨益あらは予が満足する處なり

該事件の起りたるは吾か艦隊カクレートに航行する途上なりし折柄同地にては住民土國政府に叛き其の威顔る猖獗を極め居れり此の處にては別段發射演習とてもあらざりしか尙ほ一事の讀者に示すへきものあり讀者或は云はん「汝老水雷、岐路に入るを好み吾等か正さに聞くへしと思へる汝か本分の物語をば餘處になし常に縁もなき他事を談するは何ぞや」と恐らくは然らん然れども予は奇事に遇ふ毎に獨り自ら樂むに忍ひず其の興味を諸君に預たんと欲するものなり乞ふ暫く予か爲す處に任せて之を聞れよ

スタ灣は予か艦隊の碇泊せる處なりしか其の周邊の陸上に於ては戰鬪常に間斷なく官賊兩軍相互に敵手の慘酷なるを鳴らし之を訴へ來りしなり此のブリガッヤ騷動の慘酷なりしは有名なるものなれば諸君も定めて記憶せらるゝならん即ち當時新聞屋の好種子にして之か爲めに身代を興したるもの少なからずと云ふ却説此の時土國人は努めて我英國の歡心を買はんと欲し機會ある毎に其の敵のなしたる慘酷の状を示さゝるとなし去れば一日司令官の實檢に供へんとて敵の爲めに寸斷せられたる一兵士の屍骸を持ち來りたるに亂人は又た之を分疏せんと欲し兩三日を経たる後土國人に虐殺せられたる一婦人の死骸を持ち來ち來る杯其の争ひ止む時なかりしが斯くても其間に徑庭ありとも思はれさりしなり唯土國兵か躰格の美事にして耐忍力の強きに至りては嘆稱するに餘りあり其給料は一日一片に過ぎず之れさへも下附の期日遅延勝となり此の時は既に一年餘も給料を下附せられず殆んど究乏極まりしと云へり扱も吾か艦隊はサイプラスに向ふへしとの命令を受取りたれば戰爭最中なれども同處を出發して該島に着したり此の處にて予か一身に關し去る事件の起り出て殆んど予をして生存の狀態を一變せしむるに至りたり

一日天氣穩和にして頗る水雷發射に適する日あり殊にサイプラス島の海水は極めて澄明にして其中に游泳するさへ勿躰なしと思ふ許りなりしが其朝の八時頃にてもありしかイイプス氏が中甲板に出來り予か背を撫しつゝ

今日は其方を游泳させんに能く眞直に泳げよ

と云はれしときは最と悦はしく覺へたり此の時

悉けあし御取扱さへ正當にあらば予か眞直に參らんと微塵も疑ひあるへからず

と云ひ返して遣りたさに耐へ難かりしも言語の出來さる哀さに渠に頂門の一針を加ふると叶はさりき彼は又た予か斯る感情を有するとは露許りも得知らずして彼方へ歸り去りにけり

此の時副長カルセムの聲として

イイプス殿彼の水雷は切角好き光澤の出掛りし處なり當分の内は先づ發射などは廢めにして擦れを出さぬ様にするか宜しからん

と云へるを聞きイイプスは例の如く微笑し乍ら

去ればなり艦長より今日之を發射すへしとの仰せなる故其の趣を貴下に告げ申さん爲め參りたるなりと云へば

副長 何んとな……詰りもせぬ……今切角好く觀へる様に成り始むれば又之を汚さんと云ふにや彼の水雷にバルニシを掛るには三人手間に一周日を要したるとなるぞ艦内を立派にせんと勤めたる報酬は斯様なるものに過ぎず水雷長、砲術長の事業と云へは何物にても能く整頓するや否や物を引摺り出し無暗に散亂さするか定まりなり今日は餘計の人手なきに依り使用するとは相成らず其上足下は當直なるぞ足下は必定甘く艦長を説き付けたるに相違なし

讀者の爲めに一言せんか水雷長と雖ども平常は艦船にて矢張り當直をなすにて只水雷事業のあるときのみ免除せらるゝ者なるとは副長固より之を知り居れり然るに彼の副長は平常より水雷、大砲の操練等に關したるとさへ云へば成るべく之を沮み妨ぐるを以て其の本務の一部なりと思惟する程にして殊に諸兵器の汚るへき恐れにてもあれは尙更斯の如くに忌み嫌らふなり砲術長ハンド氏は能く之を呑み込み居たれば先づ副長をして充分に言を盡さしめ其の終るを待ちて簡短に「極めて好し、拙者は調練をなすへき人員なき旨を砲術日誌に書載するまでなり」と断言するを常とせり蓋し此の日誌は毎週艦長の披閱を受くへき者なれば副長も其理由を詮議せられんとを恐れ極めて良き口實にてもあらざる以上は調練事も常に拒絶されしとはなかりしなり然るにイーブス氏は其の性急激にして此の老練なる手段に出づる能はず故に調練事の允れざる時は顔を赤めて論し合ひ歸する處雙方の胸中に面白からぬ念慮を増すを免れず去れば此の時も右の一條復た始まりしかば氏は遂に「宜し去らば拙者は貴下の方の人員なき旨を艦長に申上くへし」との一言を以て肩を結び憤然として立ち去りしかば憾むらくは氏か初めよ此の方法を用ひさりしとを是れより士官室に降り行き誰れにてもあれ耳を傾くる人を相手となし稍や半晌許も副長のとを惡様に罵りて其の腹を醫しにけり斯る處に副長よりの使來りて

副長の仰せらるゝには速に水雷發射演習の用意に取掛られ出来る丈け早く成さるへし
どのとなりと述へたり

此に至りて讀者は必ず察せらるべけれども此の位のとにては容易にイーブス氏の機嫌を取直すべくもあらす不精々々に發射に必要な準備に取掛りたれども勢已に斯の如くなれば事只た急速を主とし隨て予は本手順の檢分をも受けす形の如く空氣の裝填を濟ませ車台と共に砲門に引出され必要な調整等を爲し終りたる後ち例の如く打出されたり此の時予か心頭に掛りて最と氣遣はしかりしは日頃暑熱厳しく爲めに予の瓣に屬せる印度護謨坐か故障を起せしとにて今度使用せらるゝ前には一應檢査を受けんと望み居りしなり然るに事斯の如く匆急に出て素より充分に檢査を施すへきの時暑とてもあらず去れば予か水中に飛入りしや否や件の瓣坐は破れたりと覺る程に水は徐ろに予か体内に侵入し來りたれば其怖さ云はん方なく何様にかして不工合の處あるを人々に知らしめんと心も燃へ立つ許りに急りたれども復た詮術もなかりしなり措言はずと明白きと乍ら最初予か水中に沈むや若干の深さに降り行き深淺調理機か其の動作を始むるに及びて再び浮みて適當の處に立戻り水平に駛行せしなり然るに水は追々と体内に入來り予か上方に向ひたるとき此の水は後方に傾きたれば之か爲めに予の鼻端は若干の大角度をなして上方に昇行き其の勢ひ左しにも激烈なりしかば一躍して忽ち水面上に現はるゝに至りたり斯くて予は復た落ちて水中に入りたるが是れぞ水、反對の方向に傾き頭部に重みを加へたるが故なりかし只幸なりしは其の距離僅かに百碼なりければ螺旋が運動を止むるに至りても尙ほ多分の浮昇力ありて浮出て見張り居たる短艇の爲めに救ひ得られたり

彼等に捕へられたるとき予の喜び云はん方なく初めて安堵の思をなせり何となれば予か水面に近くありし間は彼の破損せる船も其の害を逞ふする能はず隨て水も入來らねば予は安全にして只異状とも云ふべきは平常よりも稍や低く浮み居りしまでのとなりき故に此に到着したるとき予は先づ安堵の思ひをなし早く渠等は予を其の艇側に附け傍へて牽き行き本艦に引揚げ呉れんとを望みたる甲斐もなく予か艇傍に至るやイーナス氏は艇舷に來り瞰見なから今朝程の憤怒を感せざりしものと見え予の事杯惡様に誹謗しつゝ何處が工合悪しきかどて唯一通の視察を下し缺點を知らんと欲したれども予は外見上毫も平常と異なる所なく只氣分の深く沈み居るのみなれば素より之を見出すべくもあらず殊に予か最と驚愕せしは氏か予の掛りなる機關工師に向て

尙ほ一度之を發射し其の正しく駛行するや否やを見度きものなり何にも格別に工合の悪しき所ありとも見え察するに何ものにか衝き當り外れて水上に飛出せしならん
と云ひたるときにてありしなり

讀者の内には其の身將に殺されんとするか如き夢に覺はれ身動かんとするに力なく救を呼はんとするに方便もなき恐しき目に逢ふたるとあるなるへし此の感情を以て推測せられれば當時予か見す々々破滅の境遇に向ふ處の感情を察するを得へけれども身は方さに地中海の美事なる水面に在り乍ら冷汗は予か全身の萬竅より發しつゝ轉た戰慄して居りぬ却説予か感情を説きて徒らに讀者を煩はすも益なきとあれば

此に差し置き今度は三百碼の距離に調整せられ標的にはスチーム、ピンチスを送り出され予はカツターの傍側より之に向て發射せられたり是れより後ちの有様を語らんに矢張り前回と同様の事起りしが今回の變状は下方に行く間は短かくして上方に行くときは激しき勢ひにて水上に飛出せり而して下降する毎に予か内部の水量は益々増加せしも尙ほ多少の浮昇力を残したれば九死を出て一生を得んとを希ひたるに斯は爾も如何に距離を制限する處の發條は利かすして全く其能力を失ふに至りたれば今こそは只空氣の有ん限り駛行せねばならぬとはなりぬ斯くて予は動ける丈け動き行きて遂に四百碼許も來りたるとき二十五尋の海底に沈降したり沈みて底に達するとき予か鼻は先づ砂に當り而して予か肺は轉倒せり斯くする機みに止めは外れて曳金を控へ空氣瓣を閉ちたれども事既に遲きを如何にせん彼の漏洩せる室中には水殆んど一杯に侵入したれば此の時に至ては些の浮昇力もあらずなりぬ

スチームピンチスに乗り居たる少尉は此の時予に何事か工合悪しき處あるを認め知りて予か其の艇下を通過して行きしとき予を拾ひ揚げんとして跡より追驅け來たり予か今や沈み果てんとする際には殆んど予に追ひ付きパウメンは艇鉤を以て予を釣けんとせしに僅かに予か肺に一觸せしのみなれば只手を空くして予か碧溟の裏に沈没するを打守り居たるか遂に其の處に目標を置き予か亡せたとを報告せんか爲めに本艦差して歸り去れり

艦内諸氏か此の新聞に接せしときの感情は種々様々なりしなり

イープス 一度取得て復た之を逸出するか如き愚人には水雷の奴も能々愛想をつかしたりと見ゆ
 副長 如何にイープス殿水雷發射演習の結果も其れにて御満足なるへし此後は有事の秋に必要な軍
 器を失ふと許りを考へられすに少く艦内に於て立派に之を保存せんとを講せられたし
 副長の言に依て見るときは其の意見通りに爲し置けば水雷は何時にても役に立つへきものと思へるに似
 たり

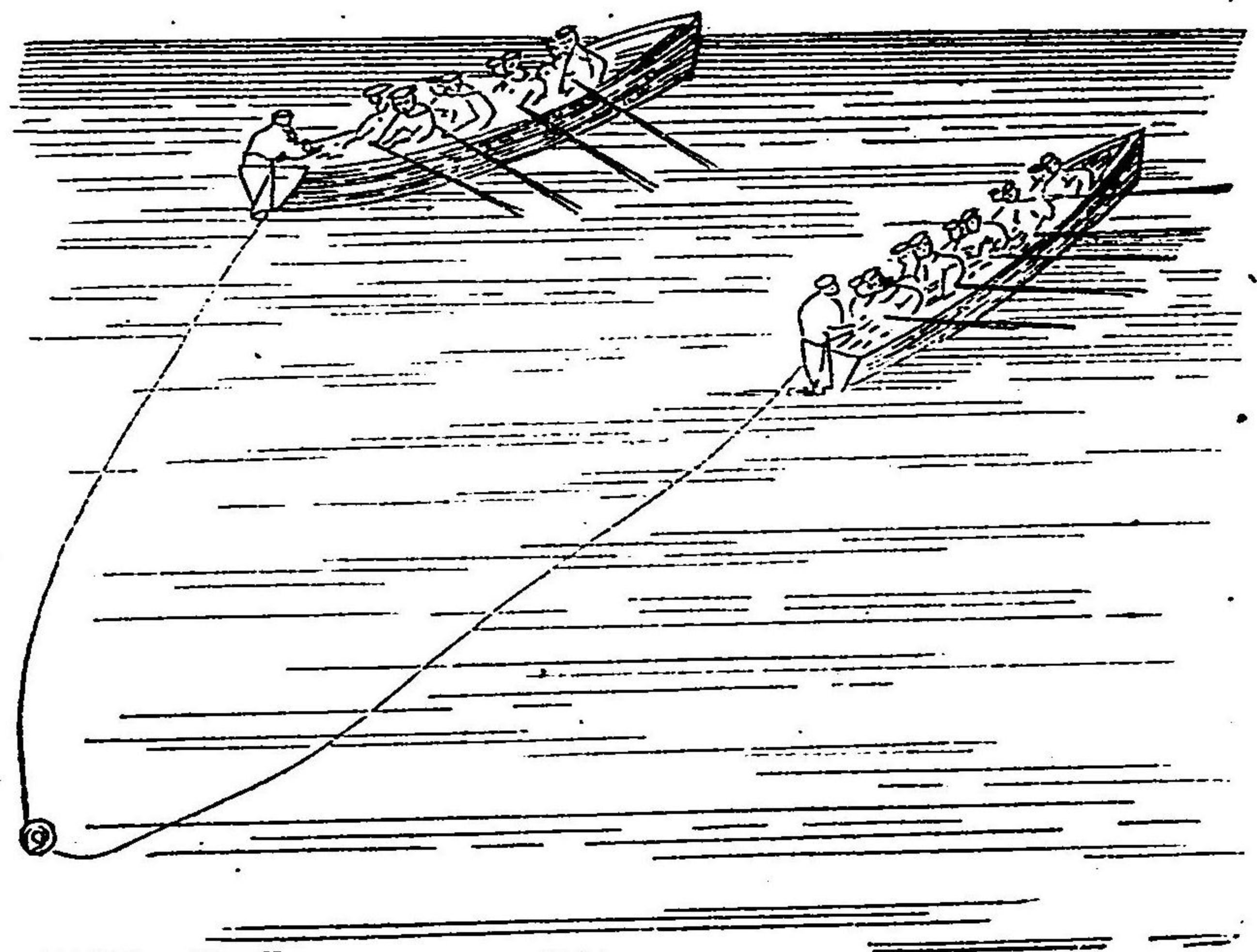
ハンド 昨日頃狎染の水雷もどう々々失つるか

と云ひて予を救ひ揚ぐるの方法を講し又は予か失せたる所以の理屈を推究するとに盡力せしも別段に好
 理屈にも考へ當らず只本艦に備へある大綱を二重になし其の下部に重錘を附し之を海中に曳て以て予を
 搜索せば或は拾ひ揚ぐるを得るかも知られすとの意見を提出せり尤も予か沈みたる處は餘りに深くして
 到底潜水器の達し得へきにわらず通例艦船の潜水器か其の用をなすは十二尋を以て最大なる深度となす
 なり

カピタン、マは直に吟味に取掛りたるか平常とは違ひ此度は予か失ひたりと云ふの外確としたる處を
 は探り得ず又誰一人として斯く々々の次第なりとて之を指摘して辨するものもなし

茲に至て問題は只予を引揚ぐる方法如何と云ふに止まれり前にも述へし如く予か沈みたる處の海底は二
 十五尋の深さにして潜水器をも用るを得ず只搜索法を行ふの一手段あるのみ讀者は知られせんか此の

第 廿 二 圖

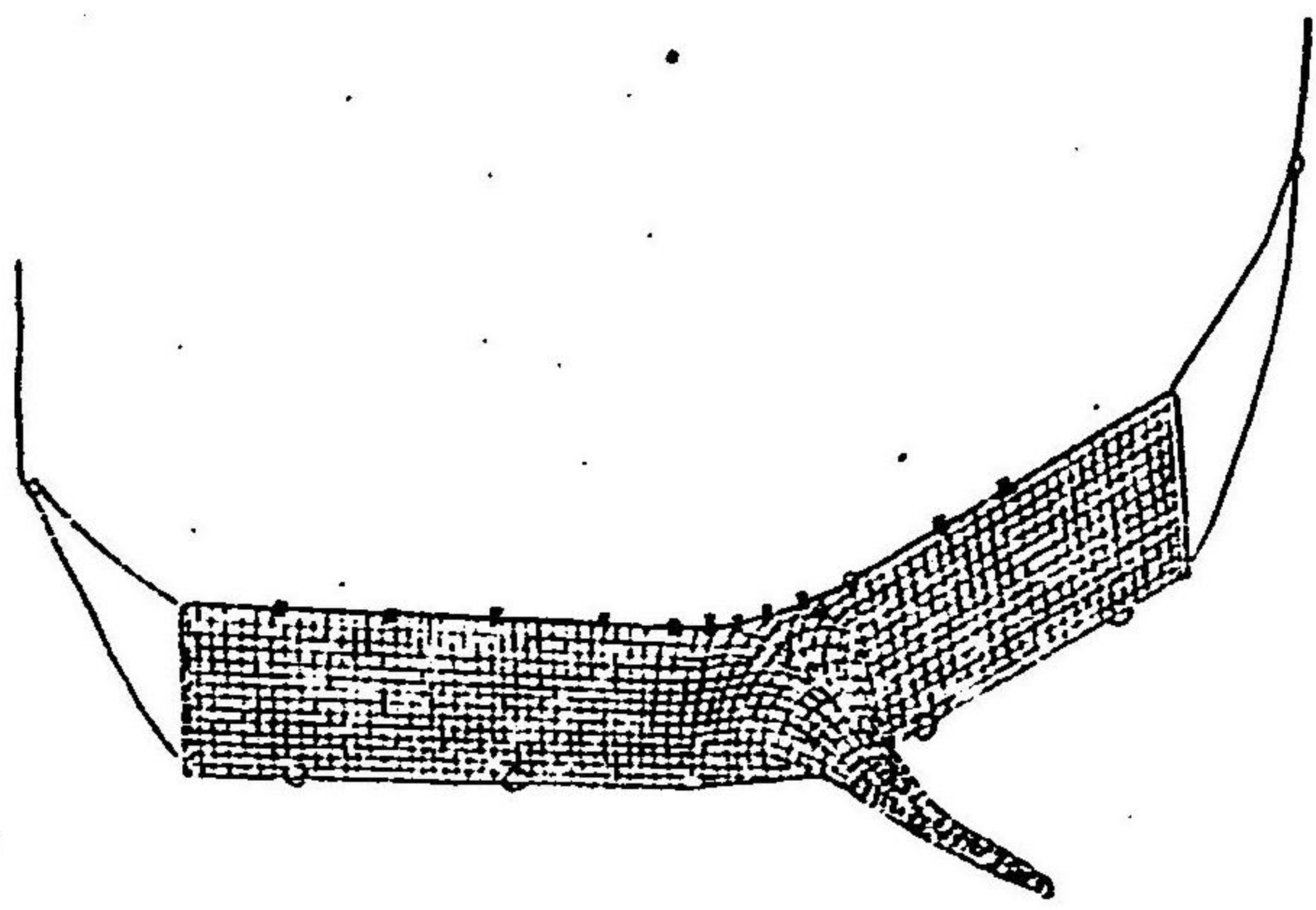


水 雷 を 搜 索 す る 圖

搜索法は二の短艇にて之を施行するものにして一の長き大綱の中央に重錘を附着すると二十二圖に示す
 が如くし其の兩端を各艇に把り持ち失せたるものゝあ
 りやすらんと思敷處を徐々と曳き行くなり斯くする間
 に海底を擦り行くバイトか目指すものに引懸りたるど
 きは兩艇は綱端を手操り近づきて相合し扱て一環を把
 り綱の兩端を通して滑り下らしめ之を脱落せぬ様に爲
 し而して後ち曳き揚ぐるものなり乍去此の法は深き海
 底にある魚形水雷を拾ひ上くるに適當せざるは極めて
 親易きとにして其の不利なる點はバイトか之を拘把す
 るとなく其の上方を徒過し易きにあり好しや之を拘把
 したりとするも頗る滑り逃れ易き形状の者なるか故に
 首尾好く之を曳揚げ得るは誠に期し難きとなりとす然
 れども兎に角此の法を試むるととなり艦隊の諸艦より
 は短艇を差し出し兩三日の間も予か沈み居らんと思は
 るゝ場處を萬遍なく搜索に及ひたれども結局何者にも探り當らざりければ遂に艦船用の綱を用てハンド

氏の方法を試るとなれり

第 廿 三 圖



網を用ひて捜索する法

是に於て彼の網を取り其の袋になりたる處をは塞がぬ様に兩端より中央の方に向て二重になし下縁には重錘を附したり是れ柵木の浮上力を平均し網をして海底に付き居らしめんか爲めなり兩端には通常の如く之を開張する爲めに棒を附着し之を曳くべき網は此の棒に結着せられたり又た之を曳くには二艘のスティム、ピンチスを以てすることせり扱新捜索法再ひ始まり三日餘りも引續きしか何の結果もなく只少許の氣の利かぬ魚介を獲たる位の功能に過ぎざりき茲に至て予は其處にあらざるか或はありとするも到底獲べからざること評議一決し今は予を拾ひ揚げんとするとは斷念せられ予か失亡せし趣

を海軍省に報告することとなりぬ
予は是より予か身上に復へり當時如何なるとの起りしやを陳述すへし

第七回

讀者は予か海底に達し痛く突き當りて轉倒したれば之か爲めに空氣瓣は閉鎖せるとを記憶せらるへし去

れは予は身動きもせず海底に横臥せしなり抑も海水の充滿したる室と云ふは小形のものなりしかは予は浮き上る程の浮昂力をは有せざるに相違なれども予か躰は割合に輕き方なり此の處には海濱に沿ふて北に向ひ走過する一條の強き潮流ありしか予は海底に達するや直に此の潮流の爲めに押流されたり是れ即ち予か今も述へたる如く割合に身軀の輕ければなり去れば何故に惣ての捜索法は其の効を奏せざりしや又彼のハンド氏の新發明に係る方法すらも予を拾ひ揚ぐると能はざりしやの譯は讀者茲に至て了解せられたるなるべし

予は時々岩角に引懸るヨと思ふ間もなく復た潮流に押出され杯して稍や十二時間も漂流せしか此の間に予か負ひたりし手傷は極めて多かりしのみならず其の外處々砂の爲めに磨擦せられたる部分は鏡面の如き光輝を發せり予は副長カルセムに之を一目せしめ其の喜べる顔色を見ざることを残り多く思ひしなり彼の砂か物を奇麗にするの効力に就ては尙ほ他に一條の物語りあり之を左に解説すへし

該事件の起る一周間許りも以前のとよりし司令官のパーシに乘組める一人の火夫水中に落入りたりしか此の折件のパーシは蒸氣を保ちて本艦の傍にありてローア、ブームに繋留され居たりしなり讀者の内には此のローア、ブームの何者たるを知らぬ人もあるべきか是れ則ちローア、スタンネルを掛ける爲めの長き圓材にて凡そ艦船の港内に碇泊し居る間は此ブームを艦側に對し垂直をなす様に押出し諸短艇は入用の時の外は之に繋き置くを常とせり是れ其の艦側に觸合ひて擦り傷けられんとを恐れてなり扱も彼

の火夫は午後四時の頃恰も午後の當直を勤め終り今や晚餐を喫せん爲め艦内に赴くとを許されたれば、
 プームジャコフスラダに向ひ繩梯を攀ち登り將さに艦内に入らんとしてポール、チェインの上を渡りつゝありたる折しも
 如何にやしけん足を失ひて墜落し其途端に中甲板なる一砲門の角にて痛く其の頭部を打ち翻りて海中に
 沈入りしなり此の時矢張りプームに繋きありしカッターに居たる番兵は「人か落ちた」と大聲に呼び置
 きて直に水中に飛込み又舷門に居りたる一人の男も續て飛び入りたれども遂に渠を救済する能はず去
 れば鬱憂の情を含みつゝ十百の眼にて見張り居たる甲斐もなく渠の行衛は知れさりしなり
 是れより後ち三日程も過ぎて北の方の濱邊に銃獵にとて出掛けたる士官等の内一人海濱に於て彼の男の
 屍體を見出し歸艦の上此の事を報告しければ之を埋葬せんか爲めハンド氏は艇員を率ひて之に赴きたる
 か最初に彼の士官か歸り來りて物語りたる内其の妾の如何に成行きし杯忌はしきとは暫く差措き只砂の
 動作に關せる要點を擧ぐれば彼か纏へる衣服は云ふも更なり其の毛髮に至るまで微塵も留めず洗ひ去ら
 れたり

人々は皆其の變れる狀を見て甚ど哀れを催ふせしか斯くてあるへきにあらざれば濱邊に近く一壙を穿ち
 て之を取藏くし形の如く祭文など讀上げて孤塚の主とぞなしにけり

此の葬儀中にハンド氏を感動せしめたる一事ありけり其の事たる大に吾か英國水兵等の常に懐ける頼母
 しき精神を表章するものなれば爰に之を語り出つゝ爾も土砂にて墓壙を覆ひ終りたる折柄其の近傍を

尋れども別に墓標となすへきものもなければ已むを得ず其の上リュコンダに刺鷹爪(草名)を取りて植置たるに一人
 の男其の數株を摘み取りて大切に之を持ち歸りたればハンド氏は之を異しみて其の謂はれを問ひたるに
 其の男辨して云へらく

去ればなり元來此の不合せなるシムは郷里に老母と妹とを持ち居れば其の墓より些の印にても持ち
 歸り切めて彼等を慰むるよすがにも致さんと存じてなり

此の一條の物語か胸に浮へるは予か海底にありて潮流の爲め嶮はしき斷岸に押付けられつゝありし折に
 て之につけても悔しく思ひるは予か身の上にて彼等か時々一桶の海水を汲むと微りせは故舊のものど雖
 ども予か墳墓の名残りをさへ得へからず好し又人より取て以て之を送りたりとするも知らず果して懷舊
 一滴の涙を賤くものあるへきや然し乍ら此話は予をして大に銳氣を復せしめたり素と彼の男も予も大同
 小異の處に沈没したるものなれば予と雖も其の濱邊に押し遣られずとは云ひ難し若し左もなくして今の
 處にある以上は成る程水は淺きに違ひはなけれど斯様なる位置にては到底見出さるゝの期は少なかるへ
 し只吾か不審に堪へざるは彼の抜目なきハンド氏が溺死人の打上げられたる模様杯を考へ合せ此方に向
 ひ予を搜索せんと思ひ立たざるの一事なり斯くする内に數日を過ぎたれと絶へて生物の影たに見へされ
 は予は復た勇氣も挫け果て心細く思ひ居れり只間斷なく予を窺ひ視て予が何者なるを知らんと欲する物
 數奇の魚類は此の限りにあらざるなり

予は斯る有様にて一周間許も海底に呻吟し居たるか一日棹を掻く音せり耳を欬て之を聞くに正しく人の聲あり先づ聞へたるはイーナス氏の聲にて

僕は到底駄目のとど断念し居るなり彼奴を尋ね出さんか爲めには先週以來處々方々漕ぎ廻りたれど影たも見へず察する處彼奴は本艦の近傍にて容易に達せられぬ深き海底に在るなるへし

と云ひ乍ら恰も予か頭上を過ぎたるるとき艇尾床にどんと尻餅を搗くか如くに坐しにけり其の言ふ處に依れば彼等は予を搜索する爲めに海岸を漕ぎ廻りしものと見へたり此の時予のありし處は水面より去ると儘か二尋にも至らず加ふるに海水は極めて澄明なれば今や決して予を見損するとはなかるへきに彼は腰打ち掛けて見るとを廢したれば予は腹立しさに得禁へす櫻み付き度く感したり

ハンド氏は又現に予かあらざる方面を眺めてありたるか

併し餘處にあるべくば必定此の邊にこそあるべし先づ思ひ屈せず今少し尋ね見よ

と答へたり

此の一言に勵まされてイーナス氏は唸り乍ら起き上りたるか早や幾何か予と隔たりたれば事已に遅く予か救出さるへき最後の機會も爰に消失し終りぬ

此の後ち數日の間予は其處に留りたるか三秋を経るの思ひあり初めの程は日々只同様の鬱悶のみにして一事の變化なきに苦しみたれども追々慣るゝに従ひ身の周圍に簇り來る魚族に意を移し其の種類を見

分け或は其の習癖に通熟するを以て樂みとし僅かに氣も紛れければ時日の立つも隨て早やかりし世人は一般に魚類の生涯には何の樂事もなきと考れども是れ誤見なりとす一夜予か驚きしは一團の火光ありて水面一圓に明かなり予か隣保の魚族等も痛く之に仰天せしと見え及ふ限り濱邊の方に近く寄集ひ此の目慣れぬ現象は果して何事にてありしやを見究めんと動搖めきたり斯くする内に馬鹿者共は不意に人聲あるに驚き怖れ初めて其の身の大切なるに心付き急に水の深き方に逃れ去らんと欲せる頃は既に魚網の重圍に陥りたり即ち人聲ありしは漁夫共か火を照らして魚を誘寄せ之を網に追ひ込みたるにて渠等は早や已に之を曳張り初めたり

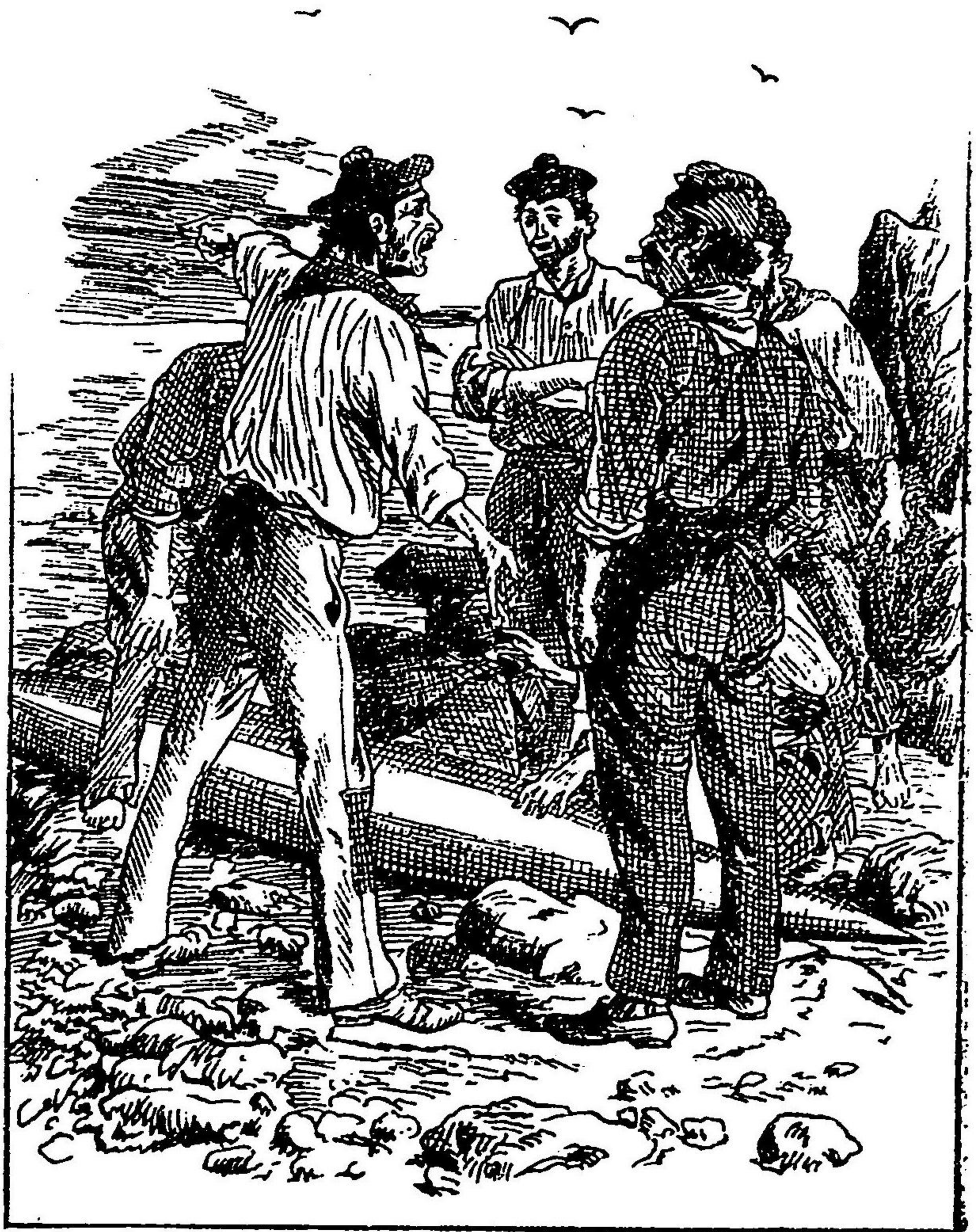
予は此の時まで暫くの間なりとも交際したる者共の成行きを案するとのみに氣を奪はれ予も此の爲めに如何なる傍杖を蒙るかなどの事は一切思はずにありしか忽ち氣か付きて見ておれば予も亦た網裏の魚にして再び娑婆の方へ徐ろり々々と引張はれたり茲に至て予は大に悦ばず自ら謂らく予とても其の情に於ては人間と異なるとなし一旦地下に入りて再び之を出るは物憂きとの限りと云ふへし予は既に静閑に處して魚族を伴侶とせし者なれば決して復た好んで塵世の事を見るものにあらざるなり成る程予は尙ほ一度乾燥の陸土を見るを嫌ふとは云はされども去りて一の情感あるを免れず是れ誰人にも一生の内に何時か經驗して知るとあるへき彼の煩を厭ひ面倒を避くるの念と静閑獨處を好むの情なりとす乍去予は段々と陸地近く引寄せられ漁夫の聲々は手に取る如く聞ゆるまでに至りたるか其の内には英人あり

マルタ人あり其の餘は土國人なるへしと思へども予は是まで未だ土語を聞きたるとなれば確とは思ひ定め難し去る程に網は予の目方の爲めに最と重やかなりしかば漁夫共の一半は之を引揚ぐるに骨の折れるを嘔き又一半は定めて好き獲物あるへしとて自ら祝ひて止まさりき此の時網は予か尾部の縁の鋭さに堪へずやありけん忽ち綻ひて一孔を生し予は之より滑り出る様に感したり予は疊きに牽る再ひ世に出るを好まぬ様に説きたるか今や予は斯く滑り抜けんとして所望の如く水中に残り留るには好機會とも云ふへきに斯くまでに至りたれば却て反對の感情を起し來り是れまでの生涯を嫌惡するの念甚しく如何にもして尙ほ一度フヒヤノト號に立歸らんとを希ふの念慮熾んになれり今も云へる如く予が尾部は已に振出たれば最早や是れまでなりと覺悟したるに思ひきや予は復た網の目にて確と止まり徐々ながらも再び陸地の方へ引かれ始めたり是れ予か胴は尾部に比すれば其の徑頗る大なるも彼の孔は予か胴を通過せしむる程には大ならず且つ此處には縁の鋭き處もなく確と予か軀に纏はりたれば予は無事に留まりしなり予は讀者に向て屢々予か感情を述べたるか或は云はん一箇の水雷の意としては甚た過分ならずやと故に予は最早冗長しくは之を述べす只心ある人々の量察に任せんのみ去る程に予は朋友の魚族と共に久し振にて乾燥なる陸上に出たりしが周圍には先きに聲の聞へたる漁夫共の上衣をも着けさる見苦しき服装にて簇り居たり乍去未だ予か何者たるやも判然せざれば頼には近傍へ寄來らす衆説の歸着する處は沙魚なりと云ふにありたれども中には海豚なるへしと云ひ又た或るものはボルボイスなるへしと云へり彼等

は遂に予か敢て身動きをなさざるを認め得て勢を出して側に進み來りたるか其驚愕は愈々甚く仰天の聲と其の附會する意見とは奇妙の雙絶とも稱すへかりしなり其内に一人予に觸れ試みて鉄にて出來居ると呼ひたれば(予は飛切りのビスマー鋼板にて出來居るに失敬なる奴と思へり)多人敷盡く予か周圍に簇り來り銘々予に手を觸れ試みて自家の判断を下さんとせり然るに一人は餘り輕跳て奇き目に逢ひたるものあり其の他は一人か空氣瓣を開きたるに當り尙ほ螺旋を握り居たるに(是れ先きに予か海底に達したるとき閉ちたるものなり)螺旋は突然廻り出し之を持ち居たるものの指三本をもぎ去れり此と同時に兼て空洞なる螺旋軸内に溜り居たる水は噴出し凄まじき勢にて予か背後に在て見物せる者其の面上に注ぎ掛りたれば其の騒動云はん方なく彼の負傷したる男は(マルタ人)マルタ人に非れば決して上げ得間敷き叫聲を發し又瓣を開きたるものは其の餘のものと共に飛退き仰天すること大方ならず去れども瓣は只幾分か開きたるものなりしかば直に又閉鎖し(稍や發條の性を備へたる故)予は前の如く身動きもせず居りぬ

漁夫群中の騒擾は愈々甚く罵り噪きて霎時は鳴りも止まざりし元來彼の瓣を開きたる男も已れか此の過ちを起すべしとは夢にも知らず衆人は同く予を弄ひつゝありしにて螺旋か急に廻り出し空氣と水とを噴出せるに及びて其の手を放ちしものなれば彼の襲撃は全く予が方より故意に發せしものと見受けられしなり是に於て彼等は予を目して奇妙稀代なる海中の怪物となし已れ等を誘き寄せ置きて尾を振ひ唾を吐

き思ひも掛けぬ害悪をなす杯其の性極めて狡猾なるものなりと定められたり
 斯く罵り騒きて稍や時を移したるが愈々會議を開て予の處置をは決するととなれり彼等は皆な多少英語
 を解するものと見え會議中英語を用ひたれば予は其の言ふ處を明亮に聞き取るとを得たり
 先づ第一番に出たる説は予を再び海中に投すべしと云ふにありて此の議を賛成するものも多かりしが唯
 一の疑問と云ふは之を實行する方法にて誰一人として二度と再び斯くの如き恐ろしき怪物の傍に近寄
 らんと云ふものもなし此の一事か出来ぬものとすれば予を水中に投するとは到底行はれざるとなれば此
 の議は遂に廢棄せられたり二番目に起りたる説は一の穴を予か前面の土中に鑿ち予をは綱もて曳行き其
 の内に埋めんとするにあり此の説は初めは行はるべく見えたるか已れこそ危険を冒かして其の上に土砂
 を覆ひに行かんと云ふものあるとなし三番目のものは火を以て予を燒棄てんと云ふにあり乍去此の説は
 渠は甲鐵板を鑑ふたる怪物なればとても燒毀たれまじと云ふ論鋒に駁撃せられ加ふるに予の周圍には火
 を焚かざる可らざるに復た誰一人進んで之を焚かんと云ふものなければ是も亦遂に廢滅に歸し終れり
 惣て此の間も予か何時渠等に襲ひ掛らんも測り難しとて看守に油斷あるとあし扱も種々辨論のありたる
 末此の事件をラルナカに駐割せる本島の太守に訴出て其の指揮に任かするとに評決したれば衆中より惣
 代兩名を抽撰し直にラルナカに向ひ發途せしめ居殘る者共は予を取逃さざる様にせんと其の手に取掛
 りぬ即ち二條の大綱を（漁網の兩端に附着してありしもの）持來り其の一方の端にスリッパ、ノットを作

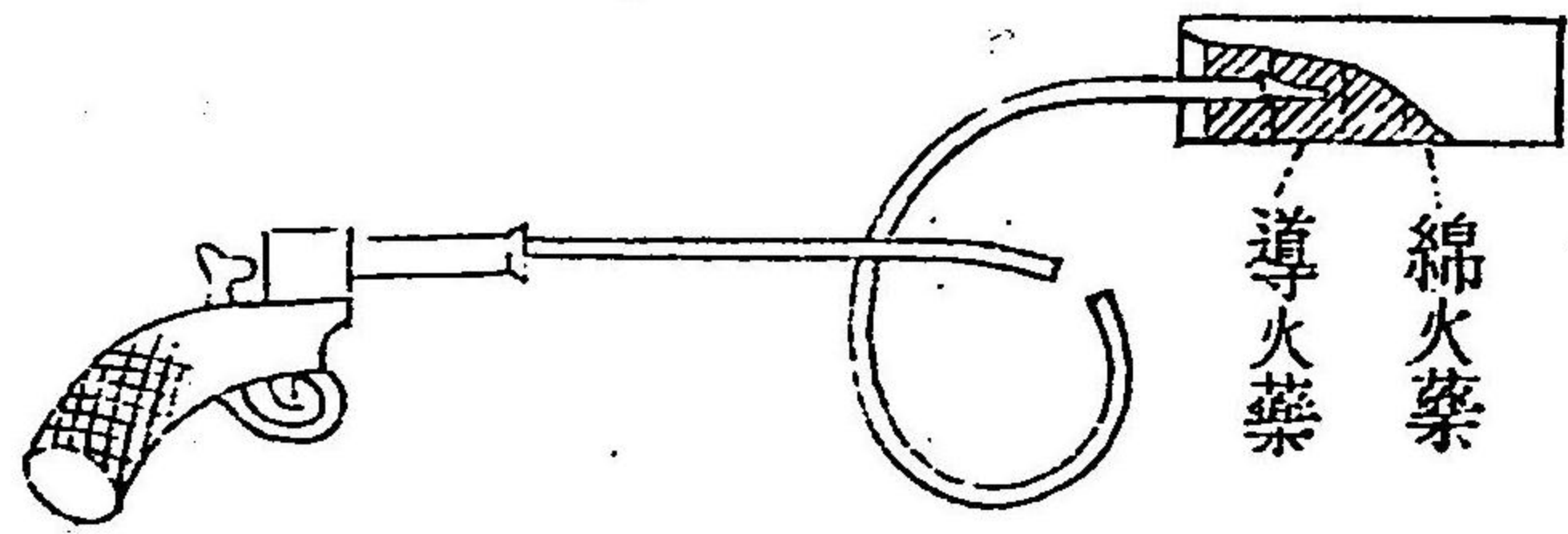


渠等は遂に予か身動きを
 爲さざるを認め得て勢を
 出して側に進み來たりた
 るか其驚愕愈々甚し

り之を快手てばに予か頭と尾とに投げ懸けたり尤も予か狂ひ出さんとを恐れられたれば其の都度人數の一半は綱の端末を把持し居たるか云ふまでもなく予は身動きもなさり去る程に渠等は地中に棒杭を打込み之に綱の端を確と縛り付け見張番二人を留置き其の他は焚火の周りに圍變して宵の間の不慮の事打語らひつゝ居たりけり

翌朝午前十時頃となりし予は馬蹄の響を聞き次て數個の英人の聲ありて其の内にカピタン、マリー、ハ
 ンド氏の聲杯も打雜れるを覺へたり之を如何にと尋ねるに彼の使節は昨夜更開けて太守の館に參着し太守に見えて直に言上すへき一大事あり若し猶豫されなば本島に如何なる難儀の起らんも知るへからずと申出何様唯事とも見えされは直に傳令使を以て事の趣を尋ねらるゝに彼の沿岸を荒さんとする怪物のと及び己等か幸にも之れを漁獲し擒となし置きたる始末を訴へたれば傳令使は大に驚き直に之を太守の前に至り披露せり當時太守の職にありたるは工兵大佐メッドランド氏なりしか彼の者共を引見せり氏は素より水雷のとは暗からず且つ艦隊にて一の魚形水雷を失へることは兼てより知り居る所なりければ直に右の者共をしてフヒヤノート號に赴かしめ其始末を陳述せしめたり渠等か該艦に到着せしは午前四時の頃にして當直士官は之に接して其の云ふ所を聞けるに只恐しき海中の怪物とのみ云ひて何事あるか少しも了解せされども兎に角之をカピタン、マリーに具申したるに艦長は甲板に登り來るや早くも其意味を解し得たれば當直士官には渠等に食物を取らせよと命し置き又ハンド氏には一時間の内に上陸すへ

第 廿 四 圖



ければ速に用意をなすへしと云ひ送れり是れ予か前に述べたる如く人々の現はれ來りし所以なり又艦長等の一行が出發すると同時に一艘のカッターを發送し海上を廻りて來らしめられたれば予は直に縛を解かれ本艦差して曳き歸られ又予を捕獲したる漁夫共は厚く恩賞を宛て行はれたり茲に予は聊か歸艦せし折に執行されたる檢屍の模様を陳述すへし予は勿論痛く鏽鏽を生し居たりしかは悉く取崩されたるに彼の破損したる瓣は自ら其の理由を解説したれば予か沈没せし秘訣も總て明かになりたり乍去誰とて此の過失に對し責任を負ふものなく氣の毒なるイープス氏も其の譴責を免かれしなり讀者は予か何故に氣の毒なるイープス氏と呼び又予を受取る爲めに氏は何故に來らすして却てハンド氏か來れるを異み思はんか氏は此の時最早や此の世にはなき人の數に入れり其の死去したる譯柄は左に述ふるか如し

英國海軍艦船にて使用せる諸般の兵器の内に擲爆藥なるものあり其の製法たる總重量二封半に至れる板形の綿火藥を錫罐に裝填したるものにして毎個之を爆發せしむるの口藥ありて此の内に長さ六尋許の瞬間信管の一端を押し入し信管の他端には短銃ありて之を發火するものなり此の瞬間信管なるものは火藥を含める木綿糸を心線となし其の外部にガマパークを塗擦したるものなれども内外空氣と通脈をば有し居るなり此の心線は極めて迅速に燃燒するものにして凡そ一秒間に百呎許を燃ゆるものとす

此の擲爆薬を用ゆるの法左の如し
 之を使用せんと欲する人は先づ其の左手に短銃と縮ねたる信管の幾分を握り持ち右手に信管の殘餘と爆薬とを握り持つなり斯く構へ居りて若し之を以て撃たんとする目的に達し得へき距離に來るときは右手にて爆薬と縮ねたる信管とを投げ掛け必要なるときは左手より信管を操り出すへし而して爆薬其の目的に中るときは直に左手にて短銃の曳金を引き之を爆發せしむるものなり時々此の擲爆薬を使用して演習をなすの慣例となり居たるか是亦水雷長の管轄する處なると勿論なり去ればイノブ氏は一人の水雷術



第 廿 五 圖 擲 爆 薬 を 投 ず る 圖

是より百碼許も隔りたる第三樽に向て直進し其の外装水雷を爆發すへき計畫とぞ聞へたり
 幾個の人員は水雷を取り出す爲めに配置され居りて通例該水雷の總連接部は前以て其工合好きや否やの

教官と共に擲爆薬發火を執行せんと欲し二個の外装水雷を備へたるステームピンチスに打乗りて出掛けたるか豫め定め置きたる方零は假に二個の空樽を置き以て敵の二衛艇に擬し尙ほ一個の空樽を置きて吾か水雷を以て攻撃すへき敵艦に擬しステーム、ピンチスは先づ兩樽の間に突進し此の處を通過するに當り各樽に擲爆薬を投して之を破壊し終り而して後ち

試験を經へきものなるが此時は件の試験も未だ了らざりしもの、如くなりし却説イノブ氏は擲爆薬の一個を持ち居り彼の教官も亦其の一個を持居りて交へ之を抛擲すへき筈なりしか此の間汽艇乗組の水兵共は最前方の楯下に在りイノブ氏と教官とは後方の楯下に在り而して水雷用の電池、發火輪等も亦此處に備へあり扱て汽艇は運動を始め第一に設備されたる兩樽指して進み行き今や將さに到達せんとする微く前に至り教官は外装水雷に附屬せる一電線か發火輪に接続する様の正しからざるを發見し之をイノブ氏に指示したるが今は早や目的に對し餘利の時とては數秒間のみなりしかは兩人は其の右手に持居たる爆薬と信管とを下に差措き接続の改正に取掛りて漸く之を改め終りたるときには既に教官の方の側に在て之に近接せる第一の樽は僅かに眼前に至りたれば兩人は倉惶爆薬と信管とを拾ひ上げ教官は隙かさす之を樽上に投掛け狙ひも違はず打中たる拍子に其の短銃を發したるにこは如何に猛烈なる爆裂は却て吾か艇中に起り憐むへしイノブ氏は幾んど粉石微塵になりて果て教官は又重傷を蒙り楯は破れて一大穴を生したり呼是ぞ兩人が混雜に紛れ互に爆薬を取り違へたるにてありしなり
 蓋し教官が持ちたる方はイノブ氏の短銃に連續せる爆薬にして又イノブ氏の持ちたる方は教官の短銃と連續せるものなりしに教官は其の短銃を以て點火したれば何にかは以て堪るへき現在イノブ氏か持ち居りたる爆薬を爆發せしものなり
 不注意なり、不注意なり嗚呼是れ常に不注意なるより起れり今單に之を遐想するも尙ほ人をして戦慄せ

しむ且つ夫れ此の如き過誤が平常心の落付きたるの日にありてさへ發作するものならば彼の戰時慌忙、氣激するの時には果して如何なるへきや憫むへきイース氏は其の一分前には斯くまで死期に近きと思掛けさりしならん只其の過失は此の如く多かりしも氏も亦た一箇の良士官たるを失はず何となれば其の在職中水雷の事業に關し起りたる不慮の過失の如きは誰をして其の位置を襲はしむるも頗る起り易き事柄にてありたればなり予は茲に此の慘澹なる物語を止むへし濫りに慘話を以て讀者を悼ましむるは素と予の希はさる所なるのみならず若し予の言をして水雷の事業に於ては如何なる瑣事も注意到注意を加へ念には念を入るゝと信に必要なりとの警戒の意を含まざらしめば予は實に恣に贅言するの責を免かるゝ能はさるなり

件の椿事起りたるより再ひ斯るとのなからしめんとして瀛艇に唯一箇の擲爆藥を備へて發送せんとは勿論爲すへからさるとにて是れ其の舌を嚼傷せんことを恐れて其の齒を抜き去るの愚に異ならざるなり好し假令斯くなしたりとするも苟も大なる注意と細心とを用ふるに非らされば不慮の過失の起るへき範圍は實に大且つ廣しと云ふへし故に予は此の擲爆藥の事に鑑みて之を諸般の武器に反省せられんと欲するものなり如何なる不慮の過失にても其の因て來る處を尋ねれば大抵一の不注意か若しくは經驗の不足に歸せざるはなし云ふまでもなく一度不慮の過失に逢ふて之に懲りたるときは復た此の如きとなきを期すへき様に見え吾輩とても彼の禍原となりしものは一切之を絶滅せしむるを希ふものなれども只事の起るや

徹頭徹尾同一様なるへきは到底望むへからされば豫め之を規矩するの至難なるを恐るゝなり殊に海軍々事の如きに至ては大に迅速なるを貴ふか故に事毎に熟考すへきの利時もなし是に於てか其處辨上、自然感應の知識の必要を見るなり抑も此の靈性たる唯細心習練して初めて得らるへきものにして猶ほ彼の提琴を彈するものゝ指頭動きて自然其の處を誤らさるか如し然れども其奧妙に詣らんとするには止まず操ます實際習熟の功を積むにゐるは人々の知る所なり

第八回

先の日歸艦せし後は予か生活も甚た無事にして分解手入掃除等を受け而して工合の惡しき處には修理を加へられたれば今は健康も全く舊に復したり左は云へ鏽鏽を磨き落したる處の外觀は敢て舊時に變はれる様には見えされども腐蝕の入ると深かりしかは其の工合に至ては大に前時に若かさるとを覺えたり乍去精力に於ては毫も衰へず予は二三回も快絶なる駛走をはなしぬ

折しも世間に何か葛藤の起るへしとの風評盛に行はれたりしか其の事果して眞となり吾か邦は實に佛國と戦端を開くに至りたり

予は此の紙上に於て政治を談するを好まず一箇の保氏水雷争いざなひでか政治上の意見を有するとあるべき唯眞直に駛行し職分の爲め潔く一斃すれば其れにて事は濟み足るなり乍去如何に予と雖も人の談する所を耳

にせざるとは能はず扱予か聞得たる所に依れば此の時本國の狀態たる餘り好き方にはあらず取り摘んで云ふときは時の政府は費用節減の點よりして許すへからざる程度を陷超ゆるまで艦船の員數と實力とを弱めたりしとて痛く攻撃を被れり尤も此の言たる今日に始まりたるにはあらず既に某新聞の如きは數ヶ月前より論說に投書に百方之を指斥して論し或は精しく統計表に對照して佛國か漸を以て其の海軍の勢力を増張し遂に殆んど吾邦と對等の地位に立んとするは争ふへからざるとなりと證論せり又海軍の某將官の如きも大に此の議を主張せられたるか其業務に身を委ねて此の位置にまで經昇りたる人の意見なれば幾分か採用されたと信するなり其は兎も角も愈々佛國と開戦したる曉に及ひては一國の頼て以て重きを爲す所の吾か海軍は決して彼に超絶せる者にはあらずし或人は説をなして實に彼に劣れりと云ひたれども吾か國人は之には左袒せざりき又此に次く所の論點は吾か大砲は總て彼に及はずと云ふにありたれども之れをば一人として然らずと打消すものなし此の説に對し當路の官吏か言ひ逃るゝ所の口實は唯他國の長所を取らんと計畫しつゝありしに因れりと云ふに過ぎざりしなり

此の言を聞て憤怒せるものあり爾も亦無理ならぬ次第にて當時捲線式製砲（シュタム、フレイヒニルゲン）の法たる其の利益少からざるものなれば之を用ひんとを申出るものありて根氣強くも凡そ二十年間之を主張したるに政府は今日に至り僅に之を採用せるかせぬか位の運ひなるは隠れもなき事實なればなり説をなすものは之を官吏社會の猜忌心の爲めなりとせり元來彼の法を發明せるものは機械師にて製砲家にはあらずしを以て製砲家は

一圖に之を擯けて用ひざりしか遂に已を得ず之に服従するに至りたれども事已に遲しと云ふへし斯くてあるへきにあらざれば吾か國は佛國に向て力の及ふ限り兵備を修めたり即ち吾か英露艦隊は矢張り地中海に留存在すへしとの命令を得、吾か艦隊の跡目をは豫備艦及特別に命せられたる艦代て之を引受けたり是れ斯る場合には先例あるとなりとす然れども吾か艦隊は地中海艦隊に合併せしものにはあらず却て該艦隊より二艦を派して相會せしめられたれば吾か艦隊は總數八隻に上れり予は其の何故なるやを解せされども察するに何か佛國艦隊の配置に對應せしものなるへし蓋し佛の艦隊の幾分はツィロン港に在て開帆の用意をなし居り其の殘餘の分は北亞非利加の海岸に在りてマルタ島若くはツプアルタルを脅かさんどせり故に吾か艦隊か當るへき敵は則ちツィロンにあるものにして地中海艦隊は殘餘の敵に向ふ等なりき

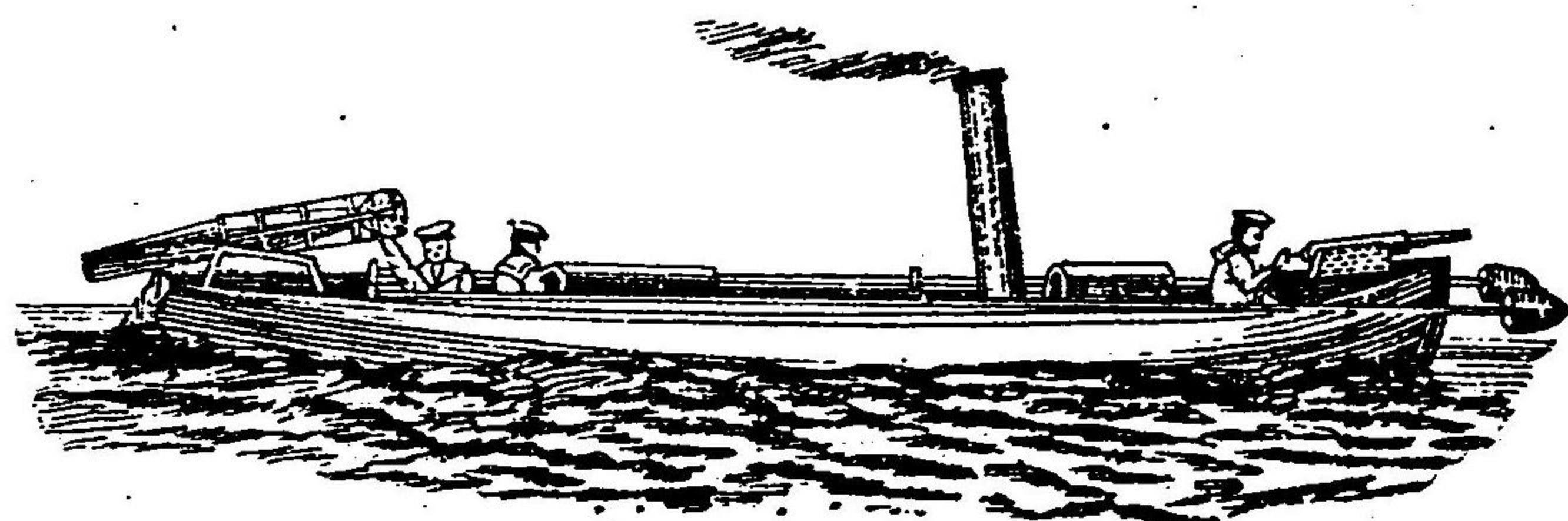
吾か艦隊の職務は晝間は成るべく敵に接近し夜は適宜の距離に引退きて其の運動を看守するにあり吾か艦隊には六隻の二等水雷艇ありて常に水中に仰らしありしか（悪天候の時の外）諸艦のステーム、ピンチスと共に艦隊の内面に在りて其の長さ二哩許の硝兵線（コルダ線）を形作り以て衛艇の役務に當れり是れ敵方より水雷艇の襲撃あるに當り其の時々之を味方に注進せんか爲めなり諸艦は此の上にも夜間は水雷防禦用の網を張廻し居り又斷えず一直の人員を上甲板に差置き敵方の水雷攻撃に遭ふときは直に大砲（重もに機砲なり）に就かしむるの手配あり敵は又速力の大なる巡洋艦をして常に當直せしめ加るに吾に對峙する

の水雷艇ありて以て港を守りたり
此の如き有様にて三週間餘を經過せしか其の間互に夜攻をなすの擬勢を張りしと屢々ありたれども眞誠
の攻撃とては一度もなかりき

予は兼てより演習用の水雷なれば今き實戦の時に臨んで空しく仕舞ひ置かるゝことなり却て是迄用ひら
れさりし他の水雷か予と交代をなしはせぬかと心に危ぶみ居りたるに思ひきや喜はしきとは予は相應
の綿火薬を以て装薬せられ機會あらは用ひらるゝべきとに決定せり此の變則の處置に出でたる所以を尋ぬ
るに予は先頃非常に快活に駛走せしとありたるに依りハンド氏（此の時尙ほ水雷事業と砲術の事を併せ
て管轄せしなり）の考にては未だ實際に試験せられざるものを用ひんよりは寧ろ其の技術も判然し居る
ものを用ふるに若かすと云ふにありしなり去る程に他の二個の水雷は二等水雷艇に搭載せられたるか該
艇は一層の勢力強きスチーム、ピンチスと共に吾か艦に分配されたるものなり該スチーム、ピンチスは
十六節の速力を有し最近の改良物もて装備せられたるものなれども保氏水雷を備付くるの装置はなかり
しかり去ればハンド氏は此の缺點を補ん爲め無據場合には本艦の發射管一臺（艦内には三臺あれば）を
積み載せ之を該艇の艦部の上に臨ませ置んと計畫し居れり尤も其のスライドをは省くものとす（二十
六圖を參看せよ）

此の方法は此の時に至るまで未だ吾か海軍に採用せられざるものなれども（今日と雖も海軍に適應せる

第 廿 六 圖



（スチム）の艇尾に發射機を裝備せしむる圖

るとなるに於てをやと

ものとは承認されざること思へり）ハンド氏加工夫せる新案にてありしなり俟其の方法に依れば先づ好

き加減に敵艦に近接するまで其の船尾に向て馳せ上るか若くは其船首に向て
馳下り是に於て右方若くは左方に向きを變し敵艦より遠さかり乍ら水雷を發
射するものなるが氏は此の法を用ひて攻撃するときは艇首より發射する尋常
の法を用るものに比すれば遙かに優れる功を奏すべきものなることを確信せ
しとぞ其理由左の如し

- 第一 汽艇を其處に致すと大に容易なると
- 第二 該艇は水雷を發射するに當て運轉を停止することを要せざると
- 第三 該艇は免れ去るの機會多きと
- 第四 危険の位地に向て進むとは違ひ見る々々之より遠かり行くものなれ
は該艇乗組者の心頭に慌忙するの念を起すと少きと

此の第四項は大に人の駭撃を蒙りたり其の反對論者の云ふ所を聞くに輒ち
曰く苟も氣力あるものか假令危険の地に向へばとて豈に慌忙するものあらん
や况んや進んで敵を攻撃するに當て先づ退去の事を思ふ杯とは卑怯も亦極ま

ハンド氏は之に答て曰く如何に落付きて恐怖せざる人物なりとも其の措置の如何に依りて水雷艇并に幾個人の生命の安危は左右せらるゝものなるを思惟せざる者はあらざるへし又味方には可成的損害を最小ならしめ敵には可成的莫大なる損害を與ふべきは其本分にあらすや抑も水雷艇の本色たる敵を攻撃したる後ち免れ得るの機會あらは何處までも免るへしと云ふは開明國人の間に行はるゝ通論なり又其の指揮を預る所の士官に於ても其艇は時々刻々危険に遠かりつゝあることを知るを以て他事の爲めに念慮を奪ふゝとなく自然水雷艇の方向を變する前に己れの好める適度にまで敵艦に近接するに於ては其の勇氣を示論するときは水雷艇の方向を變する前に己れの好める適度にまで敵艦に近接するに於ては其の勇氣を示すと固より容易なるへきも若し然らずして他日機會あるときに之を示さんと欲するものゝ如きは無理に此の勇氣を出すにも及はざるべしと

ハンド氏か此説を唱へたるは遙かに戦争の起る以前のことにして予か如きは此の法を以て古きスチーム、ピソチスより數回手際好く發射されたとあり去れば氏は是非共之を實戰に試みんと渴望して止まず此の故に氏は佛國艦隊に近接するとある毎に其の位置杯を視察することを怠らざりしか熱慮する所ありて遂に夜に乗して之を襲撃せんとをカピタン、マリーに申出たり去れども予か水雷艇の惣數を放て無暗に攻撃を試るも其功を收むると極めて難かるへし如何となれば彼の港口にある敵方の衆水雷艇と只亂闘をなすに止るへければなり却説氏の方畧は如何にと尋ぬるに先づ吾か水雷艇の多分を以て敵の衛艇と共に港口に

ありて巡邏する小艦共の内なる一艘を攻撃するか如き擬勢をなさしめ以て敵の衛艇の氣先きを此方に轉せしむるにあり斯くする時は敵の衛艇は大抵之を港の西口に集むるを得へければ此の間に氏は二艇(二等水雷艇并に新ピンチス)を牽て東方の海岸に沿ふて潜入し錨場の内にて最も港口の方に寄りて碇泊せる二艦を襲撃するを得へしとなりカピタン、マリーは之を熟考したるに或は成就すへき様にも思ひたれば之を司令官の前に提出したるに色々議論もありたる後ち司令官は遂に之に同意したれども只ハンド氏をして行かしむるを欲せず是れ則ち若し氏の身に萬一の事あれば管に砲術長を失ふのみならず併せて水雷長をも失ふの恐れあればなりハンド氏は素と機會もあらは自ら出て、大功を奏せんとの名譽心盛んなりしかば之を聞て落膽すると一方ならず己れ其職分に居り乍ら此の期に臨みて出戦するともならずぬ身の上こそ幸さいき次第なりとていと迷惑なるとに考へぬ乍去司令官は如何にしても之を許さず只彼の襲撃にして首尾好く奏功するに於ては昇級に相違はあるへからすと約束したれば此の一言にてハンド氏も納得し不満の念を打捨て只管襲撃の準備に暇なかりき

此の事の議決されたるより第三日目の夜は月も出さる筈なりしかば愈々襲撃は同夜に執行すへきと定めらる斯くて二等水雷艇には一人の海軍大尉乗行くへき旨を命ぜられスチーム、ピンチスの方には一人の海軍少尉ウヰリースカ行くへきことなれり此の人は初めて保氏水雷を其艦上に備付けたるときに行はれたる試験の折より常に之に乗組み居たるものなれば其儘該艇の指揮を預けられたるとなるが此の事に

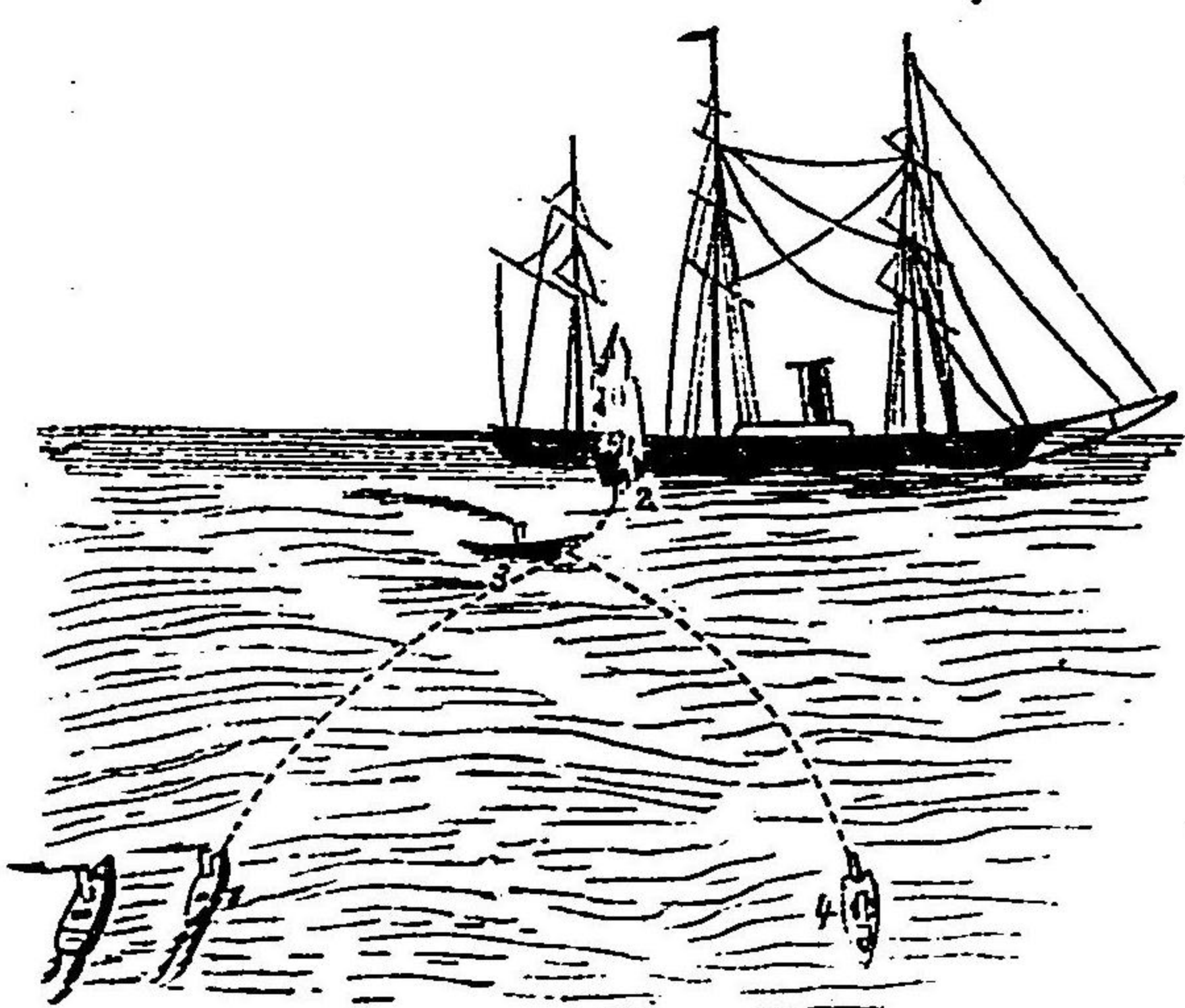
就てはカピテン、ターも大に決断に苦みしなりそは斯く妙年なる士官は事に臨んで或は慥性し措置を誤らんかとの疑あり去れどもウヰリースは實地演習の時屢々其の事業を目撃し居たればとて遂に之をして行かむるととなりたるなり此の時予は自ら謂らく予は常に彼の方法に依て發射せられたりしものなれば必定派遣せらるへしと然るに案外にも別の車臺が積載せらるゝととなり其の内においてありたる水雷其の撰に當りたるが是れぞ却て予か爲めには物怪の幸ひとなりしなり若し左もなかりせば予は決して此の物語を書くとも出来ざりしなるへしと是れよりは今度起りし事共を詳く語り出つへきが實に此の事に關しては予は餘人よりも精細に通せしと信す是れ予か後日に至り去る兩人の對話を聽聞せしに依り唯氣の毒なるとには此等の密談は決して其の筋の人々の耳に入るものにはあらざるなり却説ピンチス并に水雷艇は午後十一時に本艦を發したるか此の時吾か艦隊は港を去ると十二哩の沖合にありて北東の方より快き軟風吹き居れり吾か衛艇は例に依り艦隊の内方に二列線を形作りてありたるか十一時半に至り西方に向て徐ろに進行し其の方位にあるコルベット形の一艘を攻撃するの擬勢を示し且つ敵の衛艇を其の方に引寄せん爲め故らに諸艇に積載せたる大砲杯を發し轟かすべき計畫をなせり又敵の衛艇を一隻も残らず攻撃を受くる點に寄せ集むるは到底望むへからざるとなれどもハンド氏の丁簡にては敵は屹度西方に向て惣運動を起すへければ此の機に乗し二艇は見出されず東方の海岸に沿ふて潛入するを得へしと思へり成る程其の處には強力の砲臺ありて敵兵之を守り注意して看守をなすと雖も此の處には不斷出入

する敵の小艇極めて多ければ行き逢ふ處の小艇にさへ見咎められざる以上は混雜に紛れ難なく之を通過するの望みありしなり
 時も違へず假作の攻撃始まりしが案外にも實戰に變ずるとはなれり其は吾か二等水雷艇の一艘か敵のコルベットに近寄りて其の保氏水雷を發射せる爲めにして該水雷は其の功を奏せざりしか吾か艇は痛く彼れの機砲の爲めに打立てられ大に苦戦したるなり是れより敵味方の諸艇の間は亂軍の有様となり吾は彼を引留め置かんと努め彼は又其のコルベットを防衛せんと努めたり
 此の時彼の二艇は海岸に沿ふて狐鼠々々と忍入りたるに何の障礙にも出會はず去れども尙ほ機關の聲の響かんとを恐れ極めて徐ろに進みたり砲臺の内方に這入りしまでは彼等は何の氣振も見へざりしか今や襲撃を試んと欲するの艦共は何處に居るやと搜索し始めぬ此の夜は暗黒にして咫尺も辨せぬ程にてありしなれども彼等は磁針盤、濱邊を洗ふ浪の花、時々隠見する砲臺杯を目的にして此處まで進み來れるなり自ら測量する所に依れば未だ砲臺の内方に入ると甚だ遠からず尙ほ霎時の間は進行せねばならぬならんと思へるとき忽然耳の端にて佛の番兵は鋭き音調にて「キイ、サイン」(誰れかの意)と叫ひたるにぞ不意のとて渠等は一時愕然とせしか直に吾に復へり聲は何れより來るそと其方を屹度眺めたるに此の時「キイ、サイン」の聲は繰り返へされ一點の燈光輝やきて右舷の方に一艦あるを示したり爰に故らに告げ置くへきは此の時彼のピンチスは保氏水雷の外に外裝水雷を備へ居たれば豪毅なる決心忽ちウヰリース

氏の胸中に浮み出てたり氏は元來甚た巧みに佛語を話し得たりしかば立どころに「ジャン、バルト」と答へて前進しつゝ竊かに其の左舷の水雷を操出したり氏は素より「キイ、ヴィア」に對し如何なる答をなさんこそ適當なるやは判斷も附かさりしか兎に角佛の旗艦の名の「ジャン、バルト」と答へ置かは好しや意味のなき語なるにもせよ彼等をして味方か敵かと打ち惑はしむるに相違なければ彼等か決斷をなす頃には已に該艦の側に達すへきを期したるなり

氏は豪膽にも斯く詰め寄せたる許りにては尙ほ満足せず敵艦は如何なる有様に碇泊し居るや判然せざりしかば嚴正なる調子を以て「燈火を出せ」と佛語にて言ひ掛けたるに艦内の人々は味方の一艇か何事か緊要なる用向ありて艦側に來らんとするものなりと思惟せしものと見え直に一燈火の現出してければ之に頼りてピンチスの者共は彼の舷門に想像的の味方を登らしめん爲めの設けにヤメンロープの懸り居るまでを認め得たり是に於てウヰルリス氏は全く該艦の位置を知るとを得たれば故らに右舷側に近寄らんとするまねして直にクオールの下に向て進み（極徐ろに進みつゝ）其處に達するや急に重艦に轉し左舷の水雷をして好く敵艦に觸着せしめ置きて之を發火し全速力にて後退せり（二十七圖を參看せよ）其の功能は立どころに見え大なる激動に感してピンチスは艦より軸に掛けて震蕩せられしが恐ろしき波浪は上方より仰ろし來りて敵艦に濺ぎ其の第二の最前區分は被覆なきをもて痛く水に浸たされぬ此の時該艦は宛も急に蘇生せるものゝ如く俄かに混雜、喧噪の物音起り三四の大砲は斯くも用意は整ひ居るぞと云

第廿七圖



水雷艇にて襲撃の圖

はぬ許りに無暗に打ち續け震時は混雜しあからも込め替へ々々々々發砲せり此の際ピンチスは稍、後方に卻きたりしか其の重艦の力の爲めに艇首は右舷に廻轉したり已に爲すへきとは充分に爲し遂けたれば氏は從容として我と人との活路を求むるなるへきに思ひきや此の勇膽なる少年は尙ほ未だ飽き足らずスマボート、クオールの適宜に離るゝまで後退し是れより故らに前方に進行し乍ら敵艦の右舷正横面に至んとする様に舵を操り既にして其舵をば取舵一杯に操り敵艦より遠さかり掛けたるか其艦が正く敵艦に向ひたる機みに百碼少し餘りの距離にて保氏水雷を發射したり二三秒間を経る程に第二回の爆發の聲ありて其の狙ひは過たさしを知り得たれば最早是れまでなりとて引退きたるか氏は益々落付き拂ひ夫の火勢を熾んにして全速力にて退走するか如きとをばなさゝるは烟突より火花を放散すると勿らしめんどの用意と知られたり斯くて當初、港に入來りし方向に徐々と進行し遂に港口ある暗黒の中に入りて見えすなれり去る程に前に入來りし如く首尾好く免れ出るを得べしと期せし望も仇となりしは氏が港口に向ひてより二三秒間も過ぎたらんと思はるゝ頃港内の諸艦及び各砲臺は盡く電氣燈を點して水面を照らし殊に砲

臺の電燈は兩側より各壹條の光線を港の入口一杯に横たへたれば實に此の上もなき障礙物なりしも最早此の期に至り詮方もなければ此の場を免れんとするには其の照らされたる處を突過するより外はなきとどはなりぬ此の間、前きに艇中に入りたる水は甚しく焚火の邪魔をなしたれば手にて酌出たし或はポンプを掛け杯する程に水量は直に減じて恰も燈光の輝き渡れる難所に近かつきし頃は殆んど之を竭くすに至りたれば火は幸にして熾んに燃へ出たしたり事爰に及んては只突進して過くるの一策あるのみ去ればウ井リース氏は全速力にて前進すへしと機關師に命じつゝ港口の中央目掛けて眞一文字に進行せり斯くするときは恐らくは港外にある敵の衛艇の内二三隻の鐵舷を突貫するともあるへしと雖ども尙ほ海岸に沿ひ行きて砲臺の爲めに打沈めらるゝに優れるのみならず一旦敵の衛艇の内に混し入るときは砲臺も味方を損せんとを恐れて發砲せざるへしと思惟したればなり

該艇か今しも光線内に來掛りたるときドーと一聲轟きたりと思ふ間もなく一榴彈飛來り其の背後にてパツと破裂し水を打ちたるに依り既に敵の爲めに認められたるを知り得たり燈光は固より晝をも欺く許りに明るきとなれば敵も必ず狙ひを定めて放ちたるに違ひはあるまじけれども其の背後に落ちたるに依て察するに吾か艇の速力をは計算中に入れさりしものと覺えたり去れば第二發目の彈丸も矢張り前と同様なりしなり然れども獨り彼の燈光は依然として消へも遣らす宛かも惡魔か人を取殺さんと睨み詰めたる眼光か杯の如く執念くも之に付き纏ひたれば今や氏は如何に一生懸命に働きても其の内を逃れ出んと願

る難し斯る處に後方より瀛艇の來る音して己等を追驅け來るものに違ひなければ是れぞ吾を追撃する敵の水雷艇なるへしと思ひ氏は斷然戰死と覺悟を極めたり乍去戦ひ得る丈けは戦はんものと復たも心を取直し擲爆薬を身近に引寄せ待掛けたる折りしも近寄り來れる彼の艇より「少し重舵」と微かに云ひたる聲の聞こへたり

保氏水雷自叙傳中卷終

水雷自叙傳上卷正誤

- 第拾三頁 十一行
- 全十四頁 七行
- 全十六頁 未行
- 全二十頁 四行
- 全二十三頁 十二行
- 全二十六頁 二行
- 全二十九頁 十四行
- 全三十頁 十三行
- 全 全 七行及
- 全三十七頁 四行

爾東ハ歯車
二十齒輪ハ二小齒輪
予のハ此の
ビットヘッドハスビットヘッド
戰爭操練ノ下(ニ)着手せん(ト)ノ六字ハ除ク
(己れが)ノ三字ハ除ク
艦隊ハ艦隊
世間に流布したるハ世間に内密ならざりし
ノ誤
汗を流してハ大汗になりてノ誤
水中ハ水平

明治二十四年五月廿二日印刷
明治二十四年五月廿五日出版

發行所
兼發行編輯人
印刷所

東京市京橋區築地四丁目一番地
水 交 社
鈴 木 光 長
秀 英 舍
東京市京橋區西紺
屋町廿六七番地

22
6
335
LIBRARY

保氏水雷自叙傳

下 卷



水交社記事第拾貳號附錄

水 交 社

保氏水雷自叙傳

保氏水雷自叙傳 下卷

第九回



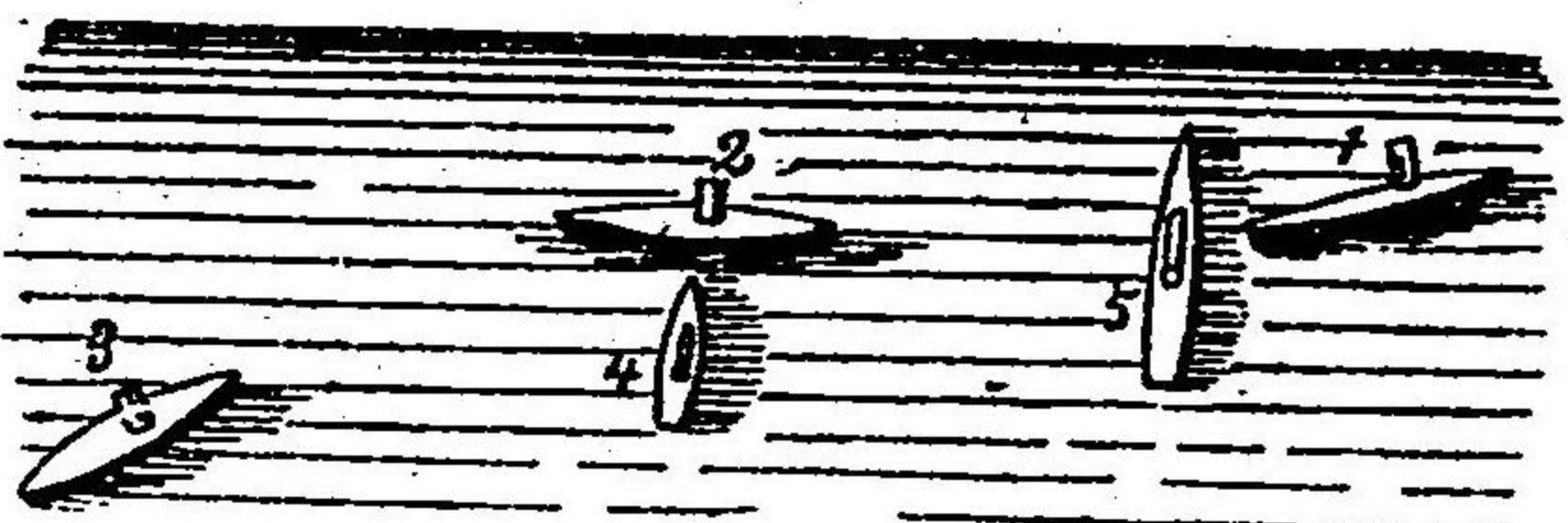
圖らざりき此れは之れ味方の水雷艇にして今までは混雜に紛れ打忘れ居りしものなると忽ち判然したり
しかは思はず「フーラ」と發聲か絶叫しつゝ直ちに氣先きを取直し只管此の難處を逃れんと互に懈怠な
かりけり去るにても彼の艇は如何にして此の處に現はれ來りしやを解説せんには予は始めに佛人か聲を掛
けたるときに立戻らざるへからず大尉グリフイス氏はピンチスが大膽にもコルベットを襲はんとて赴け
るを見るからに自分は豫て此の艦の近傍に泊しありと知れる尙ほ一艘の佛艦を襲ひ呉れんと考へたれば
磁針に便りて舵を操り其處にまを泊してあるへしと信したる方面に赴きぬ

然るに始の程は之を見出たすと能はざりしもウヰリリス氏が第一番の水雷を爆發せしめたるや否や諸艦
は舷燈を掲げ出したれば之に依て窺ひ見るに己れの少く内方に一艘の甲鐵艦碇泊して居たりしかは手快
く水雷の準備を整へ之に向て直進し凡そ百碼以内にてもあらんかと思へる處にて之を發射し發射の濟む
と同時に舵を取舵一杯に操り艇首を外方に轉したり

氏か實に不思議を感せしは命中疑ひはあるまじと思ひ定めて發射せし水雷か絶へて爆發の音沙汰なかり
し一事なりき去れば氏は再び艇首を振向けて他の水雷を以て又もや襲撃をなさんかと思ひたれども此の

時敵艦の有様は追々に穩かきらぬ氣色を増す程に免れんとするには猶豫して時を失ひ難きに至りたれば氏は火勢を熾んにせしめ道すからも彼のピンチスを探索しつゝ全速力にて駛り出せり是れ今ピンチスの背後に當り出て來りし所以にて間も亦く艇側に来り着き之と同行せんか爲めに其の速力を緩め相駢ひて進行せり斯くて進むと五分間許りにして行手の方に當りて二三の暗黒なる物見へたれば愈々衛艇の在る處に到達したりと知られたり機敏に富みたるウヰリリス氏は直に右舷の水雷桿を繰り出し水雷が水に浸るか浸らぬ程になし置きつゝ前面に一艇を見たれば之に向て直進したるに該艇は僅かに相隔たりてありしものなりしかは瞬く暇に水雷は之に觸着し神速に爆發したれども唯其桿のピール、テークルが堅固ならざりし爲め衝撞の力に耐へざりけん水雷は押返されて其の發火せしときはピンチスの艇首を去ると四呎には超へざりき加ふるに疾き速力もて佛艇の上の方より突き飛はしたれば立どあろに佛艇は沈没せしかピンチスの艇首も亦前には爆發の爲めに弱められ今又此の衝突に逢ひたれば遂に打壞らるゝに至りたり去れども幸ひなりしは此艇の構造たる不透水の隔壁にて造作せられ居たれば水は之に充滿する程にはあらずしか痛く難澁なる有様に陥り爲めに大に其の速力を減損せり又グリフィス氏は第二の敵艇の方に突進し之を衝撞せん

第 廿 八 圖



水雷艇
 1 2 3 ハ佛艇
 4 ハピンチス
 5 ハ水雷艇

らざりし爲め衝撞の力に耐へざりけん水雷は押返されて其の發火せしときはピンチスの艇首を去ると四呎には超へざりき加ふるに疾き速力もて佛艇の上の方より突き飛はしたれば立どあろに佛艇は沈没せしかピンチスの艇首も亦前には爆發の爲めに弱められ今又此の衝突に逢ひたれば遂に打壞らるゝに至りたり去れども幸ひなりしは此艇の構造たる不透水の隔壁にて造作せられ居たれば水は之に充滿する程にはあらずしか痛く難澁なる有様に陥り爲めに大に其の速力を減損せり又グリフィス氏は第二の敵艇の方に突進し之を衝撞せん

と突掛けたるに惜むべし二三呎も其の後部を過ぎて之を逸したり是れ敵艇か之を避けん爲め不意に全速力にて前進したるに依れるなり去れども之を突き誤りて過ぎたるべき彼の佛艇は右舷の方に當りて相遠かり去る處ありしかは氏は手快く擲爆薬を取上げ之を投げ付けたるに辛ふして敵艇の艦部を打ちたるのみなりしか僥倖にも其の舵柄を破壊するを得たり

是に於てグリフィス氏は其の左舷艇首の方に二十碼許りを隔て働らき兼ねたるピンチスを救助せんとて赴きたるか遂に之を曳船となし十二節許りの速力にて諸共に本艦指して行進せしに此の時前に見えたる敵の第三艘目の衛艇は左舷のクオトルに來り近づき其のホツチキス砲より發火を始めたなり元來ピンチスにも機砲を備へ居たるなれども彼の衝突の際其の車臺を壞損しぬ尤も該砲は正横より艦の方に向て轉するまど能はざるものなれば假令無難にてありたるにもせよ此の折には物の役には立たざりしものぞ知るへし去れば二等水雷艇のみ其の一尹ノルデン、フェルト砲を以て敵の發火に應じたり

彼我の發火は格別なる功を奏せざりし是れ海面靜穩ならざるか爲め命中をなすまど極めて六ヶ敷に依てなり唯味方の艇(殊にピンチス)は實に不利の地位に立てるものから其の要部の多分は敵の射面に當り居れり尤も防禦の手當も出來居らざりしにはあられも其の方法たる主として前面よりの攻撃を防ぐ様になり居りしかり只我かノルデン、フェルトよりの發火は彼のホツチキスに比すれば此の波濤高き海上に於ても功を奏すると多かりしそは我は目的の現出する毎に四彈を齊發したれども彼は毎發一彈を送

くるに過ぎされはかり又小銃の如きに至りては各艇より自由に打ち放ちたれども人々は注意して護衛の背部に匿れ居り銃丸は之を貫穿するに耐へされは左のみ功能はなかりしなるへし斯く戦ひて稍や十五分間にも涉れるか佛人は衆寡の勢を思ふてや肯て近傍には寄來らす只左舷のクオートルに當り五六十碼の距離を保持しつゝ其の發火を以て吾か機關の作用を廢失せしめんと努めたるか其の内心には疾く其の味方の來援に逢ふて我を擒獲せんと望みしなるへし斯る處に右舷のバウの方面より忽然二艘の水雷艇現れ出て吾か方に向て馳せ來れりウヰリス氏は早くもグリフィス氏に聲を掛け

吾か艇を解放し獨り足下の方を衛らるゝ方好からずや
と云へばグリフィス氏は
出來得る限りは何時迄も此儘にちし置かん乍去敵若し衝突せんとを努めなは其の時は相離るゝ方得策なるへし
と答へたり

此の時吾か水雷艇にては其ノルデン、フェルト砲を新來の敵艇の一に差向け該砲の「ケピテン」は憤激愈よ加りたる有様にて其の第一彈を發したるか「之を受けよ畜生奴」と叫ひたり
發砲するときに感したる激動の報酬としては近寄る艇の烟突に打中てたるか彼の砲の「ケピテン」か爲したる惡口の報酬は尙ほ一層満足にして直に「ボート、ホーイ」の一聲を聞へたり去れば吾か艇の人々は異

口同音に「アーラ」とこそは叫ひ出せり去程にグリフィス氏は肩而乍ち變したるを見て持合の纜を解き放ち舵を重舵に取り切りて己れは彼の佛艇に立向はんとせり
此の事たる別段思慮を盡したるにはあらず氏の考は唯其の敵に對向せんとせしにあり然るに佛人は直に機會の乘すへきを見て取り其の舵を微く重舵に操りて進來り左舷クオートルの艙部より八呎許の處に打當て艇首を深く突入れたり
斯くても尙ほ雙方共に其機關を停止するとおかりしかは兩艇は之か爲めに旋回し始め佛艇は漸々に艇尾を振廻し果ては兩艇殆んど相駢ぶに至りたれば却て彼の打壞りたる孔口には栓を嵌めたる如き姿になれり扱て英艇の者共は此の思ひも掛けぬ事の爲めに霎時は眩暈して倒れ臥したりしか其の内第一番に吾に復へりしは操舵手にて佛艇の錠鎖其のヘッド、シートに横はりあるを見て隙さす之を拾ひ取り近傍にありし己れか艇のトローイング、ポラードに捲付け終りグリフィス氏に打向ひて

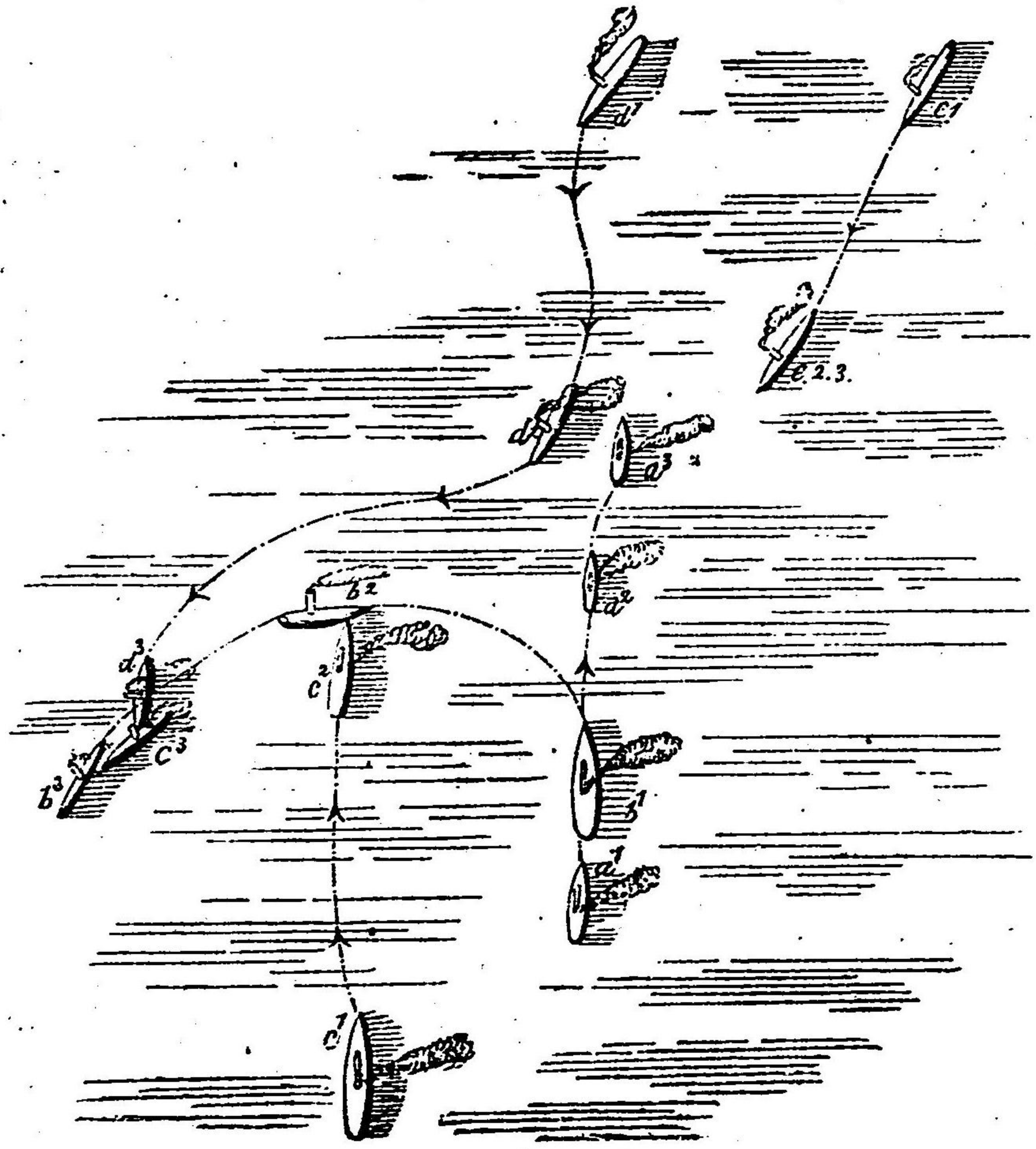
來り玉へ彼奴等は吾艇を衝撞したりいさ彼の艇を乗り取り申さんと云ひ乍ら佛艇に飛移りホッチキス砲に掛り居たる兩人目掛けて突進せり此の兩人も衝突の折打倒れたるか手快く起上り該砲を吾か艇に差向けんと努め居たりしものあり
グリフィス氏も速に事の意を了したれば之に續きて飛込みたる程に殘餘の乗組人員も後に隨ひたるか其の内には吾か艇の衝突せりと思ひ周章て機關室より駆け出したる機關士、關機工師及び火夫杯も混し居

れり是より亂闘始まりて勝負の程も未だ判然せざる内に新に仲間に加はるものあり即ち奮きに思ひ掛け
すに現はれ来りし味方の一艇にて初めピンチスのウヰリス氏か其の間近に到りしとき佛人か吾艇を衝
撞せしを言葉少なに語りたれば直に應援にとて來れるなるか忽ち佛艇の隙を伺ひ右舷の横側より之を
突きぬ楮此の結果は實に大出來にて恰も機關、汽罐の兩室を分てる仕切り板の處に打當てたれば破口は
兩室に跨りしかり去れば佛艇の上なる接戦も是に至て止みたるか佛人は其の艇の沈没せんとするを見て
遂に降参したりけり斯くて前にも云へる吾か水雷艇の操舵手は己か艇の尙ほ浮き居るを見て之に飛込み
グッフィス氏を振向きて

早く召されよ何事もあらざるに

と云ひ乍ら先きに捲付け置きたる佛艇の鏈を解放ちに掛りたりグッフィス氏も實にもと思ひたれば味方
の人員を喚び従へつゝ再ひ己か艇に飛乗りたるか直に機關士に令し機關の運轉を止めしめたり此の時佛
艇の機關は焚火、浸水の爲めに消滅したるに依り自然に停止せしものと知るへし
佛人の乗後れたる者も二英艇に飛込みたるか其の後ち二分許りを過ぎて佛艇は臙方を先きにして靜かに
沈み果てぬ只其の沈むや極めて徐々ありしかば夫の船か俄かに沈没するに當りて發作する旋渦を起すか
如きともなく誠に穩かに見えしなり斯くて吾か水雷艇を點檢するに後部より二番目に當る部分に水の充
滿せるを見出したるか是れとても艇の後方か少く餘分に沈み居たるの外別段變りたる様には見えざりき

第廿九圖



水雷艇の交戦

- a は スキーム、ピンチス
- b は グッフィスの艇
- c は 佛艇
- d e は 英艇
- 1 2 3 は 前中後の時々諸艇の位置を示す

是より諸艇は此上の難儀にも出會はず歸航せるかピンチスは再ひ新手の水雷艇の爲めに曳き行かれたり

第二十九圖は此の込入りたる戦争の後段を示すものあり

ツーン港の襲撃は右に述べたる如くなるか此の事を本國に報告するやウァリス氏は直様官一級を進められたり又グリフィス氏は其の勇毅ある氣象こそ實に稱するに餘りあるも惜むらくは其の措置に過誤ありとて此の度は昇進の恩命に漏れ唯褒辭を得たるに止りたり

グリフィス氏か發射せし水雷の命中せざりしとは讀者の記憶せらるゝ處ならんか氏は如何ある譯にて斯くも仕損せしやを知らず又其水雷を取扱ひたる者共も何事も間違ひたるとはなかりしと主張して證言したれば氏は只水雷に何にか不工合のと發作して命中を誤りしものと判斷するの外餘方あかりき

此事件ありてより二三日後ちのとなるか彼の水雷艇に乗組して赴きたりし兩名の水雷手予か掃除に掛りしとあり頻りに予か身を研き上げ又は磨き下げする間に彼の夜遭遇したると共を語り居たるを聞きしか

壹人の男 もしヒル公汝か左云へるに依り己れも前夜安全針は拔出しありしと好い加減に誓言立はせしものゝ己れは如何かと疑ひ居れり

ヒル 去ればさシャック汝の云ふ通り己れも今更彼の事を思へば抜けて居らざりしと考ふるか彼の時は聊かも氣付かさりしなり一跡此の車臺にては(予か這入り居たるものを輕打して)水雷を込めたる跡にて安全針を抜くとなるか彼の艇にありし新製のものにては込める前に抜取らねばあざりしを己れは全然之を忘れ居たり

壹人の男 併し今と成りては其の事に就て何にも云はざるか宜かるへし

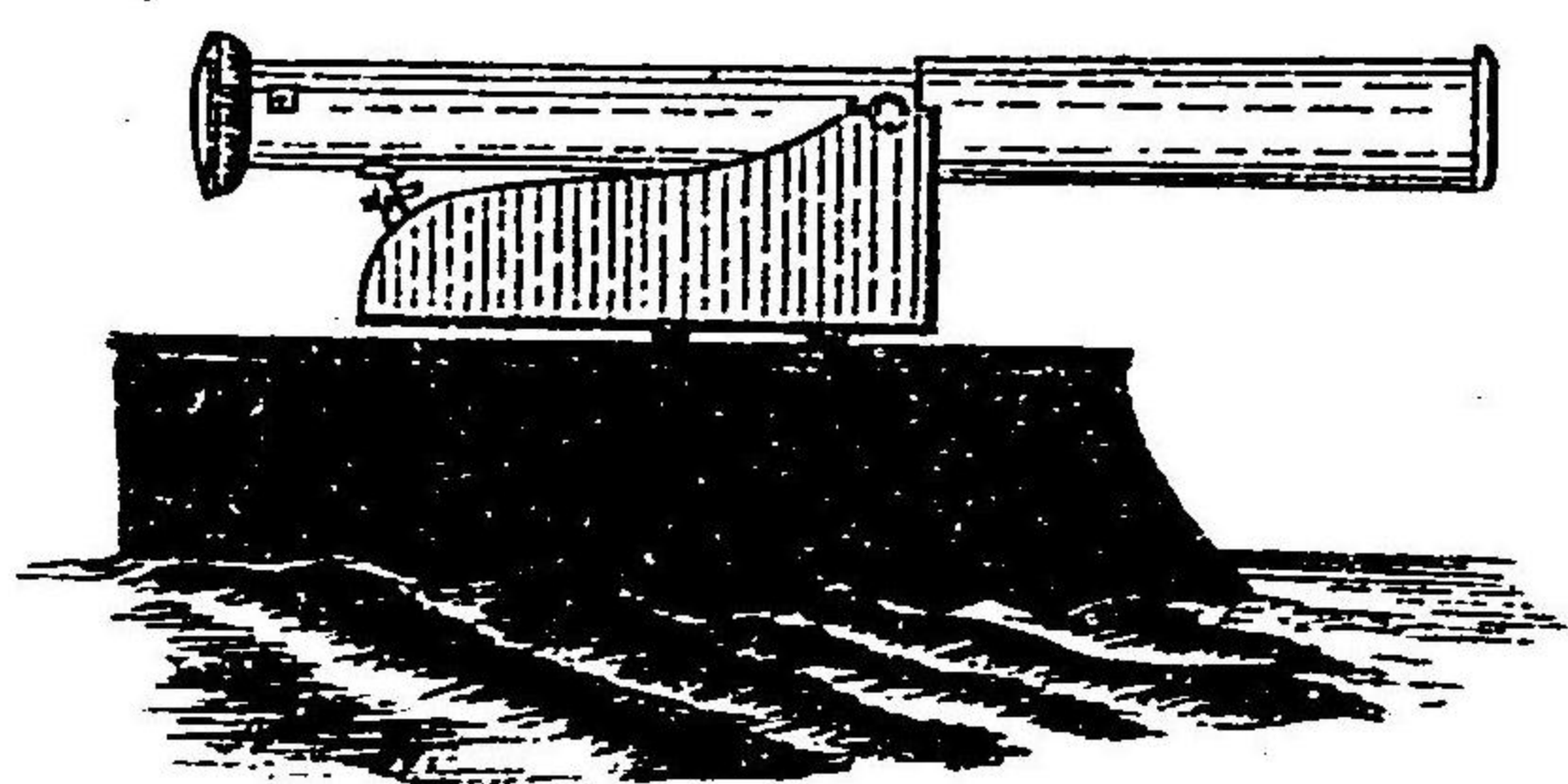
と云ひたるシャックと稱する男も其の行儀作方より言語の態に至るまでヒルに劣らぬ下臆なり

ヒル 實に然り今云ひしとて何の役に立つともあらず殊に此己れ杯は奇き目に遇ふへければ此語は是れ限りと思ひ呉れへし

と答へて此の兩人の者共は口を緘みたり蓋し此の者共は先日カピテン、マーカ例の如く彼の水雷の失敗の事に關し吟味を開きたる折痛く責め問はれたるか兩人共全軀に於て間違ひなかりしとを飽くまでも云ひ張りたれば別に詮方もあかりしなり扱て讀者をして如何にして此の過ちか起りしかと云ふとを了解せしめんには予は二等水雷艇に備付けられたる發射管は予か嘗て説明したる車臺に同じからざることを述へざるべからず抑も此の發射管は實軀の管にして至て簡姑なるものなるか水雷、一旦内送せられたる後は其の背部は氣密に嵌合する金屬製の戸にて之を閉鎖するあり此の管には推進管の設けあるとなく素と水雷は管の内面に密接し居るに依り凡そ每半方吋に二百磅乃至三百磅の壓力を有する空氣を背部に入れて之を押し出すなり此の故に一旦水雷を管内に込めたる以上は猥りに手を觸るゝともならず去れば鼻部の安全針は込めらるゝの際に抜取らるゝべきものにして彼の開口せる車臺の如く愈之を發射するときに至るまで差置くものにはあらざるなり此の装置を前に述べたる水雷の失錯を引起せしものと知るへし

此の事件ありてより三週日間も経過したるか佛の艦隊は出て來りて吾等と會戦すへしとも見えす去りて亦他の方法を以て其の處を去るへしとも見えざりき唯吾か偵知し得たる所に依れば彼の艦隊は港より

圖拾三第

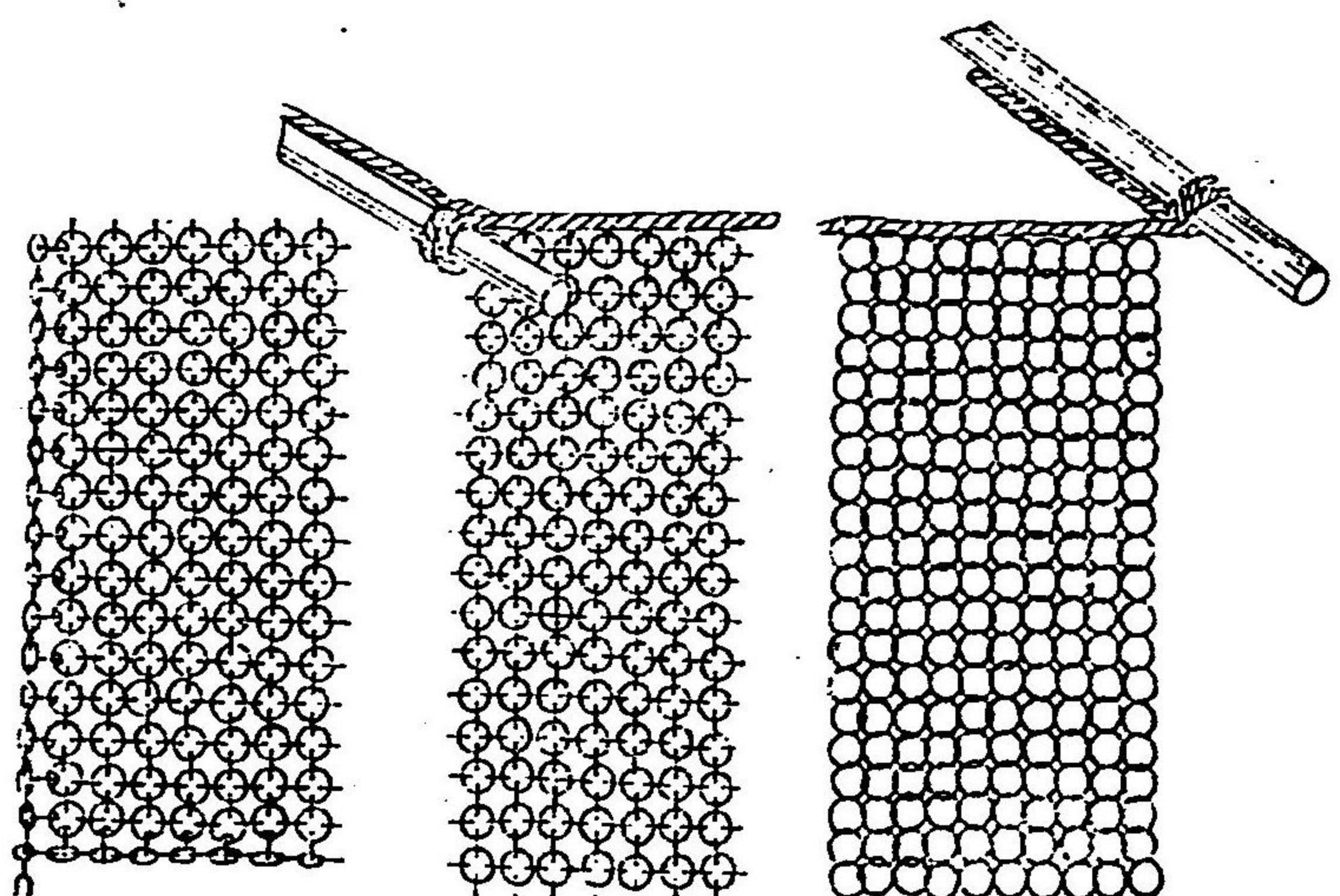


管射發用艇雷水等二

外方に出て行かんと欲するもの、如くかりしかども吾等か此の處に來りてより随分久しき間なるに絶へて其の動かさる所を以て之を推すときは強ち斯く思ひ居りし許りにあらざるやも未だ知るへからずそは兎に角に彼等は砲臺を前に控へ港の入口には水雷を布設し置き而して其の奥の方に閉ち籠り居たれば吾か方より容易に手出たしもならざりしを待みどせしなるへし乍去吾は八隻の艦隊を以て敵艦の十二隻許りを斯く身動きもならぬ如く壓へ付け居るもそ信に退屈なるとにはあれども徒勞のことは云ふ可らず去れば間も亦く一の變事起りしが斯は追々ど説き述へん前にも略々述べ置きたる如く覺ふれども吾か諸艦は夜に入れば不斷、水雷防禦用の鐵網を張廻し置きたるもにて此の網は半時の網製網にて製作せるグラメット(網類の寸法を云ふときは其の周圍を指すものあり)を小形なる網製の環を以て連續せるものあり尙ほ三十一圖乃至三十三圖を參看すへし

此の網の幅は何處も同様にして十五呎なれども其の長さは之を用ゆる箇處に依り不同にして四十呎より八十呎に至るあり扱之を使用せんには特に設備しある圓材若くは鉄製のブームにて之をば艦側を離るゝあと二十呎の處に垂下せしむるものなり乍去此のブームの設備法は艦々に依り同しからず又制規通りに此のスパークを備へ居らざる艦も多きふとなり(現に吾か艦隊の諸艦は一隻として之を持ち居るものなし)

圖一拾三第 圖二拾三第 圖三拾三第



水雷防禦網

去れば倉庫の内より豫備外裝水雷用の桿杯を取出して一時の間に合せどなすもあり彼の制規通りに造船處にて備付けらるゝものに在ては木製の張出し棒を有し居ることなるか此の張出し棒は時として鉄製なるもどあり予か量見にて最も良好のもの考へたるは先頃海軍省にて試験されたるもの、内線架形ガロインシヤットの角鉄にて製作せられ之を垂下せしむるときは艦側と垂直をなす如くに舷線に取附けられたるものありき索と此の網並に張出し棒の最良なるものに在ては僅の時間にて容易に其の位置に整頓せられざるへからず而して其の品質たる強堅にして其の重量は輕少あらんことを要することあるか予か今述へたるものは他の者に比して大に此の旨趣に適合するものなり右張出し棒は其の用なきときは艦側に傍ふて横はり居り其の角度は其端末に附着せる網を絞り上るときは恰も水面を離るゝ様になり居るなり又別に一の強力なる起重装置其の前端に附着し居りて艦側に近接するか如き位置に之を保持するものなり今之を用ひんとするに彼の装置を弛れば張出し棒は艦側に垂直線をなして其の處に下り絞りたる網を放

つときは網は擴がり張るなり是に於て他の網を取て艦の舳部と艦部とに垂下せしむるときは防禦は即ち完全なるなり前にも述へし如く吾等は此の張出し棒を有し居らざりしかばトツプ、ガラントマスト、ツブ、ブームの類を以て其の需めに應じたるか此の張出し棒をば中甲板砲門の少し上にて蝶番にて取附け置き不用のときには縦に引上げ置くこととせり初めの程は其の甚た重きか爲めに之を其の位置に致すと頗る容易ならざりしか何事に熟達するにも必要なる彼の實行なるもの、功德に依て果ては極めて手快く之を爲し得るとはなりぬ

既に前にも云へる如く吾等夜間碇泊せるときは此の網を張り廻し居たるか此の時までは別に其の効用を顯はしたるともなし是れ敵か決して吾等を襲撃するとなかりければあり予か今語り出さんとする夜は吾か諸艦は散列をなし居り衛艇等は例の如く吾等と陸地との間に在りたるか十二時頃にもありしか一隻の衛艇吾等の處に歸り來りて港内の佛艦に運動ありて該艦隊は海上に出掛けんとするもの、如く思はるゝとの旨を注進に及ひたれば直に「大至急にて蒸氣力を上げ司令官の處に集合せよ」との信號をなしたりけり是れ通常諸艦は一線になりて擴がり居り汽罐の火は埋火となし置きたるか故にして斯く諸艦を散布し置きたるは敵艇より水雷攻撃をなすの機會を避け減せんか爲めなりき若し然らずして一處に接近して集在せば敵の攻撃に利益を與ふるのみならず港を守衛するにも大に不利たるを免れざりしならん然れども司令官は戦争の時に際しては諸艦を合夥せしむるの要あるを考へたりと見え先づ諸艦を相合せ

しめ而して後ち之を二隊に分ちたり午前三時頃までは何事も起らずにありしか此の時敵の衛艇は引去り四五隻のホルベットと交代したり何れも水雷防禦用の網を備へ且つ盛に機砲にて兵装をまじ居たり此の夜は差して暗黒にもあらずしかば此等の艦は外に應援なきと明かに判りぬ又吾か衛艇等は敵の運動は果して何の意に出てしやを知るに苦しみしか敵のホルベットは吾か衛艇等に向ひ烈しく機砲を打掛けたれば衛艇等は此の中を潜りて引取る程にホルベットは霧地に吾か艦隊目掛けて進み來れり此の時吾か衛艇は其の前面に在りて引退き居たるか敵の彈丸を避けんか爲めに艦隊の横面ある物陰に這入りたれば彼のホルベットはずん／＼と近附きて吾か艦隊を去るまで千碼以内に至りたり

司令官も亦其の何の意なるを看破すると能はず僅かに四隻のホルベットを以て八隻の甲鐵艦より成れる艦隊に當らんと如何にも無謀の振舞なれば敵は果して何事を仕出すやらんと見物して居たるに彼等は八百碼の内に來り此の處にて少しく猶豫するの氣色見えぬ

云ふにも及ばぬと乍ら此の時我か諸艦は既に戦争の準備を整へ大砲は通常榴彈の着發信管を有せるものにて込められ居たり

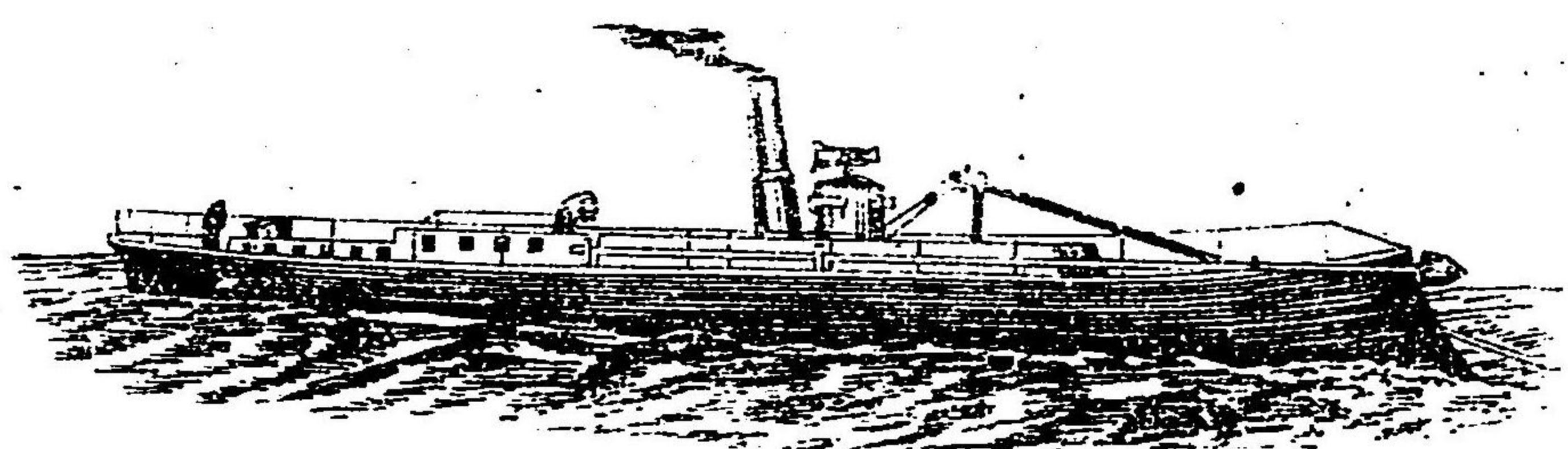
敵艦は八百碼少く以内の處まで追寄りたるとき其の方略を定めたりと見え一樣に重舵の方に四點程其の針路を變じたるか是れは之れ吾か左半隊の内一番端の一艦を攻撃せんと決心したるものと知られたり司令官サー、シヨルハムは此の時まで沈黙して見てありしか今や怒りにや禁へざりけん其の面をカヒアン、

タリーの方に振向け
 、其處許は是れまで斯程に鐵面皮ある奴原を見たとありしや如今彼等に一舷發火を陥はすへし
 と云ひ乍ら信號士官に打向ひ
 發火を始めべきの信號をさせ

第十回

靜夜の寂寞も倏ち百砲の轟響の爲めに破攪せられ今まで明亮に現はれ居りし物躰も濃厚なる硝煙に覆はれて見え分かず「打方止め」の號令は直に喇叭の吹奏にて下されしか臨戰紛擾の常として號令を下すの易きには似す其の行はれて違はざるは難かりき大砲に彈丸を込め發火用意の整ふに従ひ一番の砲員は目的の如何に拘らす無暗に打放ちたれば號令の出でたる後ち眞に打方の止まりたるは殆んど一分時をも過ぎし頃あり此の夜は風も亦く極めて穩かなる和きなりしかは發砲止みたる後も餘程の間は硝煙深く立籠め居たるか其の煙の未だ消滅し盡さる内に吾か艦の周邊に當て猛烈なる爆發の聲を聞くと四回其の一は吾か艦の近傍にて起りたれば同時に激動を感じて吾か艦は痛く震蕩せり是れなん佛の水雷艇コルベットか背後に跟随し來り煙の覆ひあるに乗して吾か艦隊の内に突進せるものにてありけるか扱も吾か司令官の胸中こそ如何なりしやらん予は此の時下方の中甲板に居り渠は上方のブープに在りしなれども予は宛

第三拾四圖



外裝水雷艇の備へたる水雷艇

然咫尺に居りて其の鑿鑿を伺見るの心地せしなり又彼のコンマンドル、カルセム氏は狂牛の如く吼りて中甲板に馳せ下り士官等か早く打方を止めしめさりしを責め罵りたるか其の意如何にと尋ねるに打方を止むると幾分か遅延したるか爲め大害を醸せしと云ふを示したるにてありしならん
 是れまては保氏水雷にて攻撃はされたるなれども幸に防禦網を張出し雷き其の庇陰に依て無難なりしか今度は一層手剛き敵手を現はれたりそは敵方の一等水雷艇一隻忽然八十碼以内の處に現はれ出て一の外裝水雷を出し構へ藪地に吾か艦指して突き來りしなり其時操り出しありしは一個の水雷ありしかども他のものも亦直にも出されん有様に見へたりしかばハンド氏は司令塔より第一に之を見出し其の眞正面に突き來るに驚き一躍してブリツチより下り再躍して中甲板に上り直に司令塔下の大砲に就き「高めよ上げよ」と差圖し居れり
 予は今此等の事柄に詳しく通し給はぬ讀者の爲めに一言せんか「打方止め」の號令下れば何時も大砲に再び彈込めをなし直にも發火の出來る様に押出し置くことなり其の規律既に此の如くなれば只今述べたる大砲とても無論

彈込めおしありたるものにして單に狙ひをさへ付けければ其れにて事足るなり去ればハンド氏は水雷網の頂邊まで手快く之を高め置き「宜し熱火用意」と令したるか此れより一瞬時の後ちに本艦の直傍にて凄まじき響して爆發の聲あり之に後れす彼の大砲を發火せしに又之に次て起りしは絶叫、怒罵する聲にして暫しは鳴も止まざりき

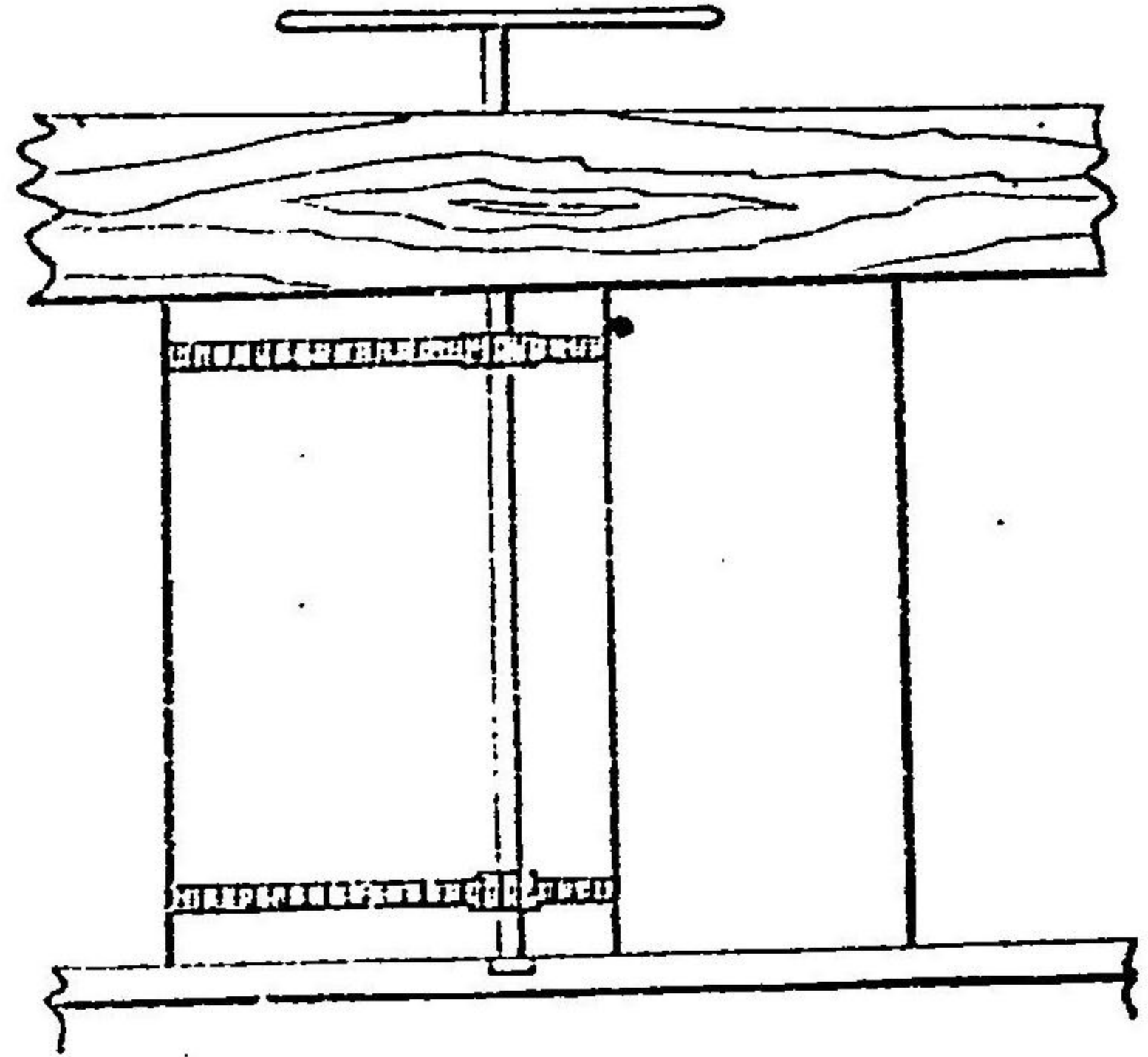
是れは之れ佛の水雷艇か其の來り着くや先づ網の處にて一箇の水雷を爆發して之を破り置き然る後ち第二の水雷を以て吾か艦を攻撃せんする手筈なりしをハンド氏は早くも斯くと見て取りたれば第一の水雷が爆發すると同時に發砲せしなり斯る近距離に於ける十尹彈(重量四百封)の効力は争でか神速に現はれさらん即ち砲彈は巧みに彼の船首に命中し幹材を打ち抜きて破裂し肋材をは粉微塵になして亂飛せしめ全然第二水雷の爆發をは禦き得たり爰に又他の分隊に屬せる一艦も同様なる手段を以て攻撃せられたれども之を攻撃したる敵艇は首尾好く其場を逃れ去りぬ尤も烈しく打ち立てられて辛き目見たるに相違はなければも遂に逃れ出て他の艇の爲めに曳き行かれたり諸其の水雷を以て襲はれたる味方の艦は辛ふして免れ得たる者なるか恰もクオートルの下邊に打中てられ二重底より微く船尾の方に偏したる處にて甲鐵板は云ふに及はず聊かの防禦もなき處なれば美事に一孔を穿たれたり抑も艦船海上に在るときは防水扉を閉鎖し置くへしとの命令は甚だ嚴重に執行さるゝまとなるに該艦の艦の方なる二船床の境に在る扉は即ち士官室の在る床と士官の寢室を有せる隣床との間に閉閉せるものなりしか此の扉は便利の爲めに

開放ち置きたる折おれは水雷が爆發して士官室内の一寢室の下部に當りて一孔を穿つや海水は見る々々士官室より其の下方の倉庫に及び又隣床より其の下方の貯蓄室等に注き入りたり此の所謂隣床の方には少尉補の衣箱を置き吊床をは其上の横梁に懸けて此の内に眠る様にあり居たるか物て少尉補等は甲板に出て大砲に就き居たれば此の時吊床は空虚になりてありしものと知るへし扱も彼の爆發の音乗組員が感じ覺へたる烈しき震蕩、及び艦側は内方に壞れ込み其最大なる直径は三呎にも餘りたるざざ々なる孔より每一時間に十五哩の速力にて海水の浸入せると等(孔は水面以下十呎にあり)は悉く混雜を増すの源因とあり人々は如何なる事件か起りしやを知らんとて徒らに噪き立ちて馳廻れり

乍去一分時許にして「鎮マン」の喇叭鳴りて人々を屹とおらしめたるや「後部のものは諸卿筒に就けよ、残りのものは各々其の受持部に至るへし」との號令言短かに下り次て「掛れ」の令と與に「コー」の譜を吹奏したれば人々は直に勢込めて各受持部に馳行きぬ此の時防水扉は閉ちられつゝありしか寧ろ之を閉ちんとおせる處ありしと云ふも可なりしなり爰に聊か防水扉のとを解説すへし抑も此扉は戸口の上下に設けある溝中を滑走するものにして此の溝の形は稍々凹形にして尖れり是れ戸の其處にあるとき充分に水密ならしめんか爲めなり又扉は段階齒と小齒輪の仕掛にて上甲板より開閉せらるゝものあり去れば此の扉を閉ちんとするにも殊更に下に降り行くには及はさるとなり而して此の扉を開閉するに用るの手柄は常に小齒輪の手近に懸け置くものとす此の折も之か閉鎖に取掛るに猶豫はなかりしなれども扉は半分程閉

ちたる後は如何にしても動かす何にか開き居る間隙に挟まりたるものに相逢なければ今は速に其の理由

中甲板 下甲板



第三十五圖

を見出すと肝要になれり水は既に衣箱の中央に達し尙ほ恐ろしき速力にて戸口を過ぎて突き流れ居りぬ早く其の原因を見出さねば叶はぬとあれば一人の大尉は二三の人を従へつ尋常の燈火は先に激動の爲めに盡く消滅したれば舷燈を携へ直に飛下りたり斯くて吊床の下を潜り行きて之を見るに士官室用の幾個の椅子をば其間に立込み居たるを見出せり是れ彼の椅子は水に浮ひ其處に押流され來りたるに扉の閉るに會ふて挟まりたるものと知られぬ去れども再び扉を開き之を取除くの外詮方もなければ手柄を捲戻し扉を開かんとするに椅子は愈々引出し難く却て確

と挟まる許りなり去る程に事益々危急に迫りたる云ふへきは此兩區隔に海水充滿せる曉には本艦か果して能く浮ひ居るへきや否や實に覺束なき次第にて諸卿筒は蒸氣手動に論なく盡く働らき居たるなれども急に格別の成果も見えず之れを防ぐの手段は頗る迅速を要すれば此の如き間緩るきとにては中々に叶はざりしなり是に於て又多人數身には繩を結着け士官室の明窓より降り行きたるか今度は稍々暫くの間にて辛くも椅子をば盡く引出し去り扉をば全く閉鎖するを得たり是れとても決して手快くなし得た

るにはあらず貯蓄室は既に水一杯に成り居りて若し十分間も遅れたらば二箇の區隔は水にて充滿するに餘りありしなり

事態概ね斯の如くあれば敵の水雷艇か無難に引取りたるも敢て異むに足らざるなり

防水扉より起るへき不慮の災害は極めて多きとなるか是れ亦其の内の一例として見るへし吾か軍艦か衝突に出會する度毎に大抵は防水扉開き居りて爲めに切角の不漏水の隔壁を無効ならしめ防水扉の設けなきものに異ちらざるなり是れ通例は只苟且の便利のみを計畫するか故に此の便利は却て仇となり斯くも思ひ設けぬ危害を與ふるに至れるものなり

予は餘談に實か入りて大に予か本領の事を怠りたり扱も吾か艦隊は煙中に在て敵の水雷艇の爲めに襲撃せられ其の結果は前に述べたるか如くなりしか追々煙の霧れ散するに依て見てあれば敵の「コルベット」共は港の西口差して馳せ去る處にて逃れ去りたる水雷艇等も其の跡邊に隨ひたれば吾か諸艇は之を追躡して幾んど動かれぬ様になり果てたる其の一艘を取獲たり茲に至て全く敵の損せしものは二艘の水雷艇にして其の外多少の死傷ありしなるへし又味方にありては二艘の水雷艇は敵の「コルベット」より打出したる「ホッチキス砲」の爲めに痛く撃毀たれ尙ほ吾か一艦は一個の大孔を穿たれ船渠に入らずしては叶はざるに至れり畢竟するに利を失ひたるもの吾にして其の影響する處當に之のみに止まらざりしなり

翌朝天明を待ち例の如く馳せ向て敵の形况を窺ふにあらはそも如何に港内には昨夜攻撃に來りたる五艘の

コルベットのみに碇泊し居り籠中の鳥は逸しぬ佛の艦隊は脱しぬ斯くも充分に出し抜かれたるを覺りて人々か齒嚙みを爲すの有様は讀者宜しく推察せらるへし乍去敵の運動の方略と云ひ其の舉動と云ひ一點の批の打ち處を感せぬものはあかりけり動もすれば口癖の如く一英人にて三佛人に當るへしと云ひ其の筋の人々も此の語を以て自ら許すものゝ如く見えけるか此の驕慢心こそ大砲に艦船に彼れに後れを取るの基ひをなすものなれば局に當るの英人は須らく其の活眼を見開き其の諸官能を鋭敏になすへきあり否らされは先きに述べたる場合の如く三人の敵手に一人にては中々に手剛はかるへし却説此の役に於て保氏水雷の爲めに損害を被むりしとはなかりしか予か探知せし處に依れば當時敵より發射せられしもの都合七個にて其の内四個は網に掛りて爆發し其餘のものは輪環の内（コラネット）に其の鼻端を突込み機關か停止するまで其の處に粘附し居り既に機關の停止するに及びても初め其のグラメット（コラネット）に突入るや頗る固ければ勿論癩は之れを沈没せしむる様に調整し置かれたるに拘らず自身の重量のみにては落ち沈むに充分ならざりしなり蓋し予か同族の者か此の失錯を來たせしは全く網の設けありしか爲めにして彼の網を用ゆるの工夫は吾等を近寄せざるには充分に有効あるものとす去り乍ら海上の交戦に於て勝敗の決は専ら艦の速力及び其の取扱ひの難易如何に存するか故に勿論不斷此等の網を張り出し置くと能はざるあり若し此の重大なる網を張廻し艦の進退に不自由らしめんか是れ自ら好んで敵の衝角（クハツ）に供するの犠牲となるものなり去れば此の網を張廻し置くは拙策たるを免れす其の全装置の取扱ひ要きのみならず前にも述べ

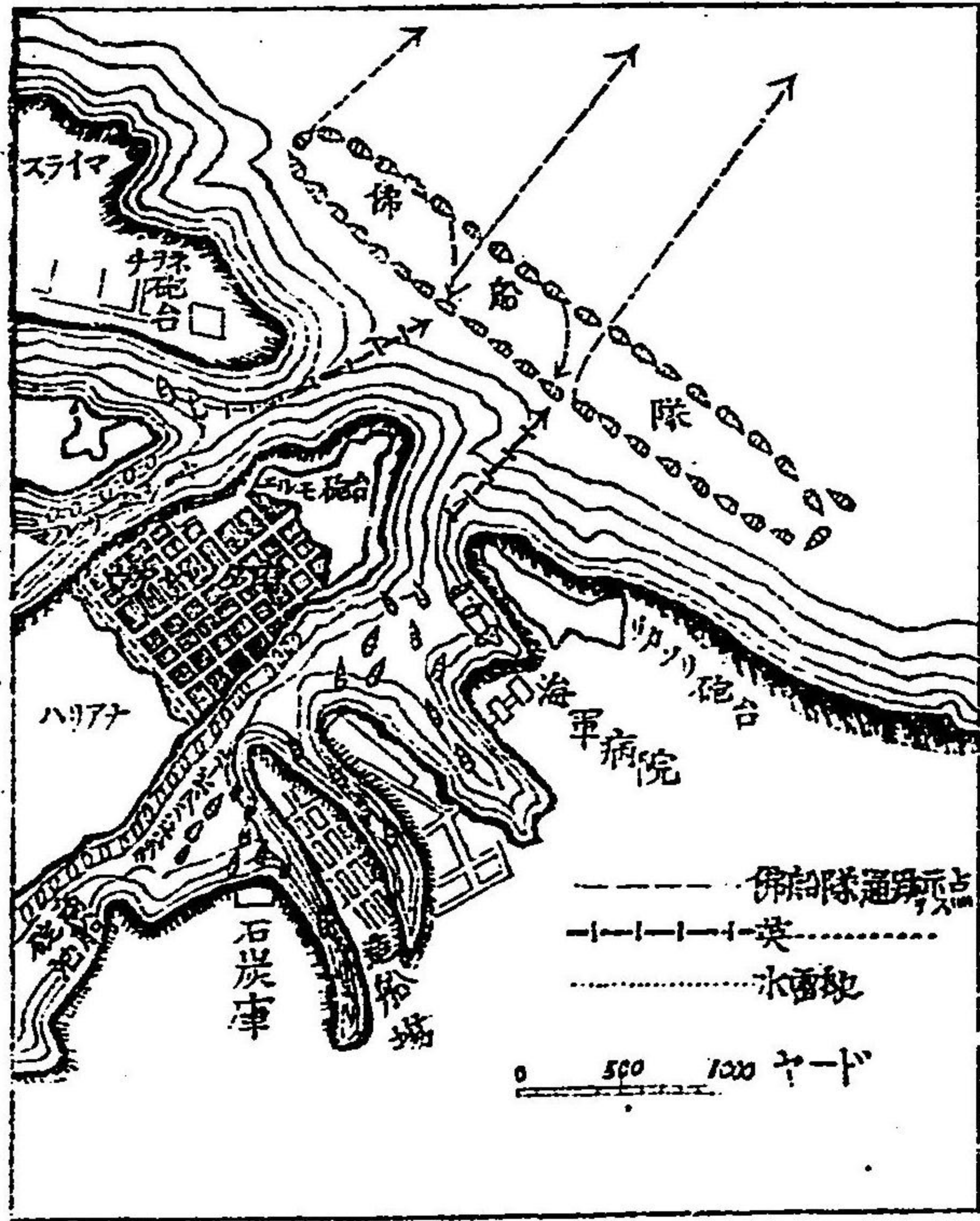
たる如く速力を主とする艦船の運用に就て云ふときは實際之を沮廢せしに異あらざるなり然れども只今度の戦争に於けるか如き場合には保氏水雷に對して實に効能ありしなれども若し今日に至て之を用ゐんとならは其の輕量あるへきは云ふに及ばず取扱ひも大に容易かるへきを疑はざるあり試に見よ彼の懷中時計の最初に製造せられしものは極めて粗笨のものありしか今日は僅かに一志金貨の大きにて精巧なるものあるに至れり事物の進歩は何に寄らず渾へて是れに異ならされは以て吾か水雷防禦法を類推するに足るへきなり抑も機砲の一度世に出てしより水雷を用るの攻撃者は危険の度を増すと實に甚しく十中の九は避け難きものと觀念せずには叶はぬとなれば水雷に取ては一大厄難を生したりと云ふ可し乍去彼の機砲とても必ず確かに効驗あるへきものとは云ひ難し何となれば元來水雷を以て襲撃を爲すは通例夜間に於てするものなるにぞ此等の夜襲に於ては機砲と其の他の大砲とを論せず概ね利益の少きを免れす即ち敵を認め難きと一なり敵を認めたるるとき其の距離を判別し難きと二なり此の二項の故障を首尾好く免れたりとするも精密に狙ひを付くるとは到底爲し得へからざると其の三ありとす

行は保氏水雷を沮み止むへき障礙物の自動装置にして實効あるものを製出せざるへからず又外裝水雷の襲撃に應せんには其の艇を抑留する方法を設け大砲より神速なる發火を加へ得れば足れりとす苟も斯の如くあるときは水雷攻撃成功の度をば最少限に減するを得へきとにて既に見られたるか如く彼の網は稍、此の需めに應へたるものなるが之を用るに當りて又新弊害の伴ふを免れす即ち前にも述べたる如

く幾分か艦船運動の力を防碍する事は是れなり
 敵已に去れり何時までか此の空港を封鎖するの要である只此の上施すべき手段は敵は果して何處に行きしやを探究するにあり顧ふにマルタ若くはシブラルタルは渠の爲めに脅かされしやも測られされども兎に角此處を逃れたる艦隊の一部分は必定當時亞非利加の海岸に在りたる殘餘のものど相合せんとを努め然る後に右二ヶ處の内を侵さんと計れるものゝ如く察せらるゝなり然るに吾か司令官はシブラルタルは憂ふるに足らずと爲せり其意如何にと尋ねるに敵等は何程奮發するも兵糧攻めにするに非らざるよりは彼處を奪取するを得ざるへし何となれば斯くする間には吾か艦隊は彼處に赴き援ふことを得べければなり又マルタ島に至りても其の堡壘こそシブラルタルのものに比すれば稍々取り易しと雖も大跡に於ては亦シブラルタルと同様に論すべきものなり乍去何れの方にもあれ吾か艦隊が存在せん限りは充分に攻撃を試みん杯とは聞くも笑止のこともなり成程彼は其の共和政府の財政か許す處より其の艦數は大に吾に優り居るものなるに違ひなければも此の差異とても吾か艦隊の目前に在て右二ヶ處の何れにもせよ之を攻撃する程の力はあらざるものなりとは是れ司令官の意見ありしが元來ツローン港より逃れ出たる彼の艦隊の一部分も遙かに吾には優り居りしものなれば其の吾に向て攻撃を試さざりしは實に解すべからざるありとすハンド氏の如きは敵の策の此に出つべきを確く信したるものにして彼のマルタ若くはシブラルタルの事の如きは敢て意に介するに足らずとなせり其は兎に角に何事をか仕出すに違ひあし

敵は吾を出し抜て東方に向へるものなり敵にして若し吾を反撃するの策に出てさらしめは殘餘の艦隊と合跡を計らんと必定なりと推しければ是に於て吾か艦隊は出て南東の方に向て進めり行くも好き程に列をは開き張て成る可く敵を見出さんと構へ尙ほ吾か艦隊には二艘の巡洋艦付屬し居たれば之には不斷其の近傍を搜索せしめたり斯くてツローン港を出てより第四日目にマルタ島に到着せり此處にて聞く處に依れば吾か艦隊の殘餘のものも亦本島を差して出發せりと云へり是れアルシール港に閉込め看守し居たる佛の艦隊はツローン港にて脱出したるものと大畧同様なる方法にて逃れ去りたるに由れるなり

第三十六圖



吾か諸艦がグラランド、ハーボルに碇泊するかせぬかに他の諸艦も亦到着せり吾か組の諸艦は其數十隻にしてグラランド、ハーボルなる錨場を全部を占領したれば後より來りし諸艦は已むを得ず思ひ思ひに這入り得へき處に入りて泊したり去れば或るものはヒグハイ灣に設けある三方繫きに泊し又或るものは該灣内に碇泊せり此の外にスライマ河口若くはマルサ、ムシット灣に廻り行きて泊せるもありぬ後より來りしは報知艦を合して其數二十

四隻なりしかは之れに吾か諸艦を加ふるときは惣數三十四隻となり其の他商船の泊せるもの殊に此折は通常よりも頗る多數なりき右の圖に就て見らるれば諸艦が随分に密接して碇泊し居りしを知らるへし
コンマンダー、インテリ
 總司令官の艦が投錨するや否や他の將官達は（吾か艦隊に二人地中海艦隊に四人）常例の如く伺候の爲めに赴けり其の時軍略の評定ありたるか歸する處は極めて手快く石炭を積入れ明日出航すへしと云ふにあり

此の時四隻の報知艦は何時敵が襲ひ來るも測られずとて派出せられしか是れ或は無益に似たる計らひなりしなり何となれば元來マルタ島の東端とコシカ島の（西方の一小島）西端には傳話器の線掛りありて其の長サ四十哩許の連絡は通し居たればなり讀者は知られせんかヴァレンツァ府は本島の東端より稍々五哩の處にあるなり

此の時石炭は大急ぎにて積込まれたるが抑もマルタ島は世界中にても殊に良好なる石炭貯蓄場の一なりとの名著しき處にて通常一時間に八百噸の石炭を積込むを得へし乍去今度の如き大艦隊一時に積込む時に於ては了得に手に餘りたるものと見へ諸艦の内の幾分は随分緩慢なるものもありぬ此の故に艦船付屬の小蒸氣船を卸して之を助け水兵共も一心になりて働きたれども其の日の暮れ方に及び積込み方は平均半分程にも抄取らす翌朝まで掛りても全く濟むへしとも見えざりき唯我が英艦隊は他の諸艦が還入り來る前に石炭船等を用意し置きたれば其の夜の十時頃には既に全く積み終りたれども吾か艦隊の前面

には他の艦隊が舳艫を接して碇泊し居たれば宛も港口を封鎖されしものに異ならざりしあり

第十一回

其の日の日没の頃パレス信號臺より四隻のホルベット見ゆとの信號あり（是れ斥候として派遣せしものなり）

艦々にては石炭積込み方も障りなく抄取り居り既に積込終りたる艦の士官達は一二時間の上陸をさへ許され杯して物事何れも樂けにおそ見えにけり然るに夜の十二時に至り火箭東の方に見え續て二三發の砲聲あり豫ての暗號のとなればホルベットよりの消息を聞かせんとて急ぎ信號手をパレス信號臺に馳せ上せたるに時を移さず極東方に在りたるホルベットより「敵艦近く見ゆ」との信號ありたれば直に取次て司令長官に移報せり此の信號ありてより未だ間もあらざるに彼のホルベットは馳せ歸りて佛艦東方より來り已に其の背後にありて近き旨を注進に及びたり

諸砲臺は豫て敵の攻撃に備へてありたるか是に於て砲手をは大砲に就かしめ敵の艦隊愈々近く來りたるどき之れに應ずるの準備をせり又諸艦の蒸氣は火を埋火になし居りしか此の時大急ぎにて蒸氣を上げ「戦争の用意をせよ」との信號ありたり

諸艦は尙ほ未だ蒸氣出來す今度は如何なる信號あるやらんと待設けたる折柄極東方の砲臺より發砲する

聲を聞きたるか暫くして猛烈なる一舷發火の之に應ずるを聞き得たり是れより彼我互に砲聲の間斷なかりしか遂に彈丸は吾か碇泊諸艦の頭上に飛來るに至りたり扱も斯く許り可笑しき光景とては又と再びあるへきやと思ひたるは三十四隻の英艦は欄内の羊の如く鼻を揃へてマルタ島の港内に籠城し外面には佛の大艦隊砲臺を距ると八百碼に過ぎざる處を單縱陣を形作りて進行しつゝ砲臺の前を過ぐる毎に電氣一舷打方を爲し居たる事共なりき

此の時分は圖にもある如く港内を防禦するの砲臺とても今の如く其の數多からず兵裝も差して強大のものにはあらして其の大なるものとは只シント、エルモ砲臺に若干門の百噸砲リカンリ及びチオチに若干門の三十八噸砲を備へ居りしのみ其餘は大概舊式の十尹滑膛砲を改造せしものに八尹の前裝砲を取雜じへたるが儘か二門の十尹前裝砲はリカンリにありしかと記憶せり又港内の砲臺に備へたるものは六十四斤砲并に七尹前裝砲にして是れとても重に港の内面を防禦すへき様に計畫され居たるものなれば此の折杯には其の用をなす極めて少なかりしあり

吾かフヒヤノト艦はグラランド、ハーホルの奥の方にありて吾と敵との間には六艘計りの艦船あれば外に出るともならず去りて敵の發火に應ずるともならず其の心中の苦しさは讀者宜く推量せらるへし予はツローン港に於て敵の艦隊に出し抜かれたりしときも司令官の噂に就ては好き加減に惡評を耳にしたるか此の度は其の十層倍とも思ふ許りにて彼の老司令官か其の白頭上に荷ひし侮慢も亦非常なりしなり

其の言を聞くに「吾等をは畏に掛りたる鼠の如く斯く抑留し置き只絶叫するより他事なからしむるは何事そや彼の老痴漢宜く天誅を加ふへし」と乍去此の直言をなす人々も現に之を目撃するに至るまでは此の事の起るへきを夢寐にたに想はざりし處なるへし嗚呼事起るに及んで其の危険を知るとは甚だ容易なれども將來己れか頭上に墮落すへき災禍をは豫め洞察するとの何そ是れ難きや

佛の先導艦は砲臺の前面を通過して遙か先きまで行き過きたるとき順次に六點に針路を變へよとの信號をなし今しも攻撃をせしつゝある諸艦の外方を馳戻り先きに後陣にありし艦の航跡を再び進行せるあり斯くて甲去れば乙來り衝に當るの諸砲臺并に其の内方の吾か艦船に不斷砲火を加へたり港口の方に最も近く碇泊せる二三隻の味方の艦等は一舷發火を以て敵の發火に答へしか其の餘のものに至りては例の如く手を束ねて傍觀しつゝ時々敵彈の爲めに其處此處に打中てらるゝのみありし尤も敵艦と相隔たると遠ければ格別ある損害をは蒙らざりしなれども其の車臺を破壊せられたる大砲も少なからず或は帆樫付屬の諸道具を打落されたるのみか人にも死傷杯ありければ心は矢猛にはやれども去りて此の發火に應じ得るものは二三艦の外にはなし讀者或は問ひ玉はん此の時司令官は何事をなし居りしやと顧ふに司令官とても終夜此處に泊し居り佛人か諸砲臺を塊土に變し吾か艦隊を粉碎にするまで恣に舉動はしめんとするものにもあらざりしなるへし

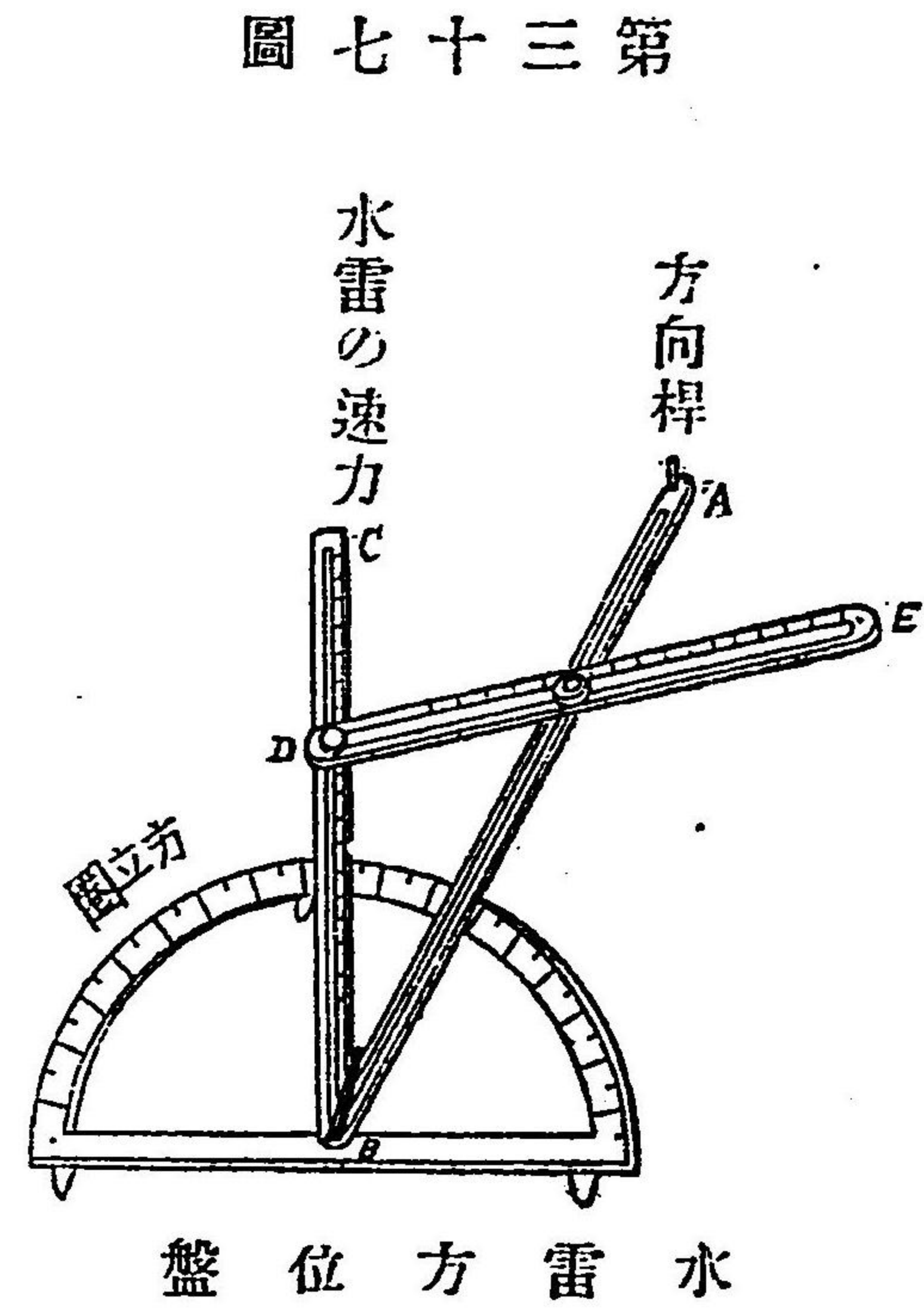
果して然り司令官は其の艦隊を率ひ出て會戦せざるへからざることを決心せり然れども今我か諸艦の位置

として隊陣を整へて一齊に打て出んとはとて望むへからさるとなり去りて斯くせされは各艦皆思ひ思ひに出戦して隊陣なき一騎打ちとなり遂には規律もなき亂軍と變するの恐れあり到底何れにしても味方は大不利益の地位に立つものなれば其の成功の容易ならざるは司令官か兼て期したる處なりき元來敵艦の數は吾に比すれば甚だ多きにそ一騎打ちの如きは渠に利益を與ふるのみならず真先きに出たる吾か諸艦は大敵を一手に受けて戦はさるへからす斯く一方には事落ちもなく慮り又一方には此の位地に立つとを致せしを自ら責め遂に如何なる方法にても出て戦はさるへからさる以上は自ら之か先導とならんと決心しぬ乍去蒸氣力なくては我慢にも動くとも叶はされは爲めに少なくも二十分間は待ち居らさるへからす諸も間の悪るときには何事も思ふか儘に運はぬものにて蒸氣の出來方の最も遅かりしものは最も前の方に在りし艦にてありし然れども堪忍は美德あり今や此の徳を守るの必要なるに至りたり其の上好しや數艦か早く出るとあるも是れ策の得たるものにはあらず味方の寡は敵の衆の爲めに取込まれ遂に徹塵になりて終らんのみ

此の間司令官も徒には過ぎます十二隻許のマルタ船を集め此の方零の大意を諸艦に傳へしめぬ乍去其の號令は頗る簡短なるものにして只拔錨の信號あらは諸艦は其の錨を揚げ其の初め碇泊せしときの順序を以て司令官に隨ひて出港し機會あらは敵に接すへしと云ふにありたり
扱て予か艦の談話に立返らんにハンド氏は佛艦隊の見えたることを聞や否や水雷に空氣を裝填し彼の二等

水雷艇は石炭積方の爲已に卸され居りたれば直に之に積載せたり而して發砲の始まりしや否や成敗を天に任せ敵の艦隊に向て之を試み見んと欲し其の許可を願出しに此の度も司令官は不承知なりしか彼の勇士は其の熱心と懇望とを以て遂に司令官を同意せしめ水雷艇に打乗りて出行きぬ只奇妙とも稱すへきは氏か豫め方零を計畫し置かさるとにて兎に角にグラント、ハーボルの左岸に沿ふて懸崖の下を進みたり既にシント、エルモの岬角に達すれば通過する所の艦隊見えけるか彼等は運動に碍けなからんか爲に態と例の網をは張廻さす艦隊諸艦の數を盡して一線に船首も振らす通過せり氏は此の有様を一見して又と得難き好機會なりと獨り心にうなつきぬ必定是よりは氏か手馴れの得物にて目覺しき働らきのあるとなるへきも烏玉の闇の暗さは斷間なき砲火の閃光に照明かされ此砲火に伴ふの硝煙か僅かに模糊の夜色を復するのみにて別に隠れ忍ふへき小楮とても絶てあるとなし折しも軟風は北東の方より吹き來りて佛艦隊の砲煙をは砲臺の頂より港の上方に掛けて吹きなひけ敵方には正しく利益を與へたり此の時ハンド氏は左程に危険ならざる處より其の水雷を發射するも大零成功の望はありしなり何となれば敵は僅かに八百碼の外にありて往つ戻りつ斷えず循環して居たれば好しや氏をして無暗に發射せしむるも却て敵の方より來りて之に中りもしつへき勢なればなり乍去氏は決して萬一の僥倖を望むものにはあらず敵の艦隊よりの砲彈は更さらかり味方の砲臺よりの流れ弾そにても亦何時打たれんも計られざるは覺悟の上となれば益々敵の方に向て進み行き其頭上を掠め去る彈丸に運命を任かせんと決心をこそおしにけり予は此の度

ハンド氏に従ひ水雷艇にて出掛けしとを已に讀者に報したるや否や定かからざれば元に戻りて話し置かんに予は中甲板に在て能く整頓し居り且つ出し入れ共に便利なる場處にありやかて空氣の裝填も終り急き艇中に積込まれ遂に出陣の途に上りたれば此度こそは眞の保氏水雷たるの行爲に耻ぢざる最期に逢はんぞ自ら心を勵ましたり抑も保氏水雷を發射するに當り水中に行動する目的に向て濫りに打出したりとて何の役にも立つものにあらず是れ水雷か初め發出の點より目的の處まで行着する時間に目的も亦行動して既に其の處にあらざればなり此の故に狙ひを付けるときに當り水雷の速力と目的の速力とを計算中に加ふるにて之か爲めに彼の水雷方位盤と稱する器械を用ゆるあり其の大意は左の如し(二十七圖を見よ)A Bは一の桿にしてA Bの處に二照星ありB Cは節にて劃度を有するものにしてBの處にて樞軸を以て附着せらるゝなり又D Eも節にて劃度を有するものなるかDの處にて速力桿(B C)にEの處にて方向桿に



にて住められ劃度半圓は速力桿並に方位桿の位置を護持するものなり

之を使用するの法を解説せん此の折にハンド氏か敵艦の速力を八節と豫算し水雷の速力を二十節と定

め調整せし方法より了解せらるゝを以て便なりとす元來水雷は艇首より眞直に打出さるべきものにして水雷の頭は敵の進行せる方向には垂直をちして直に敵の方に向ひ居るあり水雷速力桿は常に水雷の進行する方向と並行して置かるべきものなるか先づ艇首に眞直になる様に住定され敵艦速力桿D Eは右の桿と直角をなしてDを以て二十節の刻目に住定され而して方位桿A Bは八節の處に住定せらるゝなり是に於て二照星A Bを見通し發射せんと欲する艦船か之と一線になりしとき水雷を發射するなり斯くすれば水雷はB Cの方向に進み敵艦はD Eに並行して進來り同形三角の道理にて相出會するものあり去る程に敵を距る三百碼以内に来りたればハンド氏は此處に艇を止め照星敵艦と相合するを俟て左舷の水雷を放ちたるか此の發射と前後も別らぬ位に敵のホツチキス彈は雨霰の如く吾か艇の周邊に落來りて正しく敵の爲めに見出されたることを知得たり乍去今更に氣附きたりとして如何でか水雷を免るゝとを得べき三十秒も過ぎたる頃爆發の聲響き渡りて彼の水雷の効ありしとを報したり去れども其の果して如何になりたるやを見究るの違どもなくハンド氏は又他の水雷を發射せんと用意しつゝあり是れ即ち餘の者ならず深く讀者の愛顧を蒙れる予れにてありしなり敵艦か相互に有せる間隔は一鏈の距離ありしかば此の次の艦か照星と相合する迄には尙ほ十五秒間許を待たざるへからさるとなるに此の間コソ如何に永く覺えしとよ予か奮激したる心にては秒時も分時の心地せられて愈々出戦ふの時期は最早や來らぬと歎と思ひ疑ふ程ありし予か行て撃たんとする次の艦は吾か艇か其の前列に進める一艦に向て水雷を發射し

今又已れにも之を發射せんと用意し居ることを早くも覺りたりと見え其の機砲より彈丸の雨は凄まじき勢にて注ぎ來れり
 愈々十五秒を過ぎぬ「打て」の令と共に予は宛も風の爲めに吹飛ばされ而して後ち水中に投捨てられたるかの如く覺えたりしか此の時予は既に滅亡の場所に向へつゝ水中の途に辿り行きぬ
 予は最早や敵を去ること左程遠くはわらしと思起し之と衝突するに間もあるまじと覺悟を極めたりしとき予か右手の頭部の方に當り水中より聳へ上がりて恰も大なる峻崖かなんどの如きものを模糊の裏に望見せり予は「南無三寶失敗せり」と獨語をそはちしたれ宛も死罪を宥められたるか如きの感情は予か心中に動めきぬ

乍去予か今陳述したる感情は寧ろ大早計たるを免れさり予か敵艦の衝角を横に看て過ぎたる次の瞬間に予は螺旋に於て烈しき撞撃を被りたれば全く外れ居りしにはわらさうしことを曉り得たり

此の爲めに予か機關は直に停止せり是れ予か兩螺旋は互に反對方向に旋回するものなるに前方の一個は撞撃の爲めに屈曲せるに由り兩個は相互ひに噛合ふ如くなりたれば遂に機關を止めたるものなり是れより二三分の後ち予は水面に浮ひ出て戦場の有様を熟覽するの便を得たり元來吾か行くべき距離は一杯に調整され沈没機も予か駛行し終りたるべき沈没せしむる様に加減され居たれども何を云ふにも螺旋軸は回轉すると能はず距離車は働くと能はず爲めに喫は舊位に復せず沈没機も其の作動をなすと能はずりき

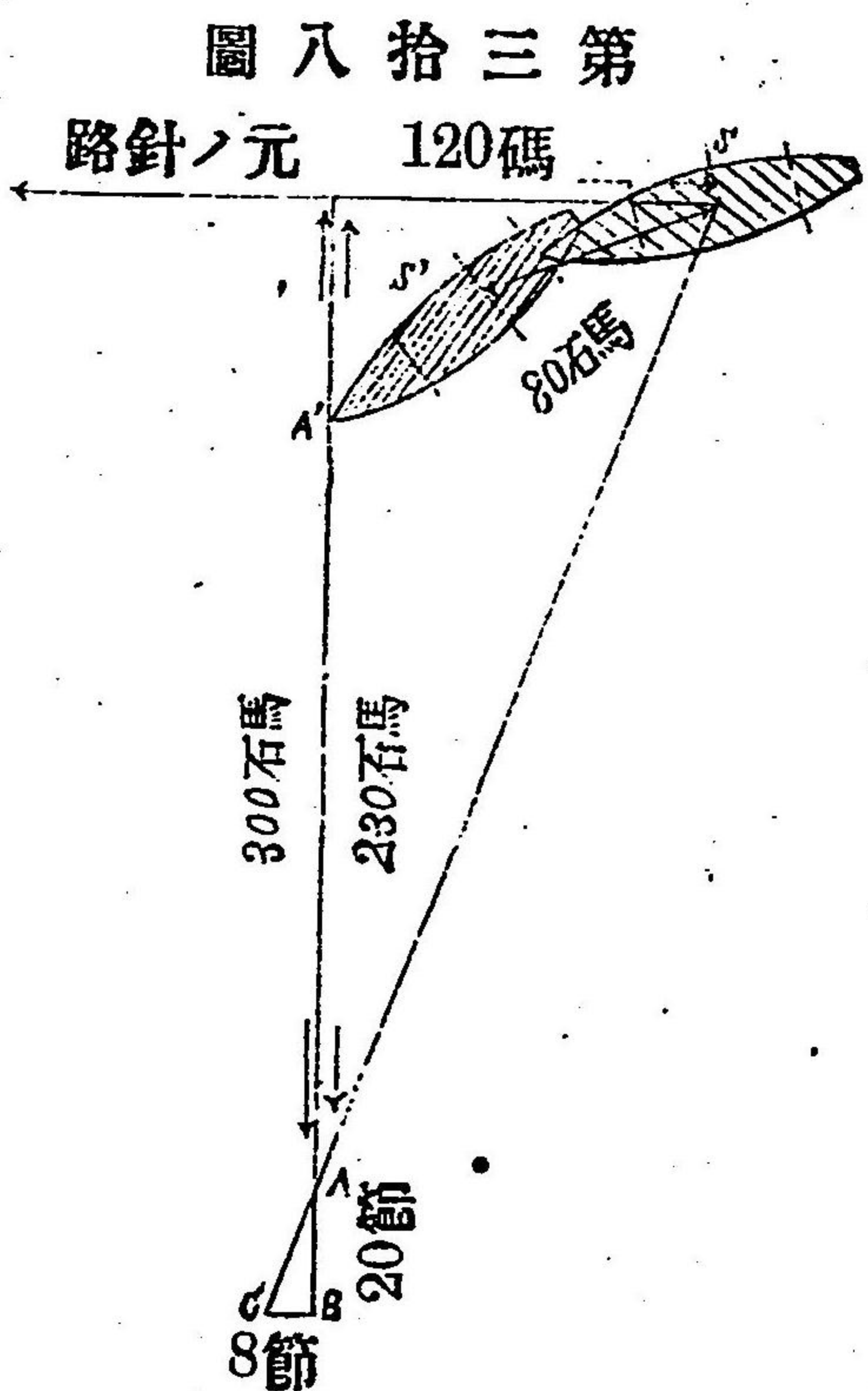
是れ予か水面に浮出てし所以あり

予は戦争の景況に説入る前に予か彼の艦を打ち損せし譯柄を解説すへし扱も彼の艦は其の直く前に進みたる一艦(其の前面に接近せし一艦のと)既に水雷を打掛けられ又他の水雷も已れを撃たん爲めに用意整ひ居れることを知りたれば直に其の舵を重舵一杯に取切り(斯く取舵に轉して吾か水雷艇の方に向へるなり)置きて全速力にて後退を掛けたり然るに舵は速に

利きたれども機關の回轉の方向を急に變改するは容易に行はれさりし故に予か發射されしとき該艦は實際吾か方に轉向しつゝあり而して其の機關は恰も後退し始め居りしなり左の圖は(二十八圖)尺度に當て、書き示すものなり

ABCは艇内に在る方位盤を示すSは水雷發射の時敵艦の位置を示すものにして照星は其のメイン、マスト

と相合せしなり其の後ちメイン、マストはSよりS'に移り過ぎ其の間に予はAに達したり即ち予は僅かに其の衝角を摩して通り過ぎ爰に至りて遭難せるなり該艦にして若し従前の速力にて進行せしならば其のメイン、マストと予とは同時にAに到り着きし筈なり



今又話頭を水雷艇の方に轉すれば、ハンド氏は予を發射するや否や直ちに引返し數ヶ處に彈丸を打中てられ乍らも無難に歸着せるか恰も本艦が出航せんとする間際なりし扱も予が水中に在りたる處よりは只戰爭の初頭に起りたる事共の一斑を窺ひ知り得たるに過ぎされは予は細々數其の情況を説くことを吝さるへし其の後の事は歴史家の之を記述せしもの少なからず且つ吾が水雷の事に關し別段裨益を與ふべき程のともなければ予は之に説入るとなかるへし只一言すべきは予は後日該戰爭に關し人々の談話を聞きたると屢となりしか皆な多少違ひ居らざるはなかりき乍併是れ決して異むに足らず成程誰人にも其の直近傍にて起りしと丈は間違ひなく談し得へしと雖も諸人の云ふ處を聞き辻褄の合ふ様に點綴せんとは幾んど爲し得へからざるとおればあり

其の戰爭の初頭に起りし事共は即ち左の如し

吾が艦隊の司令官は眞先きに進んで出來り諸艦は其の背後に引續き先きに碇泊したる順序を亂さず従ひたり司令官がピクハイ港を出發せる頃ほマルサ、ムシートに碇泊せる諸艦の内の先導艦も其の背後に同處の艦々を引率して出來れり

此の時に當り佛艦の整々たる編制は少しも擾亂するとなかりしか吾が先導艦出來り直に敵の隊線の中央目掛けて進きたるとき其の衝に當るの一艦は舵を取舵にちし北東指して沖の方へ向へ是より以東にありし艦々も盡く之に倣ひたり又是れより以西のものは以前の如く前進してありしか吾が諸艦の別隊マル

サ、ムシート港より出來りたれば之に出會せるものより以東の諸艦は前の如く北東に向て進去り是より以西の諸艦も亦た此の例に倣ひたり茲に於て敵は別れて三隊となり其の間に味方の二隊ありて各々其の先導艦に跟随して外方に向て進みたり去れば司令官は案外にも其の艦隊を二隊となして引率せると知りし其の次にありし敵艦は又吾が艦を衝撞せんと企て殆んど成就せんとせしを第二番目に進みし味方の一艦馳來りて遂に之を突き止めたり

ハンド氏が最初に發射せる水雷の爲めに撃れたる彼の艦は是れより少く隔りたる處に水入りて左も難儀なる有様にて浮ひ居れり是れ水雷が蒸氣室の底を打壞り爲めに焚火を滅し盡せしのみか併せて機關室の兩區隔をも海水もて充滿せしめたるに由れり去れば此の處には前述の五艦相纏れて一團塊をなせり之は中心となし兩方の艦々相接近すれば輒ち與みし易すけるものを選びて互に衝撞したれば其の團塊は愈々大形になりたりき扱も佛の他の二隊は局面意想の外に變したるを見て困却すると大方ならず素より豫め變に應ずるの手段はなしありしに違ひあかるべきも此の如きは聊も思ひ寄せられれば別段に備へてはなかりしものと見へたり噫世の兵法家中此の攻撃法及び編制法を可として講論せるものありや否な決してなかるべきなり

佛の司令官は其の艦隊の稍々中央にありけるか其の機敏に富める必ずや此の場合に適應せる運動法を工

夫せしなるへきも如何せん信號を傳ふると極めて難く(煙杯の爲めに)遂に何事の仕出されたるとも奇し勢既に此の如くなれば眞直に馳せ行くものあり又は引返して亂軍の中に陥り棄て置かば衆寡敵し難く遂には敗れんとする味方を救はんとて行くもあり云ふ迄もなきと乍ら僅かの間に紛雜は愈々烈しくなり忽ち戦争は古代のもの、如く一騎打ちの集跡とあるは變じたり

世の兵法家は海陸軍協會を初めとし其の餘の處にても敵艦に乗入ると杯は往時の談にして今日に行はるへきものに非ずとして其の意見を演述せり其の言を聞くに「扱て今日に在ては彼我左程に接近するとは決してあるまじきとなり是れ畢竟するに接近すると能はざるなり試みに見られよ水雷あり機砲あり其外何々の備へもわれは接近せんとを企てんとするも到底出来難きとなり成程往時一舷砲の彈丸を足下等の衣兜内に藏め得へかりし時代に在ては斯る事も頗る適法なりしに相違なければも當時に在ては對抗法は一に彼の衝角、大砲、水雷等の使用如何に由るとにて決して彼の廢死せる短銃、船刀、乗入れ用の鎗杯には關せざるなり」と云へり

噫是れ一場の理論なりしか第一等に位せる兩個の艦隊は蒸氣力、甲鐵板を採用したる以來始めて出會して諸事物を較へたり夫れ軍艦は方さに世界中の最強海軍を以て自ら鳴る處の二國の撰なり之を率るの士官は兵法に精通し諸攻撃法の是非得失を論議するの人々なり然るに今日の事は果て如何なりしそや予は淡泊に鐵槌と鐵鉗と云ふを以て足れりとすへし成程水雷は發射され、機砲は其の凄まじき働きをな

し、種々の巧妙なる對抗法をば獨立にて實施したる艦船も少からざりしに相違なし乍去其の大方略に至ては敵味方の艦隊共に之を實施したるとは絶へてなく好し之れありとするも必定大砲の煙と共に空氣中に融解し了りしなるへし

予は此の上には戦争の有様を解説すると能はず只一言すへきは戦争は之れより翌日の正午頃までも引續きて果ては兩艦隊共彈藥は缺乏し元氣は耗盡し遂には各々其の分捕物を護して相引きに退き去れり吾か艦隊にて分捕し物は直に之を港内に取納れ次で艦隊は不足せる彈藥の供給を受けぬ

第十二回

此の時まで砲臺の大砲は敵味方入混りてありたれば時々紛れ離れたる敵艦ある毎に之に向ひ發砲する位にてありしか今や彼我の艦隊相分離したれば再び砲撃を始めたなり乍去敵は早くも彈丸の達する外に退きたれば是れとても極めて僅かの間ありし予は爰に該戦争にて互に損失する處を云ふもの盡く不同にして孰れも適從すへきを知らざるとを述ふへし一英新聞の云ふ處に依れば吾か失へる艦數は十艘にして敵の失へるは三十艘なりと云ひ又或るものは吾は十五艘敵は二十艘なりと記せり然るに佛の新聞紙の云ふ處は其の數全く異にして却て自國の勝利なりと主張せり

奇なる哉予は兼て諸新聞紙は誤謬を傳へぬ者の様に聞き込み居たるか(英新聞を指す)吾か新聞紙等の記

する處も其の數同しからず又佛の新聞紙の如きに至ては其の記する處全く相異れり乍去是れ予か敢て關すへき處にはあらざるあり扱も予か聞得たる處に由れば吾か艦隊の内にて打殘されたる諸艦は夫々若干の彈藥を積込み其の夜再び戦んとて出行きたりしか敵は已に去りて在らす何處までか之を追躡して其の棄去りたる廢艦五艘を得て歸りたるか敵は遂にツローンにまで引退きぬ兎に角に勝利は味方のものに疑ひなかるへきも若し我艦隊がマルタ島至近の地位にありて需品の供給を受けしにあらざれば其の局面の如何に變せしや豫め測り難しとす却説吾かフィヤノート號は敵を搜索に出掛しもの、内にはあらざりし蓋し該艦は戰爭中痛く打傷けられ利さへ戰爭の初頭に於て敵の一水雷は其の最も前部の區隔にて爆裂し又其の少しく後に至り該艦は佛の甲鐵艦を衝撞したれば其の船首の缺け残りたるものは極めて少く宛も彼のテームス河の浚泥船の船首に髣髴たりき

カピテン、ターは戰の始めに重傷を被り本艦の歸港せるとき直に病院に入りたり又コマンドル、カルセムと先任大尉とは共に戰没したれば戰爭の半は過ぎたる頃はハンド氏之に代り彼の司令官に隸屬し指揮を司りて戦ひたり又司令官は輕傷たも負はず始終無難に過ぎたりき

扱是れよりは復た聊か吾か身上の事に説入るへし讀者は定めて彼の時予か螺旋は敵艦の衝角に衝き當り爲めに失敗して水面に浮出て徒らに戰爭を見物するものとなれるを記憶せらるゝなるへし時に軟風北東の方より穩かに吹き居りしに予か止まりし處は海岸を離るゝと僅かに八百碼に過ぎざりしかは其の朝の

八時頃に予はリカソッ砲臺前の岩礁の上に乗揚げたり予は尙ほ一應進へ置くへきか予か螺旋は突然嚙合ふに至りし者おれは勿論空氣は機關に這入り居るも只螺旋が組合ひたる爲めに動くことを得ざるものにてピストルは引縮み安全楔は拔出てたる儘萬端戰爭の用意にてありしなり去れば予は岩角か予か鼻又は髻杯に當りて予を爆發せしめはせぬかと雲時か程も安き心はなく此の間の心配は實に名狀すへきにもあらず予をして若し頭髮を有するものならしめは屹度盡く雪白に變せしならんと思はるゝあり乍去例に違はず予か運の好かりし予か躰は尾部を陸地の方に向けたる儘遂ひに二岩の間に挟まり留まりぬ斯くする内に頓かて風も止みたれば次の朝まで安穩に留まり居りしに午前六時の頃ありけんリカソッに駐在せる兵士の内兩人のもの海水浴をなさんとて來りたるか其の一人は早くも予を見出したり此の男は予か何者なるやを見定めんとて傍に來り予を玩弄し杯しければ渠は誤りて予か鼻又は髻を壓着しはせぬかと予は膽を寒すと一方おらす然るに幸ひなるとには尾端を握り持ちたるのみにて稍や暫く吟味を遂けたる後ち其の同伴のものに向ひ

ロバーツ來り見よ予は未だ此様な物を見たとなし鐵にて出來居る魚の如く見ゆ必定佛蘭西の奴原のものあるへし

と云へは其の同伴のものは直に駈け來り一目して予か何者なるを悟り知れり元來此の男は陸軍工兵の曹長にして水雷工事の爲めに派遣せられたる分隊に付屬し當時は然るへき士官に隸して本島の防禦水雷の

事に預れるものなれば保氏水雷の教授をそ受けたるとはなけれども一二度之を見たとありて直に予か何者なるを認め得しなり又豫て其の危険なる性質を有するを聞き居たりと見え慌て、連の男を引き退け粗雑なる蘇國方言スコットランドの句調を混へ

此方へ來れ其れは破裂するものなれば左様なことをしてはあらずいさ軍艦に往て之を見出せるを報告せん

と云ひ乍ら兩人か去りしより一時間少し餘も過ぎたる頃人の近づき來る聲音してハンド氏の聲はしき聲音は又嬉しくも予か耳朶に上りたれば予は先づ安堵の思をさしぬ蓋しフィヤノート艦フィヤノートに碇泊し居り且つは旗艦のともあれは彼の曹長は該艦に予を見出せる旨を報告せしなり此の時ハンド氏は一人にて艦長、副長、砲術長、水雷長の諸役を兼帯し居りたるを以て取る物も取りあへず上陸し來たりしに予か身軀には何處にも番號を打ち付けありたれば氏は直に予なることを認め且つは一目して其故障の起りし次第をも知りたりき

吁汝てありしか汝は實に稀代なる奴あり汝は如何にしても失亡するとおければ此の後ち共に演習用のものになし置かんと思ふなり

と獨言しつゝ氏は安全襖を挿込み撞子クラッシュを螺ち戻し空氣弁を閉けたれば予は爰に始めて安全なるものとなりぬ

氏は彼の曹長に向ひ

僅か三十分許り此處に番をなし居呉れよ直に短艇を以て引取りに越させん是れは骨折代として足下に贈るなり

と云ふ程に鏘然として貨幣の響きを聞かへたり

斯くて氏は歸り去りしか是より一時間の後には予は再び住慣れし故艦に戻りて頭部は跡より取放され跡は例の如く水雷室に納め置かれたり

此の度はカピテン、ターか予のところに就て吟味を開くともなければ何となく物足らぬ心地せりハンド氏は予か螺旋の成れる果てを見且つは敵艦の運動のと杯考へ合せて如何にして斯の如きとの起れるを察知するに難からざりしか能々検査を遂けたるに予か受けたる損害とても只螺旋軸の屈曲せると螺旋の多少損せしみに止まり此等の損處は造船處に於て容易に修理するを得たれば予は早くも中甲板の舊位置に還るを得たり

此の時吾か艦はマルタ島に残り留り此の島の造船處にて出來る丈けの修覆を加へ居れり又ハンド氏は直に少佐相當の官に昇進せるか其の辭令書はツローン港攻撃の時の日附けになり居れり尙ほ制規の勤務期限(二ヶ年)を経て大佐たるの資格を備ふるに於ては直に之に補せらるへしとの内論あり予を初めとし日頃氏か入魂なる同僚士官の知る處に於ても是れまで斯く昇進の潔き人は絶てなかりき是れより氏はフィ

ヤノト號の副長とありカピテン、ターも間もなく病院に出て艦内萬事舊態に復したり予は最早ヤノトマンデル、カルセムの大音を聞くを得ぬものから其の戦没を痛く哀悼して措かず成程氏は兼てより聞きしに違はず平時に在ては大砲、水雷の事業を厭ひ嫌ふの失ありしなれども一旦實戦に際しては常に其の不都合なからんとを希ひて止まざりしなり

此の後ち間もなく平和の條約調ひ吾等も本國に喚ひ還され乗組を解かれたれば予は又造船處内の倉庫の舊寓へ歸るととなりぬ

一日予か驚喜に禁へざりしはハンド氏か庫内に入り來りし時に在り氏は極めて予を愛するものなれば入來るや否や直に予か在所を示されんとを乞ひ相變らず例の優しき仕方にて予の背を撫しつゝ

おゝ其後は機嫌好くてありつるか

と云ひて庫内に居りたるメロルに向ひ予を指して

若し彼奴か言語をなし得るものならば定めて足下に快活なる談話をあすへし此の次予か艦の出帆するときは渠を送りて賜はれよ渠は予か運を開くべきものと存するなり

と此の一場の談話は予をして一考を起さしめ稍く暫く此の件に熟慮を費したる揚句に吾か水雷の事に關し予か談し得へき丈けの事柄を世に公示するは予か信切上に於て爲すべき義務なりと決心せるものから予は庫内にある間に今しも讀者の前に提出し來れる予か遭遇事件の物語を書綴りしなり嗚呼予か談已

に終れり予は此の後も亦幾多の奇事珍談を経歴すへきなれども果して予は無事にありて此の續編を草するに堪ゆるや否や覺束なし去れば予か宿説の如く之を樂むの傍らに多少裨益を得る處ありと思はざる、方々は此の保氏水雷自叙傳に好批評を下されんとを予か切に希望する處なり

結 章

予か物語を終るに臨み格段に注意を喚起すへき點に就き茲に二三の鄙見を附加するに於ては此冊子を尙ほ一層有益あるものと爲すを得へしと考へ予か胸中に浮起れり

予か殊に特別な注意を乞はんと企圖せる一點は惣して水雷事業に於ては如何に瑣細なる事柄と雖も眞の注意を加ふると極めて必要なりと云ふにあり若し水雷保管の職に當る諸士官等かカピテン、ターの行為に倣ひ聊かにも過誤のあらんとき此れ果して何の故に斯くあるやと一々探究の勞を取て懈らすんは是れまで陳へ來りし失錯の多分は起らんとするも得へからざりしからん予は認知す予か族類を完全に取扱ふとの容易ならざるを而して又若干の限界までは予輩の故障に關し誰人も其咎めを受けざるべきを然れども故障の内にも種類ありて其の教授習練充分なるに於ては容易に避け得らるべき者も亦尠からざるあり抑も吾輩の状態良好ある時の取扱法を教練したるのみにては未だ以て完全ありとは云ふへからず去れば苟も異常の事起らんか(其の起るの多きは争ふへからざる事實なり)其都度之を探て講習の資料に供し之に兼て極めて輕微なる不注意も大事を惹起すの原因となるべきを教へ知らしむべきなり

然るに當今には之に反し教授上若くは演習執行の際何にか故障の起りたるときも其誤過は唯水雷掛の士官若くは准士官等の間のみにあそ明白にはなれ現に之を扱ひたる兵員等は何事も預り聞くを得ざるも此々皆な是より予かサイプレスに於て沈没せしときを以て例とせんに初めイース氏か何事か予に不工合の箇條ありしを見たるとき暫らく引續き發射するを見合せ置き鳥渡予を艦内に取入れ丁寧調査を施せしからは彼の時起りたる變事をは避け得しからん加之ならず渠等は水雷に關し貴重なる經驗を増せしとなるべし

復ツローンにての失錯に就て云はんは安全針を抜くべきことを忘却せし人々にして僅かに其過失を自白するの勇氣さへ持ちしならば此事は却て將來此の如き事に關し好ま警誠となりしからん

予か經驗を發表せる所以の幾分は前述の意志に基けり而して予は偏に予か寓意の空しからざるを望むものなり此等の事か若し僅かにても同様なる過誤を防ぐの材料ともあるを得ば予に取ては即ち是れ過分の報酬なり而して予は實に之れあるを疑はざるなり夫れ熟練を得るには實檢より好きはなし上士官より下兵員に至るまで誰れか其職務を不都合なく執行するを熱望せざるものあらんや然るに錯誤の此の如く多き所以のものは主として其經驗の乏しきに由るあり此の事に關し予か言の諄々たる或は贅辨の謗を免れざるべきも予は素人々か之を肝銘せんと欲するものなり是れ予か言の反覆丁寧なる所以なりとす凡そ教授の任に當る者の宜しく服膺すべきは所謂「經驗か吾等に教ゆ」(Experientia docet)と云へる語なり

るべきあり而して若し渠等にして教練に須要なる經驗を買ふに其の武器の毀損若くは亡失を以て償ふとを好まらるゝにあらすんは須らく此の經驗を積むとを企圖せらるべきものなり予は此の點に關し聊か裨益を與んとを努めたり而して唯予の期望の遂に空しからざるべきを希ふのみ此の冊子を出すに當り予か懐きし他の趣意は水雷の事に關し世の公衆をして従前よりは幾分か多く通曉せしめんとするにあり是れ一の經驗物語のとあれは彼の乾燥無味なる水雷書を顧みざる人に在りても或は一讀の勞を取るものあらんとを望みてなり

讀者或は云はん汝老猾奴、何の故に吾人に水雷の事柄を知らしめんと謀るや必定世間に向て己れの名聲を售るに汲々たるものならん

予は之に答て云はん

大に非なり予か公等に望む處は吾か海軍并に之に關涉する事物は如何なるものなるかと云ふとに通曉せしめんとするにあり好しや吾か部内の一科にもせよ其一班を知らるゝに至らば之を以て類推し吾か海軍は果して當さに然かあるべき程度までに効力を有するものなりや否やと云ふを判断し得らるべきあり今試に下院に於て海軍豫算案の提出せられたるときに議事録を一見せよ其の記する處果して如何彼の豫算案出るや否や多數の議員は其の席を退き去ると云ふに非ずや其の故何そや

是れ他なし渠等は吾か海軍のとに於て知る處わらず故に意に介せざるのみ世上誰れか己れの知らざるに對し冷淡からざるものあらん予は既に能く之を悟れり故に予は先づ公衆をして吾か海軍並に部内のことを知らしめ延て以て之に注意せしめんと欲するものなり今此の冊子を通讀するに於ては渠等は水雷あるものに關し其の幾分を知るを得べく而して水雷なる語に出會するも其何者なるを解するを得へし去れば此の語位日渠等の前に提出せらるゝに於ても其席を退かざるべく或は之を對岸の火災視せざるに至るへきなり此に於てか予の微志を繼ぐもの起り大砲のとに就て談するものあらん櫓と帆のとを著はすもの出ん又機關のとを序するものあるに至らん已に此の如くんは衆人は只此等の著書を読讀すれば即ち足るなり斯くの如くにして渠等は知らずく吾か強猛なる防衛をそ大英國を永く海王たるの位置に保持するものなるを自ら了解するに至るへきあり

予は一古語を引て以て此の章を結はん曰く「若しも平和を欲するからは戰に付ての用意をなせ」(Si vis pacem para bellum)

保氏水雷自叙傳下卷終

明治二十四年六月十九日印刷
明治二十四年六月二十日出版

東京市京橋區築地四丁目一番地

發行所 水交社

兼發行編輯人

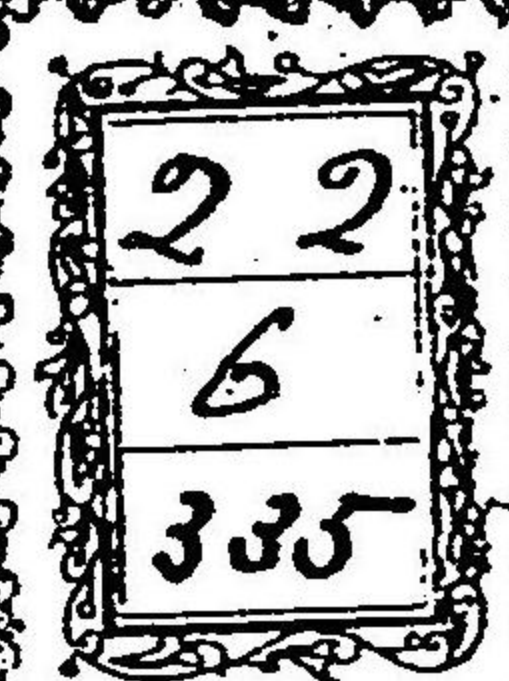
鈴木光長

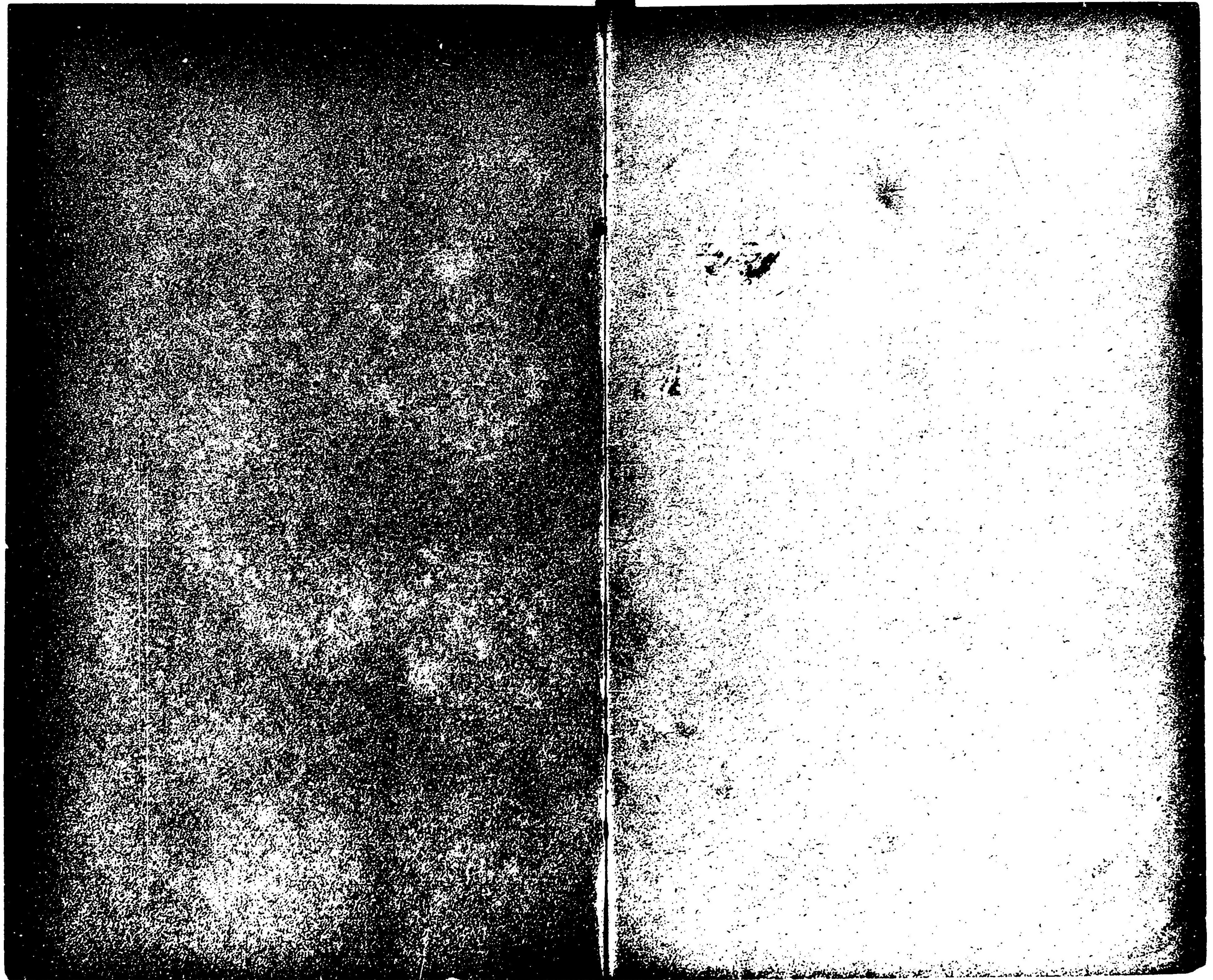
東京市京橋區築地
四丁目一番地寄留

印刷所

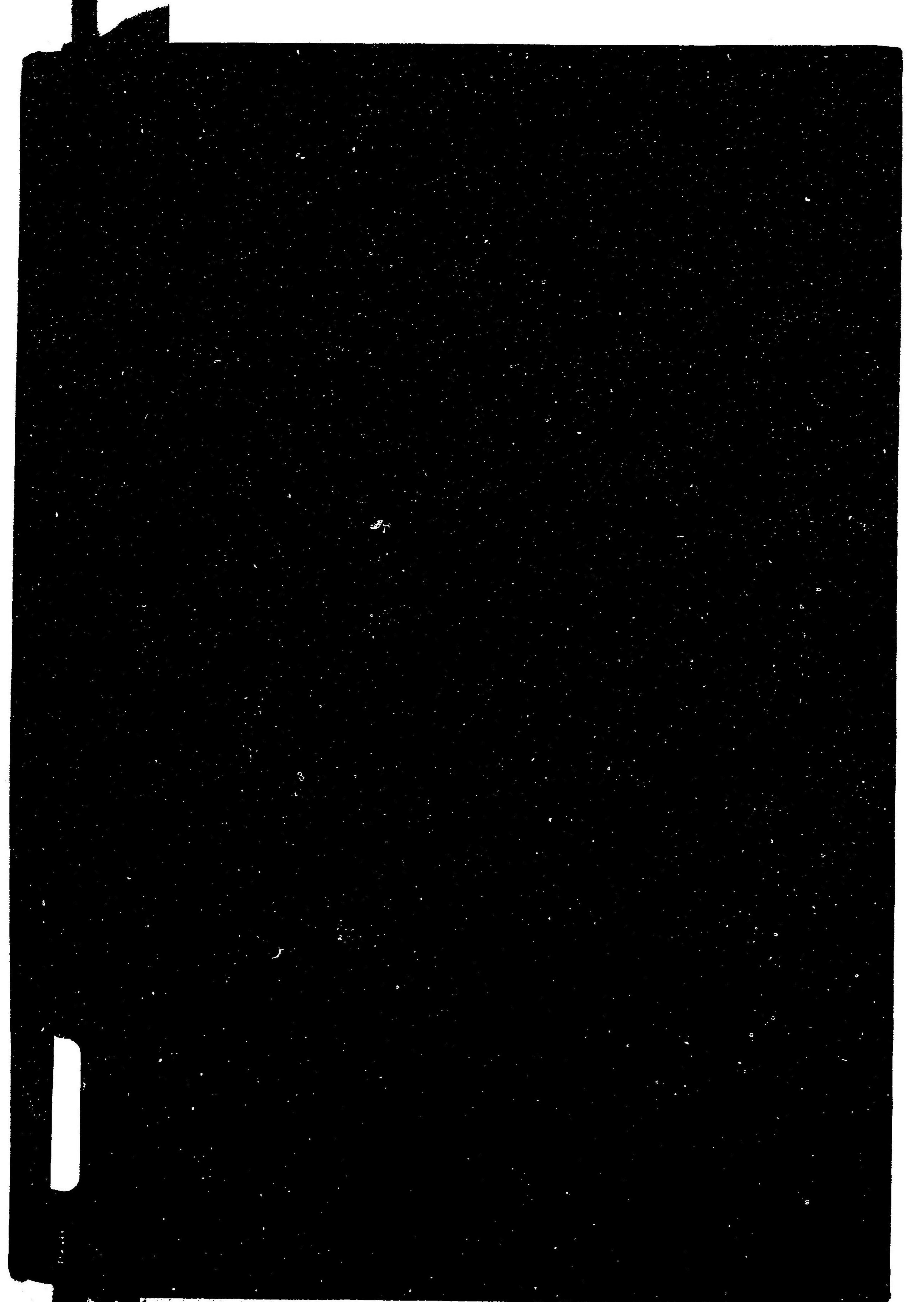
秀英舍

京橋區西紺屋町貳拾六七番地





22
335



22.

335

052719-000-3

22-335

水雷自叙伝(保氏)

鈴木 光長/編

M24

BFH-0203



